

平成22・23年期神奈川県青少年問題協議会報告

# 「地域で育む子どもの社会性」

～子どもの社会参画をすすめるために～

平成24年3月

神奈川県青少年問題協議会

# 目 次

## 第1章 テーマと本報告書の目的

1	テーマ設定について	1
2	報告の目的及び対象者	2
3	「社会性」及び「社会参画」に関する基本的認識	2
4	本報告書の構成について	3

## 第2章 子どもの社会性の現状と背景

1	現代の子どもの特徴	5
2	子どもを取り巻く環境	5

## 第3章 地域で子どもの社会性を育む必要性

1	地域で子どもの社会性を育む意味	9
2	低年齢期の子どもを対象とする意味	10

## 第4章 本協議会における実践と検証<概要>

1	11の視点を生かした取組の実践と検証	13
	～ぷちひらつか2011における実践と検証（平塚商業高等学校と社団法人平塚青年会議所）	
2	取組経験者による11の視点とその具体化策の検証	21
	～ミニヨコOB・OGによる検証（NPO法人ミニシティ・プラス）	
3	本協議会の審議への子どもの参画	23
	～特命子ども委員の活動記録と提案	
4	子どもを含む県民との意見交換	29
	～かながわ 子どもの社会参画をすすめるフォーラムの開催	

## 第5章 子どもの社会性を育む地域づくりのために

1	子どもの社会性を育む地域	35
2	地域で子どもの社会性を育むために重要なこと（10の視点）	35
3	今後の取組の方向性	41

## 参 考 編

1	第2章 子どもの社会性の現状と背景 説明図表	43
2	県内取組状況アンケートの結果について	52
3	本協議会における実践と検証<詳細>	
○	11の視点を生かした取組の実践と検証	55
	～ぷちひらつか2011における実践と検証（平塚商業高等学校と社団法人平塚青年会議所）	
○	取組経験者による11の視点とその具体化策の検証	71
	～ミニヨコOB・OGによる検証（NPO法人ミニシティ・プラス）	
○	本協議会の審議への子どもの参画	78
	～特命子ども委員の活動記録と提案	
○	子どもを含む県民との意見交換	84
	～かながわ 子どもの社会参画をすすめるフォーラムの開催	
4	取組事例と実践のヒント	94
5	今後の取組の方向性に関する参考資料	135
	（神奈川特命子ども地域アクター養成アクション）	

## 資 料 編

	「地域で育む子どもの社会性～子どもの社会参画をすすめるために～」について（報告）	137
	平成22・23年期神奈川県青少年問題協議会審議経過	138
	平成22・23年期神奈川県青少年問題協議会委員	139

## 第1章 テーマと本報告書の目的

### 1 テーマ設定について

- 現代社会では、価値観・ライフスタイルの多様化や生活の場の広がり等により、これまで以上に社会性や他者と関わる力が必要とされるようになった。そうした中で、青少年に係る課題の根底を成す問題の一つとして、子どもの社会性、コミュニケーション力の不足が指摘されるようになっている。

#### <社会性を育む取組の現状と、地域における取組の重要性>

- 近年は、近隣の高齢者との交流事業やボランティア体験、職場体験など、子どもの社会性を育むための取組が、幼児期から高校生期までの幅広い年齢層において、主に保育・教育機関における活動・授業の一環などとして進められている。
- 子どもの社会性が健やかに育まれるためには、それぞれの子どもの個性や感性が実体験の中で発揮され、子ども自身もそのことを実感できる環境が期待される。  
そして、日常生活に密着した地域社会は、子どもが生活者の視点から自ら社会性を育むことができる場面や機会の宝庫であり、実体験の場として活用していくことが重要である。

#### <対象を低年齢期とし、かつ社会参画まで含めて審議する趣旨>

- 社会性は、乳幼児から大人まで、常にその時々を経験を糧にしながらいより幅広く身につけていくものであるが、第3章で述べるように、特に他者への信頼感や自己への自信、他者と積極的に関わる意欲などの社会性は、低年齢期からの多様な他者との豊かな関わりの中で、自然に、時間をかけて身につけていくと考えられる。
- また、子どもの社会参画に関しては、中学生以降の教育機関において、主にキャリア教育、シチズンシップ教育\*<sup>1</sup>などの形で積極的に進められているが、主体的に社会参画できる力が身につけていくのは中学生以降であるとしても、その始まりの“芽”は低年齢期からも育むことができるものである。特に低年齢期は、親や周囲の大人の関わり方によって大きな効果が期待できる時期であると言える。
- そこで本報告では、あえて低年齢期（4歳から12歳程度の幼児期・学童期）を中心に、多種多様な人間関係があり他者と豊かに関わる力を育むことのできる地域社会（NPO活動や商店街等を含む）において、社会参加・参画できる力の芽を育むことを含めた、子どもの社会性を育むための方法・実践方策等について審議することとした。

---

\*1 キャリア教育、シチズンシップ教育（p. 1）

キャリア教育とは、「キャリア概念」に基づいて、「児童生徒一人一人のキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育」をいう。端的には、「児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てる教育」。

（キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書（平成16年1月28日）より）

またシチズンシップ教育とは、キャリア教育を含む「責任ある社会的な行動をとり、地域社会に積極的に参加するような、これからの社会を担う自立した社会人を育成するための教育」をいう。

## 2 報告の目的及び対象者

- 以上のような経緯から、当報告の第一義的目的は、地域における社会性育成のあり方や取組方法をとりまとめることであり、地域の方々が子どもの社会性向上の取組を進めていく刺激やガイドになり、それによって、子どもの社会参画をすすめる動きにつながっていくことである。また、第二義的には、当報告が、子どもの自己肯定感を励ますものとなり、子どもに向けて、子どもをきちんと受け止めていこうという大人達がいるというメッセージとなることである。
- そして、地域で子どもの育成に取り組んでいる方々や、これから社会の中心となり、いずれ保護者にもなっていく中学生期以降の子ども<sup>\*2</sup>・若者、保護者、加えて現在は子どもとの接点がない方も含めた全ての県民の方々に向けて、当報告を発信する。

## 3 「社会性」及び「社会参画」に関する基本的認識

第2章に入る前に、議論の前提として、当報告で言う「社会性」や「社会参加・社会参画」をどのようなものと捉えるかについて整理する。

### (1) 当報告における「社会性」

- 当報告では、特に低年齢期の子どもに身につけてほしい社会性について論じるため、社会性の意味を、狭義の社会性である対人関係能力を中心に考えながら、個人の社会的視野や広い世界への関心などの広義の社会性も視野に入れて捉えることとする<sup>\*3</sup>。
- これをわかりやすく表現すると、当報告における社会性とは、「友人、家族、地域の人々等の様々な他者と気持ち良く関わり合い、共同作業を一緒にできること」であり、それは、相手に対して思いやりを持つことや相手の気持ちを汲むことであり、何かトラブルが生じてもそこで人間関係を断つのではなく、次はうまくやろうと思い、工夫していくことである。  
さらには、「自分自身で目標を設定したり問題を発見したりして自分から行動を起こせることや、自分の行動に責任をもつこと」や「社会の役に立とうとする気持ち」であり、それは、人のためになることを自分から行うことであったり、誰に対しても公平に接しようとすることである。
- 本協議会では、そうした他者に共感できる資質などの社会性を育むことと、社会の役に立とうとする気持ちなどの社会参画につながる“芽”が育まれていくことを期待する。

---

\*2 当報告書の対象としての子どもについて (p.2)

審議対象は低年齢期（4歳から12歳程度の幼児期・学童期）の子どもであるが、報告書の理解には一定程度の読解力が必要であることから、当報告書の対象者としては、一定程度の読解力が身につけておりかつ低年齢期の子どもに近い立場として気持ちや考えを代弁できる中学生期以降の子どもを想定している。

## (2) 参加と社会参画の違い

- 社会参画は、参加の一形態であり、「社会のより良い発展のために必要な価値を創り出す活動への参加」を意味すると考える。

例えば、一般的な参加は「そこに行く」「そこにいる」「決められたことを実行する」ことで、必ずしも価値を創り出すことを伴わないが、社会参画は、自ら大人社会や地域コミュニティの現実の問題に取り組もうとする、社会的に一定の役割をもった活動であると考え\*4。

- 子どもの社会参画をすすめていくためには、大人が子どもの意見に耳を傾けるとともに、その意思を汲んだ取組を実際に行ってみることが重要である。そうした、子どもの意思が実現される場面を積み重ねることによって、子どもの意思が大人社会の動きに適切に反映されるようになり、社会全体の中での子どもの役割が明確になっていくと考える。

## 4 本報告書の構成について

本報告書の第2章以降の構成は、以下のとおりとなっている。

### 第2章 子どもの社会性の現状と背景

… 現代の子どもの特徴、子どもを取り巻く社会状況や生活環境を整理する。

### 第3章 地域で子どもの社会性を育む必要性

… 第1章及び第2章を踏まえ、子どもの社会性が必要とされる理由、地域で育むことや、低年齢期を対象とする意味について述べる。

### 第4章 本協議会における実践と検証<概要>

… 地域で子どもの社会性を育むために重要と思われる11の視点について、4つの実践・検証を行った結果を報告する。

---

\* 3 社会性について (p. 2)

「社会性」は、一般的には「社会生活を営む資質・能力」とされる(大辞泉)。また、学説としては、学会においてしばしば引用される繁多(1991)では、社会性は、狭義では「他者との円滑な対人関係を営むことができる対人関係能力」、広義では「その社会が支持する生活習慣、価値規範、行動基準などにそった行動がとれるという全般的な社会的適応性」とされている。

また、社会性の下位要素として、松永(2004)は、「自己形成の要素」「他者とのかかわりに関する要素」「学習集団やより大きな集団・社会に関する要素」の3つを挙げている。

また、田島・松尾・坂元(2008)は、社会性に該当する特性を以下の12に分類している。

- 1) 自分に対する自信
- 2) 自分をコントロールする力やそのような姿勢
- 3) 自分自身で自分のことを決められる力やそのような姿勢
- 4) 生活していく上での問題を防ぐ力や防ごうとする姿勢
- 5) 人生の重要事態に対処する力
- 6) 創意工夫する力やそうしようとする姿勢
- 7) ほかの人を信頼したり、理解する力やそうしようとする姿勢
- 8) 周りの人とうまく付き合う力や付き合いようとする姿勢
- 9) 社会のマナーやルールを守る気持ち
- 10) 社会の役に立とうとする気持ち
- 11) 世界の一員としての意識
- 12) 生命や自然を大切にすること

\* 4 参加と社会参画の違いに関して(補足) (p. 3)

一般的に、参加・社会参画という行為は、他者や社会との関係性の中で意味づけられるもので、子ども本人の主体的意思の有無や強弱だけでなく、子どもの意思が社会全体の中でどのように位置づけられ如何なる役割を果たすが、その行為が参加なのか社会参画なのかを判断するにあたって重要な意味を持つと考える。

## 第5章 子どもの社会性を育む地域づくりのために

… 子どもの社会性を育む地域像と、そうした地域づくりのために重要な視点について述べる。また、章の最後に、平成22・23年期の審議を踏まえた今後の取組の方向性と、本協議会からのメッセージを掲載する。

参考 … 各章の内容を補足するためのデータ、アンケート結果、第4章及び第5章の内容の詳細を掲載する。特に「4 取組事例と実践のヒント」(P94～)では、10の視点を実際の取組に生かしている15の事例を紹介する。

資料 … 本協議会の審議経過や委員構成などに関する資料を掲載する。

### 【社会参画とは】

自分たちが暮らしている社会のできごとに意見を言ったり、関わったりすることを「社会参画」と言います。社会参画の中でも特に「子どもたちが、自分たちが暮らしている社会のできごとに意見を言ったり関わったりすること」を「子どもの社会参画」と言います。

#### (解説)

一人ひとりの子どもは、子どもとしての権利と責任と尊厳(かけがえのなさ)を持つ市民です。

ですから、自分たちに関係することを大人たちが決めたり、その内容や結果を評価したりするときに、当事者(関係している人)としての自分たちの意見を言ってもいいし、実際に関わってもいいのです。

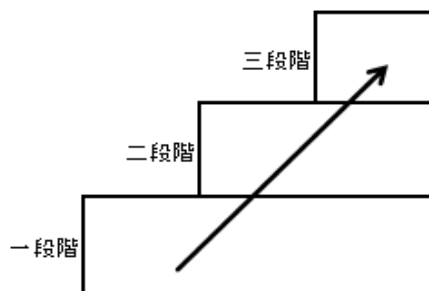
でも、子どもたちは、社会の仕組みやきまりなどについてまだ知らないことや経験していないことがたくさんあります。そこで、社会参画できる力をつけるために、小さい頃から発達に応じてだんだんと、行動したり発言したりする機会を持つことが必要です。

子どもたちは、大人たちと一緒にいろいろと活動する中で、社会の一員として責任を持って動いていけるようになるでしょう。

### 【子どもが社会参画に至る3段階の図】

#### 子どもが社会参画に至る3段階の図

※上の段階に行くほど子ども自身の主体性がともなう社会参画になる。



子ども自身が発案し、大人も巻き込み一緒に活動する。

子どもと大人と一緒に発案し、活動も一緒に行う。

大人が発案し、子どもは大人の指導で活動する。

※岸裕司氏が、ロジャー・ハートの「子ども参画の8段のはしご」を参考に翻案。  
※ロジャー・ハート著『子どもの参画』(木下勇ほか監修・IPA日本支部訳、萌文社、2000年10月)に「子ども参画の8段のはしご」の図は収録されています。

## 第2章 子どもの社会性の現状と背景

第2章では、1において現代の子どもに見られる特徴、2において子どもたちの置かれている社会状況や生活環境について整理する。

### 1 現代の子どもの特徴

#### ○ 出番を失って主体性を発揮できない子ども・役割を持たない「専門子ども」

現代の子どもは、子ども人口が減少する中で親が常に子どもを見ていて、行動に口を出したり手を差し伸べたりする状況が多くなっており、主体性を発揮しにくい。

また、勉強と遊びだけに専念する、いわば「専門子ども」が増えている。子どもの日常生活の中に、子ども同士の活動や家族以外の大人とともにする活動などの社会的な経験をする機会が少なくなり、家庭や地域において子どもの出番があてにされなくなっていることが大きな原因の一つであると考ええる。

【図1】人口に占める子ども(15歳未満)の割合の減少(p.43)

【図2-1から2-2】青少年の地域での活動への参加状況(p.43~44)

【図3】地域の行事への参加状況(p.44)

#### ○ デリケートで傷つきやすい子ども・未知への挑戦に消極的な子ども

家庭や地域で子どもが役割を分担する機会や、大人の働いている姿や役割を見ることが激減した現代においては、子どもにとって大人になることやコミュニティを形成する市民になることの生きた手本が見えづらくなり、大人になることの魅力や責任を実感しにくくなっている。

危険なことや失敗をさせないことが優先され、他者や自然と関わり、挑戦したり認められるなどして自分に自信を持つ機会や経験が減る中で、身近な対人関係に気を遣い、失敗することを恐れ、傷つきやすい。人と関わること、大人になること、社会に参加すること、未知の世界に挑戦することに消極的な子どもが増加しており、自己肯定感をもって物事に挑戦している子どもも多くいるものの、年齢が上がるにつれいろいろなことに挑戦しづらくなっているという状況がある。

【図4】自分の「いのち」を大切に思うか(p. 45)

【表1-1から1-2】学校の生徒自治活動に参加したい子どもの割合(p. 45)

【図5-1から5-3】自己肯定感につながる経験・意識の状況(p. 46)

【図6】生活体験と正義感・道徳観の関係(p. 47)

### 2 子どもを取り巻く環境

#### ○ 社会に参画する機会を奪われた子どもと、子どもの存在感の低下

現代の家族や地域社会は、情報化社会、消費社会化の進行とともに、かつての「共に働く家族・地域」から「個人単位で消費する家族・地域」へと変わってきている。

子どもは、家庭や学校では、保護と教育を受けるだけで、「子どもの仕事」を与えられないことが一般的になり、また地域でも、消費者・顧客として扱われ、地域の行事に参加し

てそこで「役割を分担する」機会は激減している。それが、「一人前の大人」になる上で不可欠な「仕事や役割を分担する」という経験を積むための場所や機会を子どもから奪うだけでなく、社会における「子どもの役割」を見えづらくし、子どもの存在感を低下させている。

【図7】家で手伝いをしている子どもの割合(p.47)

## ○ 「未熟な、教育を要する人」という子ども観と、効率優先の考え方

家庭や学校、地域における子どもの役割が減少したことで、日本の子どもは遊びと勉強だけに専念できる「専門子ども」になり、子どもを単なる「教育を要する人」と見なす子ども観が広がった。

また現代社会では、社会が経済の論理を中心に組み立てられ、子どもたちは、人間として生きることを学ぶ (Learning to be) \*<sup>5</sup>のではなくて、物質的な豊かさを得るために学ぶ (Learning to have) ことを方向づけられている。

厳格な時間配分や予測に基づく効率的な経済活動が重視され、例えば「子どもが失敗をしながら経験を積む」「子どもが人との関わりの中で生活に必要な能力を習得する」などといった、金銭や数値で計ることが難しい価値が公共的な価値として認められない社会では、そもそも、子どもの社会的役割を見出すのは困難である。

## ○ 地域でのつながりの希薄化と、地域の教育力の低下

現代はメディアやサービス産業のパーソナル化が進み、他者と関係を持たなくても生活でき、地域で社会的な役割を果たさなくても生きていくことが可能な社会になった。

そうした中、地域社会における子どもの果たす役割の見えづらさも相まって、地域社会で子どもを育てることの意義も認識されにくくなり、地域が子どもを育む力が低下している。

一方で、本協議会が県内の青少年育成関係団体に対して行った調査 (p. 52) によると、「地域で、『子どもの社会性を育む』『子どもの社会参画をすすめる』という視点から、子ども (4～12歳を含む、一部も可) を対象に行っている活動や取組はありますか」という問いに対し、「ある」「あると思う」と回答した団体は、全回答数 (512件) の約6割に達しており、地域で子どもの育成に取り組む方々の中には、子どもの社会性を育むことの重要性を感じている方が多くいることがうかがえる。

また多くの保護者が、地域社会に対して期待の気持ちを持っている。

【図8】地域の人たちとのつながり(p.48)

【図9】「地域の教育力」に関する認識(p.49)

【図10-1】子どもを育てる上で地域が果たすべき役割(p.50)

【図10-2】保護者の認識と実際の行動(p.50)

---

\* 5 Learning to be (p.6)

『学習：秘められた宝 ユネスコ「21世紀教育国際委員会」報告書』(天城勲訳・ぎょうせい1997年)より。当報告書の中で、「learning to be (人間として生きることを学ぶ)」ことは生涯を通じた学習の四本柱の一つとされている。



## ○ 必要とされる社会性やコミュニケーション能力の変化

日常生活においては、地域共同体の力が弱まっている。例えば、誰もが知っていることや、曖昧な表現でも理解できるなどの共通理解の基盤が失われたために、以前であれば、全てを言葉で伝えなくても、共通理解に基づいて以心伝心で理解し合えた内容も、誰にでもわかるように、また誤解を招かないような説明で伝えることが求められるようになってきている。また、職業においても、他者との交渉が特に重要になる第3次産業が拡大するとともに、社会の流動化が進んだことで、共通理解の基盤をもたない相手との人間関係にも柔軟に対応できるなどの社会性やコミュニケーション能力が、これまで以上に欠かせないものと考えられている。

## ○ 経験の逆転現象

インターネットの普及など技術革新の中で、例えば、子どもの方が大人よりもインターネットやパソコンに関する知識や経験が豊富であるなどの「経験の逆転現象」が生じ、単純に年長者の方が経験が豊富だとは言えない状況が生じている。

## ○ 子どもと保護者に対する、大人の厳しい視線

少年法改正による刑事罰の適用の低年齢化など、子どもに厳罰化の波が押し寄せている。成育過程にある子どもに、大人と同じ規範や判断を求めるなど、厳しい視線を向ける大人も増えている。

ただ、家庭での教育力の低下に関しては、地域社会で子どもを育てるという意識が希薄になったことで、結果として、子どもの教育やしつけについて以前より過大な期待が保護者に集中するようになり、家庭での教育力の低下が指摘されるようになったということも考えられる。

【図11】「家庭で子どもに十分しつけをしない保護者が増えている」という声について(p. 51)

【図12】地域から見守られていると感じるか(p. 51)

## ○ 親子関係の変化

地域のつながりの希薄化以上に、親の子どもに対する向き合い方が二極化しており、コミュニケーションが十分にとれている家庭もある一方で、子どもにどう関わっていったらよいかわからない親が増えている。また子育て相談の現場では、以前は「どう育てたらよいかわからない」という悩みを抱える親が多かったが、現在は「子どもを受け容れられない」という親も出てきている。

しかし、子どもにとって親との関係は、対人関係の最も基本となる重要な部分であり、親またはそれに代わる保護者との間で良好な関係が築けない場合、子どもは他者と気持ちよく関係していこうとする意欲を育んだり、それを言葉や態度で表現していこうというステップまで進むことが難しいとも考えられる。

### 〔 戦後の子どもの成育空間の変化について 〕

戦後の子どもの成育空間は、大きく分けて①農耕型社会のなごり、②工業型社会への移行、③情報・消費型社会の出現、の3段階に分けて変貌してきたと考える。

高度成長前の1960年頃までは、地域社会、地域共同体での人間形成が中心で、子どもたちの群れ遊び、大人の手伝い、年中行事への参加などが子どもを「一人前の村人」に育て上げる作用を果たし、あえて意図的な“教育”をしなくても、大人の周りで子どもたちが遊びながら大人の仕事を覚えているという「大人と一緒に生活」が自然に子どもを育ててきた。

そこでは、大人になることは「一人前の村人としての役割を果たし、周囲から承認されること」であり、周囲から承認されることによって子どもに誇りや自立への自信と意欲が湧き、次のステップへ進むという見えないシステムがあったように思われる。

それが高度経済成長期（1960年代から1975年頃）に入ると、高度経済成長・生産性の向上という背景の中で、経済優先理論に基づく効率的な個人の能力開発と自然開発が重視され、学校での「開発型」の人間形成に力点が置かれるようになる。

そこでは、大人になることは、学校の階段を上り、青年期に自己アイデンティティを確立して、会社（仕事）を選び、一人前の企業人（組織人）として生きることに変化し、生活や地域とは離れた企業・組織の中で生きるというライフスタイルが一般的となるとともに、もともと地縁のない新興住宅地などのニュータウンが次々と生まれ、子どもと自然、子どもと地域との分離、隔離が始まった。

そして1975年以降は、第3次産業就業人口が50%を超え、「生産の時代」から「消費の時代」への転換があり、消費型個人主義、自己愛の感覚が浸透していく。

高校進学率が90%を超え、この頃から不登校、高校の中途退学者が激増し、学校だけが子どもが育つ場所ではないという考えが広がってきた。地域から農耕型のコミュニティ意識が消え、都市型のコミュニティ形成も未熟な地域社会の現状の中で、大人になること、コミュニティを形成する市民になることの手本や魅力が見えづらくなっている。

### 第3章 地域で子どもの社会性を育む必要性

第3章では、第1章及び第2章を踏まえ、1（1）において子どもの社会性が必要とされる理由、1（2）において子どもの社会性を育む取組を地域ですすめる意味、2において、低年齢期の子どもを対象に論じる意味について述べる。

#### 1 地域で子どもの社会性を育む意味

##### （1）なぜ、子どもに社会性が必要とされるのか

- では、そもそもなぜ子どもが社会性を身につけることが必要なのか。

それは、他者と共同生活を営む上で不可欠だからである。人は、家庭、地域、学校、職場のどこでも共同生活をしている。子どもにとって、社会性を身につけることは様々な力の獲得につながる。

また、国や地域社会などのコミュニティが存在し、それがコミュニティとして持続していくことができるのは、そこでの共通ルールを学び身につけた大人が、社会的役割を担い、支えているからであり、次代を担う大人に子どもたちを育てていくことは、大人の責務であり、社会の責務である。そうした営みが繰り返されることで、今の社会があり、私たちがいる。

- 特に現代は、個人の自由が重視され、自律的に判断し行動する力が求められており、第3次産業人口の増加に伴い、他者と交流し交渉する力、社会の流動化の進行に伴い、新しい人間関係や社会状況に素早く適応できる力など、今までとは異なる社会性も求められるようになっている。

また社会性は、単に個人の資質としてばかりでなく、多様な人々がそれぞれのあり方を認めつつ一緒に生活を営んでいく“共生社会”を生きる上でも不可欠であり、そうした視点からも、社会性を身につけることの意味を考えていくことが重要である。

##### （2）地域の取組によって子どもの社会性を育む意味

- なぜ、地域で育むことが望ましいのか。

現状では、子どもの社会性は十分に育まれているとは言えない状況にある。それは、これまで第2章で述べたように、子ども自身に原因があるのではなく、むしろ、子どもを取り巻く大人社会の変貌や、現在の大人のあり方に起因すると言える。

- 日本の子どもの自己肯定感他国に比べて低いのが、それは、日本の子どもが能力的に他国の子どもより劣るというのではなく、社会参加やさまざまな社会体験などによって、自己肯定感を高めるような経験が不足しているためではないかと考える。それは、学校の同じクラスの身近な友達とだけ付き合い、それ以外の人とはつき合わないなどの対人関係のあり方や、異なる価値観が受け入れられにくい風土にも問題があると考えられる。
- そもそも社会性とは、様々な他者と交わり、自分とは異なる考えを知りながら培われる能力である。子どもの健やかな育ちのためには、それぞれの子どもの個性や感性

が実体験の中で発揮され、子ども自身も「自分にはこんな良いところがあり、それが十分に発揮できている」と実感できる環境が期待される。その意味で、学校における教育的視点からの体験活動に限らず、様々な体験の機会を創っていくことが望ましい。

- 子どもの社会性は、異年齢の子どもたちや、地域に住む家族以外の大人などとの“斜めの関係”<sup>\*6</sup>を含む、様々な人間関係の中でこそ、豊かに培われる。地域は、そうした関係の宝庫である。

例えば、家庭外で一人前として扱われることは、子どもに大きな自信を与えるし、地域では、様々な職業や考えを持つ大人たちを見ることや、多様な価値観や知恵を知り見識を広げること、あるいは多様な人間関係の中で、大人同士・異年齢同士の関わり方を間近に見ることもできる。「自分一人だけで生きているのではなく、人は人と一緒に生きている」「人は支えあって生きている」という感覚は、言葉で教えられて習得できるものではなく、実際の交わりの中で、子ども本人が実体験を繰り返して感じとることによってこそ、子どもの生活感覚のベースとなっていく。

- また、リアリティや生活感などは、地域でこそ感じられるものであり、そのような場で大人と子どもが関わりあうこと、抽象的なものではなく現実的な場面に直面すること、バーチャルではなく生活感覚として、子どもが体験することが大事である。
- さらに、地域は日々の生活に密接に絡んでいるため、小さな社会参画の機会がたくさんある。本協議会がめざしているのは、子どもが、このような小さな取組・活動を地域で積み重ねることで、社会性や社会参画の芽を育てていくことである。

## 2 低年齢期の子どもを対象とする意味

- なぜ、低年齢期の子どもを対象とするのか。

人が幸せに生きることの中には、地域社会の構成員として必要とされ、認められ、役割を持って生きることも含まれる。大人になったときに、地域社会の中で大人としての権利を行使し、責務を果たすためには、低年齢期から小さな実体験を積み重ねていくことが欠かせない。その中から、子どもは豊かに社会性を育み、徐々に社会参画していく過程を踏んでいくことができる。

- 子どもが主体的に社会参画できる力を育む取組は、キャリア教育、シチズンシップ教育などの形で積極的に進められているが、その対象は中学生期以降であることが多い。また、幼児期や学童期の子どもの場合、言語による自己表現力が未熟であり、実際に大人社会に対して意見を述べることは難しいと想定されるためか、社会参画する力を身につける時期としては、あまり論じられていない。

---

\*6 斜めの関係 (p.10)

親や祖父母、学校の先生との“縦の関係”、同年齢の子どもや同級生との“横の関係”とは異なる、異年齢の子どもや地域の大人との関係を言う。

- しかし、主体的に社会参画できる力が身についていくのは、中学生期以降であるとしても、その始まりの“芽”は、幼児期や学童期から育まなくては、急に獲得することは難しい。また、特に幼児期や学童期は、親や周囲の大人の関わり方によって、大きな効果が期待できる時期である。
- 幼児期や学童期に育むことが特に期待される社会性は、他者への信頼感や、自己への自信、他者と積極的に関わろうとする意欲など、社会性の中でも特に基礎となる部分であり、時間をかけてしっかりと育てていくことが、人間形成の上でも重要である。そうした部分を育てていく時期に、ゆっくりと時間をかけて、一人の大人、市民として重要な「主体的に社会参画できる力の芽」も共に育てていくことは、いずれ中学生や高校生、大人になったときに、自然に、自己を社会の一員として肯定的に捉えることや、社会で他者と交わる意欲や力を持つことにつなげていくことができる。
- また、年齢が上がるにつれ、いろいろなことに挑戦しづらくなっているという状況があることから、失敗を恐れずに挑戦することのできている幼児期や学童期に、主体的に社会参画できる力の芽を、育み始めることが望ましい。また、中学生・高校生期の子どもたちは、進学や就業などを控え多忙であり、その時期になって社会参画の重要性を説いても、子ども自身の肯定的な考えを引き出しにくいことが想像されることから、幼児期や学童期から、社会参画できる力の芽を育てていく意義は大きい。
- 子どもは未来を切り拓く力を持っており、それを上手に、より多く引き出していくことができれば、子どもは自らの力でより豊かな社会性を身につけ、社会参画していくことができると考える。
- さらに、子どもが社会参画することは地域の活性化にもつながると考える。経験のない子どもが地域社会の活動に加わることや、何らかの形で意思決定に関わっていくことは、将来の地域の担い手として育つだけでなく、現在の地域の活性化にとっても大きな意味を持っている。地域の活性化と子どもが自由に活動することは、つながっていると考えるべきである。  
その意味で、子どもの社会参画は「地域づくり」「まちづくり」でもある。子どもが潜在的に地域に求めているものと、それを受けとめる地域の役割とは何かを考えるなかで、子どもの社会参画の課題だけでなく、現在地域が抱えるさまざまな課題における解決の糸口も、見つけられるのではないかと考える。
- 以上より、中学生期以降の子どもを対象にした社会参画のための取組が、積極的にすすめられるべきであることは言うまでもないが、これまであまり意識されてきていない、あるいは時期尚早であると思われることの多い低年齢期の子どもに対しても、社会性を育む取組の中に、主体的に社会参加・社会参画できる力の芽を育む視点を併せ持つことが望ましいと考える。

## 第4章 本協議会における実践と検証<概要>

本協議会では、平成22年度の審議において、地域で子どもの社会性を育むために重要なこととして、まず、下記の11の視点を考えた。その上で、これらの視点を実際の取組の中でどのように生かせばよいか、既にどのように生かされているか、他にも大事な視点は何か、などについて実践と検証を行った。

### 地域で子どもの社会性を育むために重要なこと（11の視点）

- 1 大人がまず自ら行動し、子どもを巻き込む**  
まず大人が、地域の中でお互いに助け合いながら生活する姿を、子どもたちに見せる。
- 2 子どもと大人はパートナー**  
子どもと大人が、共に生き社会を形成していくという意識を持つ。
- 3 遊びを通して育む、大人が方向づけをしない**  
楽しさや「遊び」的な要素を大切にし、子どもの意欲や、続けて参加しようとする気持ちを引き出す。
- 4 自分にできることを見つけていく気持ちを育てる**  
子どもの「自分にできることを見つけていく」気持ちを自然に育てていく。
- 5 達成感・充実感を味わえる経験を増やす、子ども自身の潜在的な能力を引き出す**  
自分のすることに責任を持つ体験、誰かに助けを求めようとする体験などを通じて、子どもが本来持っている社会に参画していく力を引き出す。
- 6 異年齢、多世代が交流する**  
年齢や世代が異なる様々な人との関わりを大切にする。
- 7 疑似体験で終わらせない、現実の社会につなげていく**  
「子どもがつくる子どものまち」など、社会を疑似体験する取組を、実社会への関心につなげていく。
- 8 全ての子どもに知ってもらい、参加してもらおう**  
全ての子どもたちにとって関わりやすい取組となるよう工夫する。
- 9 協力者とは、互いのメリットとなる関係になるよう工夫する**  
取組を広げるための賛同者、協力者を増やせるよう、自分の側だけではなく、一緒に取り組む相手にとってもメリットになるような工夫をする。
- 10 子どもの気持ちを深く理解し調整できる人材が必要**  
子どもの考えを深く理解し、中立な立場を保ちながら、調整役となる人を取組に加えたり、そのような人材を育てるようにする。
- 11 今ある資源に、新しい視点で光をあてる**  
今ある地域団体やNPOなどが、(1)～(10)の視点を参考に、これまでの取組に、子どもの社会性を育み、社会参画をすすめるための新たな仕掛けを加える。

## 1 11の視点を生かした取組の実践と検証

～ぷちひらつか 2011 における実践と検証（平塚商業高等学校と社団法人平塚青年会議所）

※ 詳細は参考 3（P55～）参照

### （1）「ぷちひらつか 2011～キッズビジネスタウンひらつか～」の事業概要

#### ① 目的

小学生が企業、団体、模擬官公庁などで構成する一つの街の市民となり、そこで体験する仕事や消費などを通して、ともに協力しながら街づくりを行い、主体性と想像力をもって社会の仕組みを学ぶ。また、事前に子ども議員や市長によって構成される「子ども会議」において主体的に計画した街づくりを実践することにより、地域の課題点について考えるとともに問題解決力を育成し、生きる力を育む。

また、小学生を中心とした取組に高校生、大学生、大人が協力・参画して運営することにより、キャリア教育としての側面を分かち合い、地域づくりの一助という共通の目的に向かって協働することの大切さを学ぶ。

さらに、平塚商業高校チャレンジショップなどと連携したプレ事業を実施し、上記の目的を達成する一助とすると同時に、「ものづくり、政策」をキーワードとした展開を意識することにより、高いレベルで目的を達成することをめざす。

#### ② 事業内容

事業は「子ども会議」、「プレ事業」、「メイン事業」の3つで構成される。

##### ○子ども会議

- ・ 「子ども議員」は「子ども会議」の一員として活動する。
- ・ ぷちひらつかのデザインを事前に行う。
- ・ 事前調査、交渉、広報活動を行う。
- ・ メイン事業において、街の運営とぷち市民会議を運営する。

##### ○プレ事業

- ・ 体験により学び、発表を行う。
- ・ 体験により学び、ものづくりを行う（第2通貨支給）。

##### ○メイン事業

###### <参加児童の流れ>

- ① 「受付」にて市民証を提示し、出席確認後、定められた最初の行動を実施。
- ② 「職安」にて体験したい仕事を選び、「職業カード」を受け取る。その後、各ブースに移動し仕事をする。なお、体験時間は基本的に1時間とする。
- ③ 仕事終了後「銀行」に行き、給料（域内通貨「ぷち」）を受給する。
- ④ 参加児童は受け取った域内通貨「ぷち」のうち10%を所得税として「税務署」にて納税する。
- ⑤ ②～④を繰り返すか、「ぷち」を買い物で消費する。

リアル店舗で使用できる「ゴールド」は銀行にて両替を行う。

※ 「銀行」開店時は域内通貨「ぷち」を預金可能。

ただし「ゴールド」は預金できない。

⑥ 「市役所」にて終了作業を行う。

#### ＜消費活動のみ参加＞

・ 抽選の結果参加できない児童であっても、昨年までの貯金を用いて消費活動に参加できる。受付を行い、バンダナ、通帳（市民証を兼ねる）を渡す。消費活動終了後、帰宅時には市役所へ寄り市民証を返納することで、小学生のまちへの出入を管理する。

・ まちかど商品券（まちかど広場のチャレンジショップで販売）を購入した大人は消費活動（模擬店のみ）に参加できる。但し、消費時に釣銭は払わず、また現金への換金も不可とする。交換枚数：1,000円→2,200ぷち=200ぷち×11枚

※ 1,000円のみでの交換しか行わない代わりに、120%のプレミアを付ける。

### （2）視点・項目の選択と選択理由

11の視点のうち3つ以上を、また、新たな視点の追加や、11の視点の修正等を検討する項目を選択して実践し、その結果に対して検証を行うこととなっており、以下の視点及び項目を選択した。

#### ① 11の視点の選択及び理由

「4 自分にできることを見つけていく気持ちを育てる」という視点

… 子ども会議事業が組み立てていくメイン事業は、対象年齢が6歳から12歳と幅広く、また、子ども会議準備委員会としても主体的な街づくりを行ってほしいという願いから選択した。

「6 異年齢、多世代が交流する」という視点

… 「ぷちひらつか2011～キッズビジネスタウンひらつか～」全体像を考えたとき、小学生、中学生、高校生、大学生、専門学校生、個人事業主、教職員他、多くの人たちが交わってキャリア教育という側面で事業が形成されている一面があるため、選択した。

「7 疑似体験で終わらせない、現実の社会につなげていく」という視点

… 本物の商店で働く体験を実現し、さらに模擬通貨を実際の商店街で使用できる仕組みを検討する方向性をめざしたため、選択した。

#### ② 新たな視点の追加や、11の視点の修正等を検討する項目の選択及び理由

「ア 子どもに役割を与えること」

… 子ども会議事業において、児童は単なる受け身でなく、自ら主体的に考え行動し、役割を担っていくことをめざしたいと考えていたため、選択した。



「イ 鍵となる場所を定めることで、地域の大人が参加でき、現実社会につなげられる展開とすること」

… メイン事業会場として実際の商店街を含むエリアを選択し、その中で現実社会と絡んだ展開、具体的には本物の商店でのミニインターンシップを実現していく方向性があったことに加え、「ものづくり、政策」をキーワードとして展開することをめざしたため、選択した。

「ウ 支援者を組織化し、ノウハウを伝承するしくみをつくること」

… 主催者が計画的に支援者を募ることに加え、大学生団体を含め参加児童に絡む支援母体を模索することが本事業全体における今後の検討事項となる可能性があったため、選択した。

### (3) 視点別実践内容と方法

#### ① 11の視点

「4 自分にできることを見つけていく気持ちを育てる」という視点

##### ○ 事前の子ども会議

＜実践内容＞

話し合い（白紙状態から主体的な街づくりの発想を導く。補助としてワークシートで展開）

＜方法＞

事前の子ども会議においては、「自分にできることを見つけていく気持ちを育てる」ためには各子ども議員の発想を大切な要素と考え、子どもたちの発言から実現可能なアイデアをピックアップし、具現化させていくという方向性で話し合いを進める、など。

##### ○ メイン事業

＜実践内容＞

仕事のないぷち市民の行動シーン

＜方法＞

子ども議員の活動拠点となる市議会ブース前に、仕事のないぷち市民が集まり、希望制で仕事につく。それを子ども議員がサポートする。

「6 異年齢、多世代が交流する」という視点

##### ○ 事前の子ども会議

＜実践内容＞

事業全体

＜方法＞

小学生のリード役を高校生が実施、それを大学生がまとめ、大学生の相談を主催者である大人（平商教職員、平塚JCメンバー）が実施、その見学を保護者が行い、必要により主催者へ提案を実施した。

## ○ プレ事業 1（平塚 J C 主催「地域の魅力発見」）

### <実践内容>

事業全体

### <方法>

平塚 J C が地域の B 級グルメを集めてイベントを実施したが、子ども議員を招き見学や試食をすることで、地域の活性化を考えさせると同時に、地域の大人と交流することをめざした。

## ○ プレ事業 2（平商主催「チャレンジショップにおけるものづくり体験教室」）

### <実践内容>

事業全体

### <方法>

ものづくり体験教室に参加する子ども議員及びその家族や友人に対して、大学生、保護者および専門家が指導を行いものづくりを実施。それを平商チャレンジショップ委員（高校生）や教職員がバックアップした。

## ○ メイン事業

### <実践内容>

事業全体

### <方法>

小学生、中学生、高校生、大学生、商店街に絡む大人、主催者等、様々な人間が絡み事業が成り立っている。

## 「7 疑似体験で終わらせない、現実の社会につなげていく」という視点

### <実践内容>

（事前の子ども会議）話し合いの中で、現実社会につなげていく内容の導き

（プレ事業）ものづくり体験教室の実施

（メイン事業）商店街店舗での仕事体験、商店街で通貨を使える取組とそれに絡む為替及び変動為替の実施

### <方法>

「商店街での実施」を提示し、提案された内容を実施する、など。

## ② 新たな視点の追加や、11 の視点の修正等を検討する項目

### 「ア 子どもに役割を与えること」

## ○ 事前の子ども会議

### <実践内容>

市長決め、委員会活動、選挙管理委員会活動

### <方法>

- ・ 市長決めは例年通りであるが、決め方に関して議論を行い、立候補の条件整備、選挙管理委員会の立ち上げなどを考えさせた。

- ・ 委員会活動に関しては、子ども会議事業を効率的に進めるために、子ども会議準備委員会からの提案として実施した。具体的には「リアル店舗模擬店委員会」、「ステージ委員会」、「政策金融委員会」に分け、それぞれが活動を展開した。

## ○ メイン事業

### <実践内容>

- ・ 参加児童に仕事、消費という役割を与える。
- ・ 子ども議員に役割を与える。

### <方法>

- ・ 参加児童は仕事、消費を通じて街に参加する。
- ・ 子ども議員に対して、委員会活動、ぶち市民会議、開会式及び閉会セレモニーにて役割を与える。

「イ 鍵となる場所を定めることで、地域の大人が参加でき、現実社会につなげられる展開とすること」

## ○ メイン事業

### <実践内容>

メイン事業は、紅谷町まちかど広場を拠点として展開する。また、ものづくりの拠点を手づくり食工房とする。

### <方法>

道路使用許可、まちかど広場使用許可など、行政や地域の協力を得る。

「ウ 支援者を組織化し、ノウハウを伝承するしくみをつくること」

### <実践内容>（事業全体において）

- ・ メイン事業運営スタッフ会議（協賛企業団体の組織）
- ・ 子ども会議準備委員会（大学生、高校生の組織）
- ・ ものづくり体験教室実施における保護者有志の協力組織

## （４） 視点を盛り込んで事業を実施した結果としての課題、意見及び提案

### ① 事業実施の前提

事業としての大きな方向性は、昨年の平成 22 年実施で固まった。その内容の主だったものを、昨年の実施報告書総括に、下記のとおり記述した。

ア 人同士がつながり、連携をすること自体は大きな財産であり、その中で学びは多岐にわたる。今年の実践により、より多くの「財産と学び」を得た。

イ 平商の持つ「キッズビジネスタウン」の財産と、平塚 J C が持つ「ぶちひらつか」の財産が融合し、地域の財産である「小学生や中学生、高校生」といった将来を背負う人材そのものの「資源強化」を行った。

その一方で、昨年実施内容の改善点として以下の内容が挙げられた。

ウ 子ども会議の充実

エ 主催者相互の隔たりの克服

以上を改善することを前提に今年の事業展開を計画して進めてきた。

## ② 事業実施の方向性

### <前年度の反省を踏まえた事業委託に関する検討事項>

上記①の改善を前提として計画を進める中、平成 22・23 年期神奈川県青少年問題協議会より、11 の視点の実践検証の提案がされたが、検討した結果は以下のとおりである。

上記①ア「人同士がつながり、連携をすること自体は大きな財産であり、その中での学びは多岐にわたる。今年の実践により、より多くの『財産と学び』を得た」の内容に関連し、11 の視点「6 異年齢、多世代が交流する」という視点に絡め検証することは、有効であると考えた。

上記①イ「平商の持つ『キッズビジネスタウン』の財産と、平塚 J C が持つ『ぷちひらつか』の財産が融合し、地域の財産である『小学生や中学生、高校生』といった将来を背負う人材そのものの『資源強化』を行った」の内容に関連し、11 の視点「4 自分にできることを見つけていく気持ちを育てる」という視点及び「6 異年齢、多世代が交流する」という視点を検証することは有効であると考えた。

上記①ウ「子ども会議の充実」に関連し、今回の事業に対しては「子ども会議」を実施するための組織作りが必要と判断していたのだが、このことが、選択したすべての 11 の視点及び新たな視点の追加や、11 の視点の修正等を検討する項目に関連することから、子ども会議を事業として切り離し、検証を実施する場としてふさわしいと考えた。とりわけ、新たな視点の追加や、11 の視点の修正等を検討する項目「ウ 支援者を組織化し、ノウハウを伝承するしくみをつくること」は、子ども会議を運営するための組織作りの後押しとなると考えた。

上記①エ「主催者相互の隔たりの克服」に関連し、今回の事業に対してはリアルさのイメージを、商店街での実施という要素と絡めてフォーカスするために、実践・検証を行う視点は、事業内容を確定する後押しとなると判断した。

11 の視点「7 疑似体験で終わらせない、現実の社会につなげていく」という視点を選択し、子ども会議事業を進めつつ、新たな視点の追加や、11 の視点の修正等を検討する項目「イ 鍵となる場所を定めることで、地域の大人が参加でき、現実社会につなげられる展開とすること」を検証するために、事業内容を確定することが可能であり、さらに子ども会議の方向性が定まる、と考えた。

## ③ 実施結果

### ア よかった点

- ・ 視点を意識して事業展開を行うことにより、事業のフレームが崩れず、計画から実行までの流れがスムーズであった。具体的には商店街店舗における活動や為替に関する内容等が挙げられる。
- ・ 視点の検証をすることを考えたときに、事業自体の整理及び実施に絡む主催者をはじめ

とした組織の整理整頓が進んだ。

- ・ 多くの視点から選択した、という事実から、選択した視点自体が他の視点よりも、より有効であるというイメージに基づき行動することができた、など。

#### イ 課題

- ・ 視点をいつも意識できるわけではなく、「視点に関する検討」という限定題目に対して、事業最中は実施できなかった。
- ・ 前年の実績においてすでに検証がある程度できている「安全」と思われる項目を選択している面があり、もう少し別の視点を取り入れてもよかったのではと思われる。反面すべての視点に関連した事業展開であるということも言える。
- ・ 商店街は広域であるため、レギュラースポットの人が集まれる場所をキースポットとして、ということに対しては時間が必要と感じた。偶然紅谷町まちかど広場があるという状況であったが、フリースポットでもあり、この部分は視点に沿ったものであるとはいいがたい。

#### ウ 提案のための検討

- ・ 11の視点「4 自分にできることを見つけていく気持ちを育てる」について、この対象となるのは子どもたちだけではなく、「小学生から大人までのキャリア教育としての位置づけであるぷちひらつか」と考えたときに、それぞれの立場で学びがあり、それは大人も同じである、という相互教育の場としての視点は興味深いものだ。
- ・ 11の視点「6 異年齢、多世代が交流する」という視点について、交流自体は難しいことではないが、その絡み方、こと意図的にとなると、そこに教育が生まれ、これは閉鎖型の学校教育では得られない非常に有効なシーンが多く、この部分を含めた視点への修正もあり得るだろう。
- ・ 11の視点「7 疑似体験で終わらせない、現実の社会につなげていく」という視点及び新たな視点の追加や、11の視点の修正等を検討する項目「イ 鍵となる場所を定めることで、地域の大人が参加でき、現実社会につなげられる展開とすること」について、現実の社会、現実社会というものが何をさすのか分かりづらいので、時間軸で考えた今現在の現実社会、すなわち大人の働く世界であるのか、将来子どもが大人になったときに体験する現実社会なのか不明確である。
- ・ 新たな視点の追加や、11の視点の修正等を検討する項目「ウ 支援者を組織化し、ノウハウを伝承するしくみをつくること」について、ノウハウ蓄積型のイベントであるぷちひらつかは、将来街を担うであろう小中高校生のための学習形態の一つ、と捉えたとき、①事業自体の長期計画性、②事業に参加した人たちがその後街でどう活動していくか、という切り口も有効だろう。

#### (5) 11の視点の追加・修正案

##### ① 視点の追加案 → 「子どもは将来の地域を担う」という視点

(提案理由) 新たな視点の追加や、11の視点の修正等を検討する項目「ウ 支援者を組織化

し、ノウハウを伝承するしくみをつくること」を考えると、ノウハウ蓄積型のイベントであるぷちひらつかは、将来街を担うであろう小中高校生のための学習形態の一つ、と捉えたとき、①事業自体の長期計画性、②事業に参加した人達がその後街でどう活動していくか、という切り口が有効であると考え、特に②を重要視し、提案する。

② 視点の追加案 → 「背中を見せる」という視点

(提案理由) ぷちひらつかにおいては、いろいろな年代、職種、様々な学校に通う人間が集まり、分け隔てなく展開する。その中では、言葉で導くのではなく、人間自体がぶつかり合い、理解するという側面を持っており、「背中を見せる」という文言の中には、言葉で語れないものを感じる、大人はきちんと振舞うなど、深みのある視点だと思い、提案する。

③ 11の視点「4 自分にできることを見つけていく気持ちを育てる」という視点の修正案

→ 提案しない

検討したが、大人・子どもに関係なく、参加者全員が事業の中でできることを探すという視点自体は主役である小学生のみならず、「保護者」のあり方や運営側の立ち居振舞いを考える意味でも有効であると考えたが、よい文言が見つからず、できればこういった意味を含んだ視点を追加したい。

④ 11の視点「6 異年齢、多世代が交流する」という視点の修正案

→ 「異年齢、多世代、多くの社会的立場を持つ人達の交流」

(提案理由) 「交流した結果どうなったか」を考えたときに、交流する人間の立場を踏まえた意図的な絡み方によって、多くの人間が同時多発的に交流する事業は、ある程度の想定のもとで実行されることとなる。一見慎重に思われるかもしれないが、社会的立場を視点として意識することにより事業展開に深みが増すため、提案する。

⑤ 11の視点「7 疑似体験で終わらせない、現実の社会につなげていく」という視点の修正案 → 11の視点「7 疑似体験で終わらせない、将来的に現実社会につなげていく」という視点

(提案理由) 現実の社会というものが何をさすのか分かりづらく、時間軸で考えた今現在の現実社会、すなわち大人の働く世界であるのか、将来子どもが大人になったときに体験する現実社会なのか不明確である。

今回の修正では「将来的に」とつけることで限定的な取り扱いとなってしまうため、新たな視点の追加や、11の視点の修正等を検討する項目イに関して、以下のように修正することを併せて次のように提案したい。

⑥ 新たな視点の追加や、11の視点の修正等を検討する項目イの修正案

→ 鍵となる場所を定めることで、地域の大人が参加でき、リアルな現実社会につなげられる展開とすること。

## 2 取組経験者による 11 の視点とその具体化策の検証

～ミニヨコOB・OGによる検証（NPO法人ミニシティ・プラス）

※詳細は参考3（P71～）参照

### （1）主な業務工程

平成 23 年 6 月 19 日 「ミニヨコ電子本プロジェクト会議」を行い、今までの 4 年間の歴史を振り返る。

平成 23 年 8 月 14 日 U-19 シンポジウムを開催し、こどものまちを通した「社会参画ができるために必要なこと」について議論。

平成 23 年 9 月、10 月 報告書の作成

### （2）検証の手順

- ① 活動している子どもたちからのコメント収集（6月～8月にかけて）
- ② コメントの集約結果を踏まえた検証（9月、10月）
- ③ 報告書のまとめ

### （3）検証した視点及びまとめ

まず、視点「2 子どもと大人はパートナー」、視点「3 遊びを通して育む、大人が方向づけをしない」は、ミニシティにおける特徴であり、どのミニシティでも当てはまっていた。大人が見守りという立場を取っていることから、どの子どもも自分の思い通りに活動できると満足している。しかしミニシティは、準備や運営などの面でも、大人のサポートなしには運営できない。

意見の中には「大人はお助けマン（小学6年・女）」であるというものもあり、視点「10 子どもの気持ちを深く理解し調整できる人材が必要」であるという視点にも当てはまるのではないかと考える。これは大人に限らず、子どもと年齢の近い大学生ボランティアや、ミニシティを中心になって進めていく高校生の存在もあると考える。子どもだけで進めていく中で、大人に頼らず失敗したが、そこで自分自身で考え、行動したこと、それが成長に繋がっていると感じている子どもが多い。その失敗から学ぶことが、視点「4 自分にできることを見つけていく気持ちを育てる」、視点「5 達成感・充実感を味わえる経験を増やす、子ども自身の潜在的な能力を引き出す」ということにつながっていると考える。

またミニシティは、サポートしてくれる大人、大学生がおり、学校、年齢に関係なく友達を作ることのできる場所となっていて、視点「6 異年齢、多世代が交流する」にも当てはまると考える。ただ友達を作るだけではなく、一緒にミニシティづくりをしながら、教えたり教わったりしながらの中で交流が生まれると考える。このような異年齢・多世代が交流することが、視点「7 擬似体験で終わらせない、現実の社会につなげていく」にも当てはまる。仕事場に体験をさせてもらいに行き教えてもらうことは、多世代の交流にもなり、社会に繋がる経験にもなる。このような体験を通して大人が頑張っている所を見せ子どもに影響を与えられることが、視点「1 大人がまず自ら行動し、子どもを巻き込む」という視点につながるのではないかと考える。

他にも、今後も他の子どもたちにこのイベントの楽しさを知ってもらいたいと考えている子どもも多いことから、視点7の現実の社会につながっていく長いイベントになると考える。またこ

れは、視点「8 全ての子どもに知ってもらい、参加してもらう」にもつながる。

#### （4）地域での取組に取り入れるための課題

ミニヨコOB、OGは、ミニヨコでの経験から、こういった子どもの社会性を育むためには、「大人」と「異年齢との交流」が重要になってくるのではないかと考える。

また異年齢との交流は、ミニヨコは19歳以下のまちなのでその中では自然と行われている。特にボランティアの大学生や中心になってミニヨコを進めていく高校生の存在は、子どもたちと年齢が近いため色々な場面で大人と子どもとの間の架け橋になっている。また大学生が見本を見せていくことで、子どもたち自身も自分の将来が描きやすくなるのではないと思う。このように大人と子どもとの間のクッションになる存在をいれることも、子どもだけのまちであるミニヨコには欠かせないことだと思う。

11の視点「9 協力者とは、互いのメリットとなる関係になるよう工夫する」とあるが、ミニヨコではそれが課題なのではないか。もちろん大学生や地域の企業など色々な方の理解、協力を得て運営されているが、やはり大人のボランティアは少なく、準備に戸惑うことが多い。より多くの人にメリットを感じてもらい、またボランティアに来たくなるような環境をどう創るかが課題だと感じている。

#### （5）新たに加えるべき視点

新たに加えるべき視点として、「強制的に社会参画の機会をつくること」に関係することとして、ミニヨコは来てもらって、体験してもらってこそ、良さや楽しさが分かるイベントであるため、周りの大人がキッカケづくりをするということは重要なのではないと思う。ただしこの“強制的な参加”というのはあくまでもその場に行くということであり、これが継続的な社会参画につながるわけではない。このキッカケづくりは新たな視点「日常活動の中で、大人がさりげなく助言すること」にも当てはまると考える。

また、このような子ども中心のイベントでは子どもが必要としているとき、注意しなければいけない時などのタイミングをみて助言することが必要であると思う。子どもが周りのすすめなどのキッカケから参加し、活動を通して視点1、2、3のような経験をすることで、継続的な参画になるのではないかと考える。



### 3 本協議会の審議への子どもの参画 ～特命子ども委員の活動記録と提案

※詳細は参考3 (P78～) 参照

平成22・23年期神奈川県青少年問題協議会の最終報告をまとめるための実践と検証の方法の一つとして、子どもの視点から審議に参画し、最終報告に向けた意見を提案してもらうために、中学生、高校生の特命子ども委員を任命した。

#### (1) 任期

平成23年7月1日～平成24年3月31日

#### (2) 役割

- ① 神奈川県青少年問題協議会の審議過程に子どもの視点から参画し、最終報告に向けた意見を提案すること
- ② 子どもを含む県民の意見を広く集めるためにフォーラムの形で実施する第8回企画調整部会の内容や運営方法に対して、子どもの視点からアイデアを提案し、子どもの社会参画の取組に対する好印象や、今後地域で実施される取組への参加意欲を参加者に持ってもらふこと

#### (3) 設置に至る経過

平成23年3月24日(木)

第2回神奈川県青少年問題協議会において、中間報告の実践・検証方策の一つとして、設置を決定

同年4月11日(月)～5月11日(水) 公募

同年5月12日(木)～31日(火) 選考(書類及び面接)

同年6月1日(水) 決定、選考結果の通知

#### (4) メンバー

中学生、高校生計8名

氏名	住所	年齢
あだち ひめみ 安達 妃美	横浜市	16
かとう わかば 加藤 わかば	厚木市	16
すが ちかこ 菅 千華子	厚木市	16
すがわら あかり 菅原 朱里	横須賀市	14
みやさか わかな 宮坂 和郁奈	川崎市	14
みやじま なつみ 宮島 菜摘	横浜市	16
やまぐち だいちろう 山口 大地郎	小田原市	14
やまだ えみこ 山田 恵美子	小田原市	16

※あいうえお順。年齢は平成23年4月1日時点

(5) 特命子ども委員の活動の記録

日時、会議名	議題・内容	活動内容
平成 23 年 7 月 28 日 (木) 第 3 回協議会・ 第 7 回企画調整 部会	1 第 8 回企画調整部会 (フォー ラム) について 2 県民向け事例集 (素案) につ いて	・会長である知事からの任命 ・各特命子ども委員より自己紹介 ・第 7 回企画調整部会の始めに、 菅特命子ども委員がアイスブ レイキングを実施した。 ・第 8 回企画調整部会で、特命子 ども委員がやってみたいこと について発言した。
平成 23 年 8 月 3 日 (水) 第 1 回ワーキン グ会議	第 8 回企画調整部会 (フォーラ ム) について ・全体の概要やねらいを理解する ・やってみたい企画の内容につい て、お互いの考えを聞き、特命 子ども委員として何をやるか 具体的に決定する ほか	特命子ども委員がやってみたい ことについて話し合い、企画を絞 った。
平成 23 年 8 月 30 日 (火) 第 2 回ワーキン グ会議	第 8 回企画調整部会 (フォーラ ム) について ・子ども委員としての企画等を決 定し、具体的な役割分担や、当 日までの準備の進め方を決める ・このフォーラムが、参加してく れた子どもたちにとって良いも のになるようにするためにはど うしたらよいか、運営の方法な どを考える ほか	特命子ども委員がやってみたい 企画について、役割分担を決め、 詳細を詰めた。
平成 23 年 9 月 19 日 (月) 第 3 回ワーキン グ会議	第 8 回企画調整部会 (フォーラ ム) について ・オープニングセレモニーや全体 会などの進行や分担について考 える ・特命子ども委員企画に必要なも のや準備のスケジュールについ て考える ほか	特命子ども委員が担当するオー プニングセレモニー等について、 実際の進行や役割分担を考えた。 また、特命子ども委員企画に必要 なものや準備のスケジュールを 考え、実際の準備作業を行った。
平成 23 年 10 月 15 日 (土) 第 8 回企画調整 部会 (フォーラ ム)	内容については、本章 4 「子ども を含む県民との意見交換～かな がわ 子どもの社会参画をすす めるフォーラムの開催」のとおり	オープニングセレモニーや、全体 会の進行を行った。また、特命子 ども委員が企画した各ブースや 分科会を通じて、子どもの社会性 を育むことや子どもの社会参画 について、主に子どもの参加者に 理解してもらい、意見をもらっ た。
平成 23 年 11 月 13 日 (日) 第 9 回企画調整 部会	○<報告事項>第 8 回企画調整 部会 (フォーラム) について 1 最終報告 (素案) について 2 県民向け事例集 (案) につい て ほか	第 8 回企画調整部会において、特 命子ども委員が企画・実施したプ ログラム等について報告を行っ た。また、最終報告 (素案)、県 民向け事例集 (案) について発言 した。

日時、会議名	議題・内容	活動内容
平成 23 年 12 月 26 日 (月) 第 4 回ワーキング会議	1 最終報告に向けた提案の取りまとめ 2 かながわ 子どもの社会参画をすすめるキャラクター募集 応募作品の選考	最終報告に向けた特命子ども委員としての提案の内容について話し合った。また、かながわ 子どもの社会参画を進めるキャラクター募集への応募作品の中から、優秀作品 5 点を選考した。
平成 24 年 3 月 27 日 (火) 知事報告	知事へ最終報告を行った。	

## (6) 最終報告に向けた特命子ども委員からの提案

### ① 子どもの社会参画とはどういうものか。どう説明すれば、子どもに伝わりやすいか。

- 自らの体験を踏まえて考える子どもの社会参画とは
  - ・ 地域の人を元気にすることや笑顔にすること
  - ・ 地域の人とコミュニケーションをとること
  - ・ 地域には、友だちや学校の先生を含め、色々な人がいるが、障害をもった人にも同じように接するなどして、皆が皆を理解し合おうとすること
  - ・ 皆で理解し合い、協力し合って、地域をつくり上げること
  - ・ 子どもが積極的に社会に参加する一つのきっかけ であると考え。
- 子ども会やジュニアリーダーなどの活動も、子どもの社会参画の一つである。そのような活動の中で、子ども自身が企画するという経験ができ、小学生であっても自分の意見をしっかり伝えることができるようになり、活動を通じて地域のことを知り、子どもがより積極的になることができる。
- 子どもの社会参画を説明するには、相手がこれまで体験したことに絡めて、又は実際に取組を体験してもらってから、こういうことが子どもの社会参画だよと教える方がわかりやすい。

### ② 子どもの社会参画の取組から、どのようなものを得ることができたか。また、自分にどのような変化があったか。

- 人から何か教わる立場から、自分が教える立場になるなど、役割を交代することにより、自分を客観的に見ることができるようになる。また、自分の頭で改善点などを考えて、人にどう伝えていけばよいかを考えるようになる。そのほか、人前で話す機会をたくさん持つことにより、そのような場面でも緊張することがなくなったり、様々な人とコミュニケーションをする中で、自分の将来につながる情報を得ることができる。

### ③ 子どもの社会参画の輪を広げていくには、どうすればよいか。

- 自分で積極的に始めることは難しいが、機会があればやって見たいという気持ちは、多くの人が案外持っているのではないかと。友だちや知り合いなど、自分の身近な人、信頼している人が声をかけたり、勧めてくれる、また、自分が活動への参加を迷っている時に、

親や先生が後押ししてくれると、やってみようかなという気になる。自分が体験し、感じたものを伝えつつ、友だちなどを誘うという形がベストである。

○ ボランティア活動などは、入試の時の得点となったり、学校の単位になったりすることもある。最初のきっかけや目的がそういう形でも、実際に取り組んでみると、活動の内容や、人との触れ合いを楽しむことができたということもある。参加すると何かもらえる、自分の得になるなど、メリットとなるきっかけづくりは大事であり、活動していく中で、物や得点よりも、もっと大事なものが見つかるはずである。

○ 子どもの生活の大きな部分を占める学校が、社会参画のきっかけを作るという形もあり得る。例えば、学校の委員会活動の場を地域にも広げていく、また、そのような活動を近くの学校と共同企画するなど、学内という範囲に縛られることなく取組を進めていくことができる。

また、子どもの社会参画を進める上で、家庭が子どもの社会参画に積極的か、という要素は重要であるが、学校で社会参画に取り組んだ子どもが、家で、今日こんなことをしたと親に話せば、親にも、子どもの社会参画とはどういうものか、またその重要性が伝わると考える。

#### ④ 特命子ども委員の目から見た、10の視点について

○ 視点「1 大人がまず自ら行動し、子どもを巻き込む」は、子どもにとって大切な視点である。大人が、社会に参画することは楽しいということ、子どもに見せてほしい。活動の大切さを伝えたいならば、大人がまず行動してもらいたいと考える。

また、小さな子どもだけでは活動はできない。親や学校の先生を含め、大人がアクションを起こし、子どもが安心して活動できるような環境を整え、子どもの活動の土台づくりをしてもらいたい。

○ 視点「3 自分にできることを見つけたり、つくり出していく気持ちを育てる」も大切であり、そのためには、まず大人が行動するということにつながる。

○ 子どもには、今しかできないことを経験するということが一番大事と思われる。視点「4 達成感・充実感を味わえる経験を増やし、子ども自身の潜在的な能力を引き出す」を重視し、子どもに自信を持たせることが大切である。

○ 視点「9 子どもの気持ちを深く理解した上で、関係者を調整し提案できる人を取組に加える」について、自分たち中学生・高校生が、大人と子どもの中間的な存在として橋渡し役となるということは、ジュニアリーダーになると一番初めに教えられる言葉である。

子どもの中には、大人には言えないことも、中学生・高校生のジュニアリーダーには話してくれるという子がいるが、それを上手く大人に伝えることで、意志疎通の手伝いをすることができる。中学生・高校生の自分たちは、この年代でしかできないことを広めていくことができればと考える。

### (7) かながわ 子どもの社会参画をすすめるキャラクターの募集について

県内において、子どもの社会性を育む取組や、子どもの社会参画を広くすすめる上で、シンボルとなるキャラクターがあるとよいという特命子ども委員の発案により、キャラクターの募集を次のとおり行い、155点の応募作品の中から、最優秀作品として「神奈川ラン（ランちゃん）」を決定した。



【名前】 神奈川ラン（ランちゃん）

【プロフィール】

<身長>150cm

<体重>ひみつ♥

<誕生日>6月2日（開港記念日）

- ・神奈川県で生まれた元気な女の子
- ・とくに横浜が好きで中華街によく行く

（横浜市南区 福原奈々子さん（中学2年生）の作品）

※ 県内の市町村や団体が行う子どもの社会参画の取組（イベントなど）に関する広報やPRに、県青少年課へ事前に申し込みを行った上で、無料で活用できる。（ただし、最優秀作品を印刷した商品の販売など、商用目的での利用は不可）

## ＜募集の概要＞

### ① 募集期間

平成 23 年 10 月 15 日（土）から 12 月 16 日（金）まで

### ② 応募資格

神奈川県在住の方（年齢不問）

### ③ 応募方法

応募用紙に、キャラクター（カラー）のイラスト、キャラクターの名前やプロフィール、応募者の名前などの必要事項を記入し、以下のいずれかの方法で応募してもらう。

- 第 8 回企画調整部会として開催した、かながわ 子どもの社会参画をすすめるフォーラムの会場のキャラクター募集ブースで、直接応募する。
- 募集期間内に、県青少年課宛てに、郵便等又はメールで送付する。

### ④ 応募条件

一人につき 2 作品まで応募できるものとする。

### ⑤ 最優秀作品の決定及び賞状等の授与について

応募作品の中から、特命子ども委員が、下記の審査のポイントを踏まえて、優秀と思われる作品 5 点を順位をつけて選ぶ。その後、神奈川県青少年問題協議会の委員が、優秀作品 5 点の中から、特命子ども委員がつけた順位を参考に、最優秀作品 1 点を決定する。

最優秀作品の応募者本人には、文書で通知すると共に、県のホームページで最優秀作品を発表する。

最優秀作品の応募者には、青少年部長より、特命子ども委員が作成する賞状とキャラクターが入った缶バッジ及び図書券（1,000 円相当）を贈る。

### ⑥ 審査のポイント

- ・ 神奈川県をイメージさせるキャラクターであるか
- ・ 親しみやすいキャラクターであるか
- ・ 子どもの社会参画をすすめるという意図が伝わりやすく、子どもたちが社会参画に興味を持てるキャラクターであるか

### ⑦ 最優秀作品の活用について

最優秀作品の著作権に関するすべての権利（著作権法第 27 条及び第 28 条に定める権利を含む。）は神奈川県に帰属するものとする。

最優秀作品は、神奈川県青少年問題協議会の最終報告書や事例集に掲載するほか、県内の市町村や団体が行う子どもの社会参画の取組（イベントなど）に関する広報や PR に、県へ事前に申し込みを行った上で、無料で活用できるものとする。ただし、最優秀作品を印刷した商品の販売など、商用目的での利用は不可とする。

#### 4 子どもを含む県民との意見交換

～かながわ 子どもの社会参画をすすめるフォーラムの開催 ※詳細は参考3 (P84～) 参照

本協議会では、審議テーマについて子どもを含む県民の意見を広く集めるために、以下の三点をねらいとして、第8回企画調整部会をフォーラムの形で実施した。

- ① 本協議会が出した11の視点への意見（追加・修正を含む）を県民から聞く。
- ② 低年齢期の子どもの社会性や社会参画の芽を育む取組のアイデアを持ち帰ってもらい、取組の広がりにつなげる。
- ③ 様々な立場や年齢の人々が子どもの社会参画について考える機会を提供する。

##### (1) 開催概要及び実施結果

<日時> 平成23年10月15日（土曜日） 9:50～15:30（9:30 受付開始）

<会場> 県立青少年センター（横浜市西区紅葉ヶ丘9-1）

<来場者数> 226人（大人92名、高校生以下の子ども134名）

<主なプログラムの内容と実施結果>

プログラム名	プログラムの内容	実施結果
9:50～10:10 アイスブレイキング、オープニングセレモニー 〔1F ホワイエ〕	・特命子ども委員によるアイスブレイキング ・特命子ども委員が運営するオープニングセレモニーを実施し、当日のスケジュールや注意事項のお知らせ、開会宣言などを行った。	(参加者数集計せず)
10:10～15:00 「子どもがつくる子どものまち」ミニ体験 〔1F ホワイエ〕	NPO法人ミニシティ・プラスが実施する「子どもがつくる子どものまち <sup>*7</sup> 」を展開し、来場者に体験してもらう。	18ブースが出店。
10:10～14:45 子どもバザー 〔本館周辺及び1F ホワイエ〕	子どもが出品する物を家から持ってきて、自分で値つけ（上限500円まで）・販売する。今回は、ブースで発生する売上の半分を、東日本大震災復興支援のために寄付した。	12組が出店。 売上総額 11,830円 寄付総額 12,355円 (寄付総額には、寄付があった物品の売上を含む)
13:00～13:45 みんなで集まろう！全体会 〔1F ホール〕	・フォーラムの趣旨説明 ・特命子ども委員の紹介 ・劇団プレイバックーズが、「子どもが社会をつくるってどういうこと？」をテーマに、来場者の発言を基に即興劇を演じる。	(参加者数集計せず)

\*7 子どもがつくる子どものまち (p.29)

ドイツの「ミニミュンヘン」を発祥とした取組で、遊びの中から生まれる発想から、子どもたち自身が、社会について、まちについて自由に考えながら、小さな子どものまちを創る。NPO法人ミニシティ・プラスが取り組む「ミニヨコハマシティ」では、以下のルールで、子どもが自分たちのまちを創る。

- ・ 一人で遊ぶことのできる19歳以下の子どもが参加できる。大人は口出し禁止。
- ・ 市役所で市民登録を行い、ミニヨコ学校で基本ルールの説明を受けた後に、ミニヨコハマシティの中だけで流通する通貨をもらい、仕事をしたり、遊ぶことができる。
- ・ 働きたい子どもはJOBセンターへ行って仕事をもらう。働いた後は、子ども銀行でお給料をもらえる。
- ・ 各ブースの出店者は、売上の30%を税金として納める。

プログラム名	プログラムの内容	実施結果
11:00～12:10 13:50～15:00 分科会1 「チェンジ☆THE☆ かながわ！！」 〔3F 研修室2〕	小・中学生だけが参加できる子ども向け分科会(大人は立入禁止)。童話を元にした創作ストーリーを紙芝居の形で見せ、クイズや質問を織り交ぜながら、子どもに社会参画とはどういうものかを理解してもらい、意見を引き出す。	約 10 名が参加 (午前中の回は参加者がいなかったため、午後の回のみ実施)
13:50～15:00 分科会2 「子どもがつくる子どものまち、どうやったらできるの？」 〔3F 研修室1〕	ミニヨコ、ぷちひらつかなど、実際に行われている子どものまちな取組を簡単に紹介し、11 の視点へのアプローチの可能性などについて話し合う。	約 15 名が参加
13:50～15:00 分科会3 「子どもの社会参画の可能性を考えよう」 〔1F ホール〕	埼玉県立新座高校金子教諭(学びの共同体の実践)、劇団ひこばえの村上氏と劇団の子どもたち(区民ミュージカルを実施)、ボーイスカウト指導者の根岸氏をパネリストとして、各自の取組を紹介しつつ、学校や放課後の時間の中に、子どもの社会参画の機会を取り入れていくことができないか考える。	約 20 名が参加
15:10～15:30 最後に集まろう！ まとめの全体会 〔1F ホール〕	分科会のまとめや、特命子ども委員企画等の報告を行う。	(参加者数集計せず)

※ その他、子どもの社会参画の取組を紹介するパネル展示等を実施。

「みんなで集まろう！全体会」の時間帯は、「子どもがつくる子どものまち」ミニ体験及び子どもバザーは休み。

## (2) アンケート集計結果

フォーラム当日に、大人・子ども別にアンケートを実施し、プログラムや11の視点などについて参加者から意見をもらった。

### <子ども向けアンケート>

○回答数 19 (子どもの来場者 (134名) のうちの14%)

○回答者の属性等 ( ) 内は、各項目の全回答数に対する割合

#### ① 学年

保育園児・幼稚園児 4 (21%) 小学校1～2年生 2 (11%) 小学校3～4年生 10 (53%)  
小学校5～6年生 2 (11%) 無回答 1 (5%)

#### ② 誰と一緒にフォーラムに来たか (複数回答有)

お父さんやお母さんなどの家族 17 友だち 2 無回答 1



### ○質問に対する回答内容

1 今日のプログラムの中で、「よりよい社会づくりのために、子どもがアイデアをだし、大人といっしょに活動する」ということについて、よくわかったのはどれですか？（複数回答可）

（ ）内は回答数

- ・ 「子どもがつくる子どものまち」ミニ体験（10）
- ・ 子どもバザー（6）
- ・ みんなで集まろう！全体会（6）
- ・ 分科会3「子どもの社会参画の可能性を考えよう」（6）
- ・ 分科会1「チェンジ☆THE☆かながわ！！」（2）
- ・ さいごに集まろう！まとめの全体会（1）

※ 「オープニングセレモニー」「分科会2『子どもがつくる子どものまち、どうやったらできるの？』」「子どもの活動展示パネル」は回答0

2 「よりよい社会づくりのために、子どもがアイデアをだし、大人といっしょに活動する」ために大切と思うことに、○をつけてください（複数回答可）

11の視点	回答数	回答数による順位
1 まず、大人が助けあいながら生活する	9	2位
2 子どもも大人も、いっしょに社会をつくっていくということを意識する	8	4位
3 子どもが、楽しみながら、あそびながらとりくめるようにする	10	1位
4 自分にできることを自分で見つけていく	6	9位
5 「こんなことができた！」「自分が役に立った！」という気持ちになるようなきかいをふやす	7	6位
6 いろいろな年の子どもや大人と、いっしょにとりくむ	7	6位
7 「子どもがつくる子どものまち」などのたいけんを、本当の社会にもいかしていく	6	9位
8 だれでも参加できるような工夫をする	8	4位
9 みんなが「よかった」と思えるような工夫をして、きょうりよくしてくれる人がふえていくようにする	9	2位
10 子どもの気持ちをよくわかってくれる大人に、きょうりよくしてもらおう	7	6位
11 今やっているとりくみに、上にかかれた1～10のポイントをいかす	6	9位

3 自由意見 （ ）内は回答数

- ・ とても楽しかった。今日は少ししか遊ばなかったので、3月にまた来たい。（3）
- ・ 楽しかった。（3）
- ・ また来たい。（2）
- ・ たくさんおもちゃが売れて、うれしかった。（2）
- ・ たくさんミニロが集められて楽しかった。（1）
- ・ これから受付とかをやろうと思う。（1）
- ・ フォーラムの構成を考えた方がよいと思う。分科会も盛り上がっていない。みんなの協力があってできていることを理解した方がよい。（1）

## <大人向けアンケート>

○回答数 28 (大人の来場者 (92 名) の 30%)

○回答者の属性等 ( ) 内は、各項目の全回答数に対する割合

### ① 性別

男性 10 (36%) 女性 18 (64%)

### ② 年齢

20~30代 9 (32%) 40~50代 18 (64%) 60~70代 1 (4%)

### ③ 属性

保護者 21 (75%) 保育・教育関係 3 (11%) NPO・青少年関係団体 3 (11%)  
行政関係者 1 (4%)

### ④ 住んでいる地域

横浜市内 17 (61%)

横浜市外 11 (39%)

…県内 (川崎市、藤沢市、厚木市、綾瀬市) 6、東京都 2、県外 (静岡県) 2、不明 1

### ⑤ 誰と参加したか

子どもと一緒に参加した 19 (68% 子どもの年齢は2歳~16歳まで)

知人や友人と一緒に参加した 7 (25%) 一人で参加した 2 (7%)

### ⑥ フォーラムを何で知ったか (複数回答可)

チラシ 10 県のHP 5 県のたより 1 関係団体からの情報提供 4

その他 8 (知人からの誘い、子ども会の回覧板、学校からのお知らせ、NPO団体のフェイスブック)

## ○質問に対する回答内容

### 1 本日のフォーラムに参加して、子どもの社会参画について、これから自分でも参加したり、取り組んでみたいと思われましたか？

積極的に参加・取り組んでみたい 8 (29%) 参加・取り組んでみたい 16 (57%)

既に取り組んでいる 2 (7%) 無回答 2 (7%)

※「参加・取り組んでみたいとは思わない」は0

### 2 本日のプログラムで、また参加したいもの、自分でも取り組んでみたいものを教えてください。(複数回答可) ( ) 内は回答数

- ・ オープニングセレモニー (1)
- ・ 「子どもがつくる子どものまち」ミニ体験 (23)
- ・ 子どもバザー (10)
- ・ 13時からの全体会 (劇あり) (7)
- ・ 15時10分からのまとめの全体会 (2)
- ・ 分科会2「子どもがつくる子どものまち、どうやったらできるの？」(1)
- ・ 分科会3「子どもの社会参画の可能性を考えよう」(3)
- ・ 分科会 (テーマ不明) (2)

※ 「分科会1」「展示パネル」「その他」は0

3 青少年問題について有識者等が話し合う神奈川県青少年問題協議会では、子どもの社会参画を進める取組を行う上で、以下の11の視点が大切と考えています。

次の各項目（視点）について、あなたのお考えは1～4のうちどれが一番近いですか？

（とても大切（4点）、まあまあ大切（3点）、あまり大切ではない（2点）、大切ではない（1点）のどれかを選んでもらう）

11の視点	総得点 (総得点 による順 位)	各項目に対する回答数			
		とても大切 (4点)	まあまあ 大切 (3点)	あまり大切 ではない (2点)	大切では ない (1点)
1 大人がまず自ら行動し、子どもを巻き込む	101点 (7位)	20	7	0	0
2 子どもと大人はパートナー	106点 (4位)	22	6	0	0
3 遊びを通して育む、大人が方向づけをしない	98点 (8位)	15	12	1	0
4 自分にできることを見つけていく気持ちを育てる	107点 (2位)	23	5	0	0
5 達成感・充実感を味わえる経験を増やす、子ども自身の潜在的能力を引き出す	112点 (1位)	28	0	0	0
6 異年齢、多世代が交流する	107点 (2位)	23	5	0	0
7 疑似体験で終わらせない、現実の社会につなげていく	103点 (5位)	19	9	0	0
8 全ての子どもに知ってもらい、参加してもらう	98点 (8位)	15	12	1	0
9 協力者とは、互いのメリットとなる関係になるよう工夫する	92点 (11位)	12	14	0	0
10 子どもの気持ちを深く理解し調整できる人材が必要	102点 (6位)	21	6	0	0
11 今ある資源に、新しい視点で光をあてる	96点 (10位)	15	12	0	0

4 11の視点以外に、子どもの社会参画を進める取組を行う上で大切と思われるポイントがあればご記入ください。

- ・ 5、10の視点について、大人側から褒めることが大切。
- ・ 大人と子どもの中間に位置する高校生、大学生をどう巻き込んでいくかを考えることが必要。
- ・ 子どもを子ども扱いしないこと。お客様にしないで、一緒につくっていくこと。
- ・ 大人も関わりを持ちたいので、子どもに大人の意見を言うことも大切と思う。
- ・ 1つや2つで終わらず、継続することが大切と思う。
- ・ 子ども同士が強くつながり合う。そうなれる機会をつくれるよう大人がサポートする。お互いが仲間だと思ひ合えるからこそ頑張れるし、楽しいし、参画できるんだ。分科会3での3人のお話を聞いてそう感じました。
- ・ 大人の共通認識、大人のエゴを通さない我慢
- ・ 社会に参画する必要性や自立させていく意識を育てていく大人の投げかけや大人の導きは必

要。やる気のある子より、ない子をどうそのように向けていくかを見つけ出していくか、も注目してほしい。ひきこもり、不登校などの子たちも含めての何かアクションがほしい。

- ・ 子どもが気軽に参加できる社会参画の拠点を増やす。(各市町村に1つ以上はほしい)
- ・ 社会の仕組みをもっと具体的かつリアルに子どもたちに伝えていく。
- ・ 誰でも参加できるという意識を持つ。
- ・ 子どもも一人の人格であると認めること、意識すること。
- ・ 社会に関心を持つ。たくさんの人々のおかげで自分が生活できているということを知るの大切だと思う。
- ・ 子どもにとって信頼できる社会づくりができるよう、大人との関わりにおいて自立・信頼性を育てる工夫が必要。

##### 5 その他、フォーラムや11の視点に関するご意見、又はこれから取り組んでみたいことなどがありましたら、ご記入ください。

- ・ 大人が自ら行動することができない時代になっていると思う。子どもの社会参画に大人も参画することで、自分の行動を振り返る機会になると思う。
- ・ 初めて参加した。お祭りや文化祭のような切り口から、社会の一人だという気持ちが育っていくような活動ができればいいと思う。
- ・ 西区、中区の子どもが参加しやすいため、都筑区だけでなく青少年センターでも再度開催してほしい。子どもたちの目が輝いていた。よい体験をありがとうございました。
- ・ (子どもに)口出しせずに放置していたら、最初のJOBセンターでは「？」という感じだったが、後は自分でスイスイやっていた。側に寄ったら追い払われた。親から離れること自体を楽しんでいるようだった。
- ・ 子どもたちが自主的に取り組んでいる姿には驚かされた。また、今回のために月に一度会議等もされているとのこと、今後も継続し広まっていくことを願っている。社会の中に色々な仕事があることを子どもが体験するととてもいい機会である。
- ・ 分科会3のパネリストの選定に、もう少し違う方向があるのではないか。伝えたいものが少しわかりづらかった。(まとまりがない、方向性が見えない)
- ・ 分科会3に参加したが、事例発表のみのパネラーの意見であり、会場とのやり取りがなかった。私たちも、会場にいて参加しただけで、参画したかった。(パネラーと意見のやり取りをするなど)
- ・ 分科会の下打合せはもっとしていただいた方が、大人にとっては有意義になると思う。(どの分科会への要望なのか不明)
- ・ もう一度、子どもの社会参画について考えるフォーラムを企画してもらいたい。
- ・ もっと宣伝してほしい。人数が少なくてもったいない感じがした。
- ・ 行政が関わって、このようなことができると良いと思った。
- ・ 情報ももらいながら少しずつお手伝いしていくつもりである。

## 第5章 子どもの社会性を育む地域づくりのために

第5章では、「子どもの社会性を育む地域」像と、そうした地域づくりのために重要な視点について、考えを述べる。

### 1 子どもの社会性を育む地域

- ア 子どもに多くの「出番」と「役割」がある。
- イ 子どもの活動の場や世代間交流の場が、日常的に多くある。
- ウ 子どもと親や周囲の大人との共有時間が増え、一緒に地域活動に参加できる。
- エ 子どもが、まちづくりや地域行事に企画・計画段階から参加して自分の意見が言え、実現可能なことから行っていく。
- オ 子どもに「今の社会の一員として大人と一緒に社会をつくっていく」という自覚があり、大人も子どもの役割を期待し、支えていく。
- カ 社会に積極的に関わり、社会を担っていく感覚と力を、大人になるまでに獲得できる。

### 2 地域で子どもの社会性を育むために重要なこと（10の視点）

本協議会では、地域で子どもの社会性を育むために重要なこととして、まず11の視点を考えた（P12参照）。その後、11の視点について4つの実践・検証を行い、その過程で出てきた意見なども踏まえて、地域における取組を進め、企画・運営方法をチェックするための視点として、次のとおり10の視点を提案する。

#### （1）「大人がまず自ら行動し、子どもを巻き込む」という視点

- まず大人が、「子どもは周囲の大人を見て育っていくものであり、子どもの社会性は親や周囲の大人の社会性そのものである」こと、「日常の暮らしは自分の家庭だけでなく地域の人々との支えや協力で成り立っている」ことを認識することが必要である。  
そして、「嫌なことでも、しなくてはならないことはする」ということまで含めて生活者としてなすべきことをし、地域の中で助けたり助けられたりしながら生活している姿を、実際に子どもたちに見せていくことが重要である。
- 大人が地域の活動に参加し、子どもが参加するきっかけづくりや環境づくりをすることが重要である。さらに、こうした活動をするにあたって、「大人自身が楽しむこと」も大切にすべきである。大人が楽しくなければ、子どもは「大人のように振る舞いたい、大人の仲間に入りたい」とは思わないであろうし、大人自身もその取組を継続していくことは難しい。
- 大人が子どもの尊厳を大切にすること。例えば、きちんと向き合うこと、話を聞くこと、あいさつすること、「未熟で力がない」という先入観を持たないこと、信頼すること。また、大人が子どもに対する認識を変えれば、子どもも変わるということを理解していることが大切である。

## (2)「子どもと大人とが、互いによいパートナーとなって一緒に取り組む」という視点

- 第3章2で述べたように、子どもは現在の社会の構成員でもある。子どもを一個の人格として認識し、大人が子どもを「育成・指導する」という姿勢ではなく、「支援する」という姿勢で向き合い、パートナーである子どもと大人が、共に生き社会を形成していくという意識を持つことが期待される。

大人がそうした姿勢で向き合うことで、子どもは自己肯定感を持ちながら自己を形成していくことができる。さらに、社会を見るまなざし・社会的感覚や、大人社会に対して様々な考えや意見を提示できる力を積極的に培っていくことができる。

- 具体的な取組を考えるにあたっては、大人が子どもに対してすることだけを考えるのではなく、それに対する子どもの行動・反応を、対象となる子どもの目線にあわせて想定しながら考えるなど、子どもの参加・参画の意欲を支えていく仕組みをつくっていくことが望ましい。

例えば子どもに意見を求めても、意見を聞いただけで終わってしまえば、子どもの継続的な参加意欲につながらない。意見がどういうふうを受け止められ、どう反映されたか、また、受け容れられなかったのはなぜかを、きちんと説明することが重要である。また、子どもに地域社会への出番、役割をたくさん用意することも効果がある。

- 他方、子どもの人間形成という行為を、子ども自身の自己実現のためだけでなく、文化の世代間伝承の営みとしても考え、子どもを「新しい市民社会を創造していく主人公」として育てていく意味でも、本当の意味の大人のパートナーとして社会に参画できる力が身についていくような方向で、経験の豊かな大人の意見を伝えつつ、子どもの社会性を育むことが必要である

- また、子どもの社会参画を促進するためには、大人も、子どもの社会参画について十分理解していることが大切である。大人側の理解がないまま取り組むと、子どもの社会性を育む、子どもの社会参画をすすめるという形にはならない可能性がある。子どもと一緒に取り組む中で、大人も子どもの社会参画について学んでいくことが必要である。

- こうした取組に大人が参画することで、大人自身も自らを振り返る機会となり、子どもとの関係性や、地域で子どもを育てていくことについて、意識することも重要である。

## (3)「自分にできることを見つけたり、つくり出していく気持ちを育てる」という視点

- 子どもにとって、取組に参加したいと思う主な理由は「楽しいから」で、楽しさや「遊び」的要素を大切にすることが、子どもの意欲や持続的参加を引き出す。「(子どもに)こうなってほしい」という期待や地域の活性化など、大人本位の理由を出し過ぎて、子どもにとっての楽しさや遊び的要素が損なわれないようにする注意が必要である。

○ 子どもは、遊び感覚でできることには、積極的に参加する。また、子ども同士の方が、気楽に色々なことに参加しやすい。だから、大人が介入しすぎることなく、子どもだけでという形を取りながら、子どもの社会参画を促進できるとよい。

○ ただし、子どもが社会参画に最初に入るきっかけは、大人が促すことも必要である。大人が、社会で起こっていることを知らせたり、参加のきっかけづくりをすることで、子どもは取組に参加しやすくなり、続けやすくなる。また、危険な場合や、子どもが助言を求めている時などは、大人が適切なタイミングで助言をすることが必要である。

○ 低年齢期の子どもでも、社会性を育み、社会参画をすすめるに早すぎるということはないと考える。

社会の中での人としての喜びは、極論すれば、相手に喜んでもらえる役割を、自ら見つけ、つくり出し、果たすことのできた充実感ではないかと考える。社会には、金銭で計ることのできない価値や役割があることを、生活の中で自然と学び、「相手が喜ぶから、したい」「自分にできることを見つけたり、つくり出したりしていく」という気持ちが自然と育まれていくようにする。特に、低年齢期の子どもに対しては、喜びや感謝をその場で表して、子どもたちが「自分にもできることがある」と感じられるようにすることが重要である。

○ 「自分にできること」は、年齢が上がり経験を経るごとに増えていき、低年齢期は遊びの中での活動が中心だったものが、徐々に、子どものグループのリーダー、ボランティアや仕事など、具体的な社会的役割を担う活動に広がっていく。現在、多くの中学校や高校などの教育機関で進められているキャリア教育やシチズンシップ教育は、低年齢期からの実体験の積み重ねがベースにあり、それが切れ目なく「だんだん大人に近づいて、だんだん自分にできることが増えていく」という一つの流れ・過程の中で取り込まれることで、さらに生かされると考える。

#### (4)「達成感・充実感を味わえる経験を増やし、子ども自身の潜在的な能力を引き出す」という視点

○ 子どもが豊かな社会性を育んでいくためには、手づくりの体験、自らの運営に責任を持たせる体験、嫌なことだが充実感が味わえるような体験、誰かに助けられる体験などを、実体験として多く経験していくことが重要である。しかし、これらの経験は、子ども本人の意欲が伴うことによってこそ、子どもの能力として積み重ねられていくものであるから、体験の機会を企画するにあたっては、子どもの意欲を引き出す工夫が重要である。

○ 子どもが自ら潜在的な能力を引き出し、社会参画にまで発展させていくためには、大人が子どもに何かしてあげるといふ発想だけではなく、子ども同士のつながりを大切にし、子どもの力が発揮できるように工夫する。子どもが責任を持って取り組むことも重要な機

会であり、大人が子どもに期待しつつ支えるという姿勢が肝要である。子どもには、温かく見守られ自己肯定感を得られる環境が整えられれば、社会参画していく力を自ら発揮していく潜在的能力がある。

例えば、それぞれの子どもの良いところを見つける多くの大人の眼差しが周囲にあり、それが子どもにも影響を与え、子どもも他者の良いところを見つけていくようになる環境が、子どもの潜在的能力を引き出す環境である。

#### (5) 「異なる年齢・世代・立場の人が交流する」という視点

- 異なる年齢・世代・立場の人の交流は、コミュニケーション能力の育成、社会性の向上に効果がある。そうした交流をすすめていくには、子どものいる家庭だけでなく、単身者や子どものいない夫婦、子や孫などのいない又は同居していないお年寄りなどにも誘いかけ、誰もが「地域の子ども・孫」という発想で関わってもらうことが望ましい。そのためには、親に、自分の子どもを家族以外の大人にも可愛がってもらうと同様に、叱ってもらうことも肯定する考えが必要である。

また、子どもの人間形成という行為を文化の世代間伝承の営みとして捉える視点からも、異なる年齢・世代・立場の人の交流は非常に重要である。

#### (6) 「実際の社会に関わりながら、社会への関心や具体的な行動につなげていく」という視点

- 子どもたちが、多くの人々の力によって社会生活が成り立っていることを理解し、自然に社会性を身につけていくためには、子どもたちに、現実の大人の仕事の進め方、社会やコミュニティの成り立ち、市民としてのあり方などを、できるだけ具体的に見せていくことや、職業体験などの実際の活動に関わる機会を与えていくことが必要である。

子どもが主体的に活動することや、同世代の子ども同士で意思の共有をすること、子どもに「意思を社会へ発信していくことのできる社会の構成員である」という自覚があってはじめて社会参画につながるという意識を大人が持ち、子どもの発達段階に細やかに対応していくことが重要である。

- また、子どもが社会に関心を持つきっかけとなる取組の一つとして、いわゆる「子どものまち」をつくって、まちや経済の仕組みを学ぶイベントが全国に広まっているが、こうしたイベントを、楽しい遊び体験に終わらせることなく、日常生活における取組につなげていくことによって、子どもの社会性や社会参画する力を育む体験となる。実施後に、どう日常の取組につなげていくことができるか、また、どのような企画によって、子どもたちの関心が実際の社会へとつながっていくかということを念頭に置きながら、イベントを企画することが必要である。

- 子どもの社会参画とは、現実の社会的な意思決定の過程に参加することや、子どもに関係している事柄の意思決定の過程に、当事者である子どもが登場することである。特に、



低年齢期の子どもの場合、言葉で自分の意見を表すことが難しい場合もある。そのような低年齢期の子どもたちに対しては、例えば、大人が実際どのように自分たち（子どもたち）のことを決めているかを、直接子どもたちに見せるような参加機会を日常的につくっていくことなどにより、社会参加・参画できる力の芽を育むことも有効である。

#### (7)「全ての子どもに知ってもらい、参加してもらおう」という視点

- 企画を考えるにあたっては、全ての子どもたちが社会参画の機会を持つことができるように、配慮することが必要である。例えば、低年齢の子ども、住んでいるまちでは参画の機会のない子ども、参加意欲のない子ども、あるいは不登校、ひきこもりなどの課題を抱える子どもや、障害のある子どもなど、社会に参画する機会が得にくい存在こそ、社会から注意を払われるべき、意見を聞かれるべきである。そのような子どもたちが、参加意欲を持つことができるように工夫することも必要である。

子どもを育む場の中心は家庭であるが、何らかの理由によって家庭がその機能を十分に果たすことができない場合でも、家庭外に子どもに安心・安全な居場所があれば、子どもはそこで豊かに社会性を育てていくことができる。その役割の一端を地域が担うことが期待される。

- 友人や家族、先生など、身近な人が、子どもの社会性を育む・社会参画につながる活動を勧めたり、後押しすることが、参加のよいきっかけとなる。また、参加することに対して何らかのメリットがあると、取組を始めやすく、活動していく中で、当初のメリットよりもずっと大事なものを見つけられるようになると考えられる。

#### (8)「協力者とは、互いのメリットとなる関係になるよう工夫する」という視点

- 取組を広げていくためには、その取組に対する賛同者、協力者をいかに増やすかが鍵になるが、「子どものためになる」という説得だけでは相手の理解を得ることが難しい場合も多い。

その場合、相手の課題を解決することが、こちら側の望むことの実現にならないかを考え、互いのメリットとなる関係になる工夫を提案することが、相手の理解を得るきっかけになることがある。また、住民全体にとってメリットになる方法や関係性を模索していくことが、持続可能な取組につながっていくと考える。

#### (9)「子どもの気持ちを深く理解した上で、関係者を調整し提案できる人を取組に加える」という視点

- 人間の感情や意欲が重要となる取組においては、中立な立場を保ちながら、合意形成や相互理解に向けて深い議論がなされるよう調整する、ファシリテーター的な能力を持った

人材がキーパーソンとなる。特に、子どもの社会性や社会参画できる力の芽を育む取組においては、子どもの考えを深く理解でき、実現可能かの判断や実現する方法を考え、外部の協力者等との間に立って調整していくことのできる人材が求められる。

ファシリテーターとして地域に貢献する人材はまだ多くないが、ファシリテーター的な能力は知識や訓練によって高めていくことができることから、地域社会全体が子どもを支えていける（＝ファシリテーションできる）力をつけていくことが期待される\*<sup>8</sup>。

- 大人と子どもの中間に位置する中学生、高校生、大学生を積極的に巻き込み、大人と子どもの橋渡しの役割を担ってもらうことも大切である。

(10) 「大人や子どもが継続して参加できるように、活動の核となる場所を定める」という視点

- 地域で活動を継続していくためには、活動の核となる場所を一定にすることで、参加する子どもや協力する大人が代わっても活動が継続しやすく、また、地域の大人たちが活動を認知し、自ら関わっていきこうという意識や、現実の社会につなげる展開がしやすくなる。 こうした工夫により、活動を1回だけで終わらせず、継続していくことが重要である。

---

\* 8 ファシリテーション、ファシリテーター (p. 40)

ファシリテーションは会議やミーティング、住民参加型のまちづくり会議やシンポジウム、ワークショップなどにおいて、議論に対して中立な立場を保ちながら話し合いに介入し、議論をスムーズに調整しながら合意形成や相互理解に向けて深い議論がなされるよう調整すること。ファシリテーターはその役割を担う人。

### 3 今後の取組の方向性

- 本協議会は、今後、本報告で提案する10の視点が、より多くの地域活動に取り入れられ、低年齢期から、子どもの社会性や社会参画の芽を育む取組が一層すすんでいくことを期待するメッセージを発信する。
- また、行政には、低年齢期から、子どもの社会性や社会参画の芽を育む取組を更に広げるため、次の役割を果たすことを求める。
  - \* 現在行われている地域の活動に、本協議会の提案を取り入れてもらえるよう、本協議会からのメッセージや、10の視点、活動事例を紹介する。
  - \* 子どもの社会参画の取組を行っている団体の交流や、情報交換の機会をつくり、活動を充実させ、広げていくためのきっかけとしてもらう。
  - \* モデルとなる事例の蓄積・検証のほか、行政自ら子どもの意見を聞いて反映させる機会、子どもが自ら参画できる機会、子どもの参加が地域の活性化につながる機会を増やす。
- なお、本協議会の提案の内容を踏まえて、県は、ミニヨコハマシティ（P110参照）を主催するNPO法人ミニシティ・プラスを含む複数のNPO法人及び企業と協働し、「神奈川特命子ども地域アクター養成アクション」を実施している。

この事業は、県内の、主に中学生から高校生までを対象に、社会参画に意欲のある子どもを募って、まちづくりへの参画に向けた基礎知識を身につけるための勉強会を行い、地域の課題に気づき、自ら解決に取り組むことができる「特命子ども地域アクター」として養成するものである。（注：平成24年度事業に向けた募集は終了）

特命子ども地域アクターは、まちづくり現場の要請に基づいて派遣され、子どもの視点から実際のまちづくりに参画するほか、取組の輪を広げるための「子ども地域社会参画フォーラム」を企画・実施する。

これにより、積極的に地域に係わる意欲のある子どもに、具体的な社会参画の場を提供すると共に、まちづくり現場の課題解決を図る新たな仕組みを構築し、子どもの社会参画に積極的に取り組もうとする行政や団体、企業等にこうした取組が広がっていくことをめざす。

※ 詳細は参考5（P135～）参照

※ 神奈川特命子ども地域アクター養成アクションのホームページ

<http://www.pref.kanagawa.jp/cnt/f360604/>

## 神奈川県青少年問題協議会からのメッセージ

子どもの社会参画は、これまで難しいものと思われてきました。実際に難しいものではあるのですが、今回神奈川県では、それを実現に近づけるために、地域における取組の企画や運営方法をチェックする10の視点を作成しました。10の視点を持って検討していくこと、そして、複数の視点を連動させて取り組むことによって、子どもの社会参画は、徐々に実現できるようになるでしょう。

今ある地域の取組を、10の視点で実際に見直してみてください。急に全部を変えることはできないかもしれませんが、ほんの一部だけでも変えてみませんか？

視点の「メガネ」を身につけることによって、次回から、企画の立て方が変わっていくかもしれません。子どもたちにも検討してもらいましょう。

まずは、この報告書の内容を、ぜひ大人も子どもも、皆で共有してみてください。

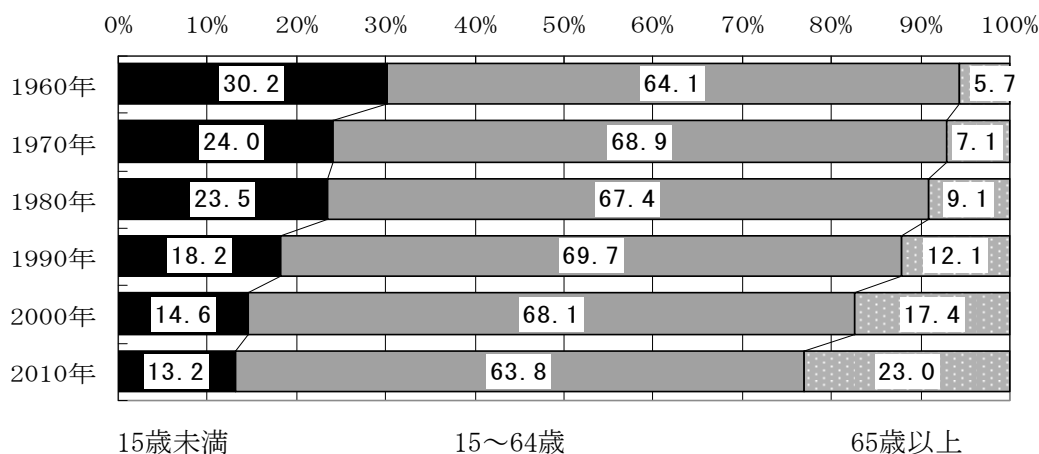
特に、3.11の東日本大震災以後、日本社会は大きく変わってきており、子どもたちの中に、社会に関心を持ち、自分たちの役割を考え、できることを見つけようとする動きが見られます。子どもたちにも、社会の中でどんどんアイデアを出し、積極的に取り組んでもらうことが、望ましい社会につながっていくのではないのでしょうか。

今回の提案を参考にさせていただくことで、子どもの社会性が育まれ、さらに、子どもを含めた住民の誰もが、地域の活動に参加することにより、活力のある、より住みやすい社会となっていくことを期待しています。

# 参 考 編

## 1 第2章 子どもの社会性の現状と背景 説明図表

■図1 人口に占める子ども（15歳未満）の割合の減少



(総務省統計局「国勢調査」より)

■図2-1から2-2 青少年の地域での活動への参加状況

川崎市内に在住する13～24歳の青少年に対し、「地域の活動に参加していますか」という問いをしたところ、「参加している」とする回答は10%未満で、徐々に増えてはいるが、15年前と比較すると、地域の活動に参加している子どもはまだ少ない。

また、その理由についてたずねたところ、「地域でどのような活動が行われているか知らないから」が38.4%で最も多い。

図2-1 「あなたは現在、地域の活動に参加していますか」

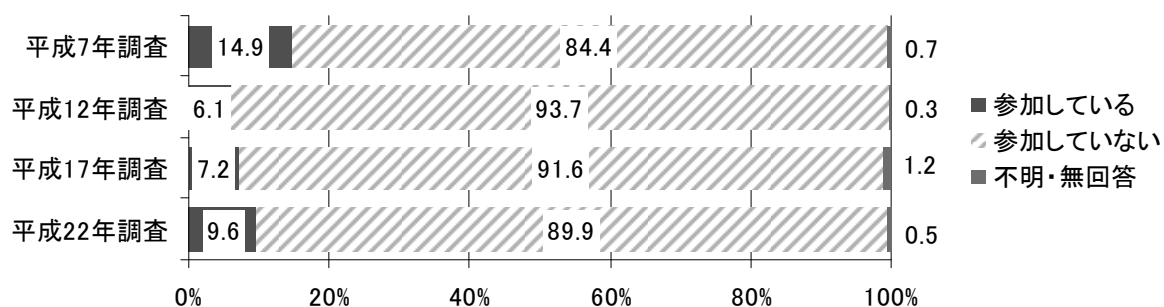
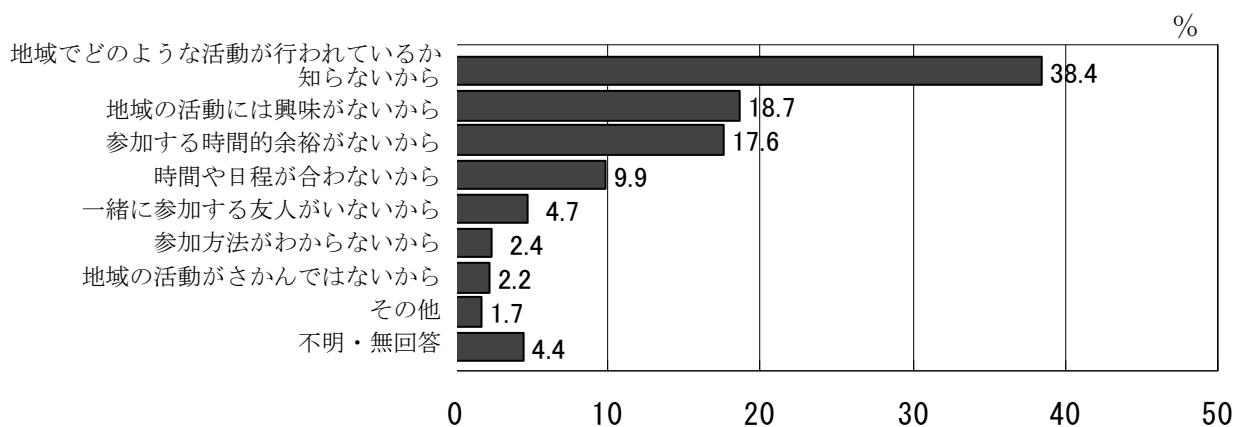


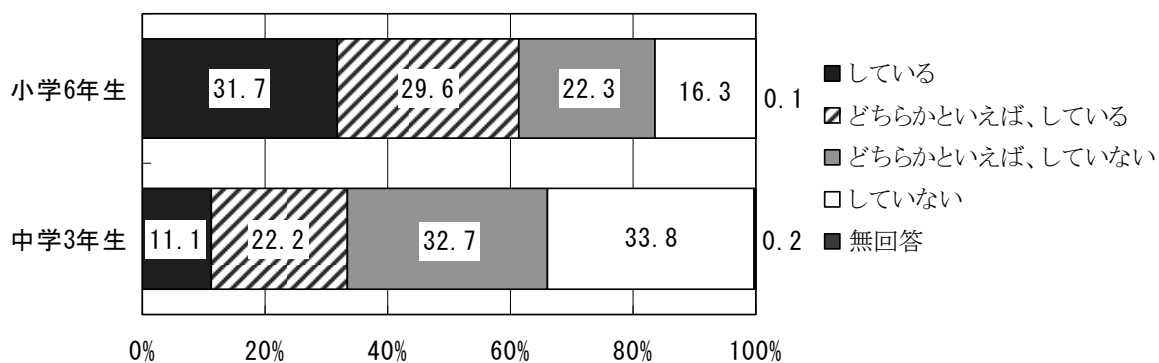
図2-2 「地域活動に参加していない理由は何ですか（複数選択可）」



(平成22年 川崎市青少年意識調査)

■ 図3 地域の行事への参加状況

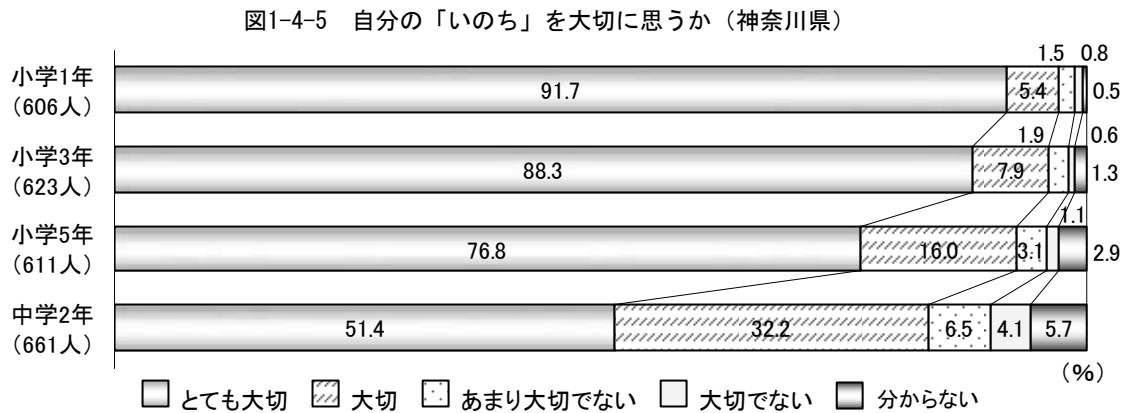
全国の小学6年生及び中学3年生を対象に行った調査によると、「今住んでいる地域の行事に参加していますか」という問いに対し、「している」又は「どちらかといえば、している」と回答したのは、小学6年生が約6割であるのに対し、中学3年生は3割強となっている。



(平成22年度全国学力・学習状況調査 文部科学省)

■ 図4 自分の「いのち」を大切に思うか

「自分の『いのち』を大切に思うか」という問いに対し「とても大切」と答えた割合は、小学1年生が91.7%、小学3年生が88.3%、小学5年生が76.8%、中学2年生が51.4%と、年齢を追うごとに割合が減少し、中学2年生では「あまり大切でない」「大切でない」という回答が全体の約1割を占める。



（『いのち』についてのアンケート調査 県子ども教育支援課 平成20年3月）

■ 表1-1から1-2 学校の生徒自治活動に参加したい子どもの割合

日本・米国・中国・韓国の中学1年生から高校3年生に以下の質問をしたところ、日本の生徒は「参加したくない」と「どちらでもいい」を合わせて中学生が80.1%、高校生が87.4%と、割合が高い。

表1-1 (%)

		日本	アメリカ	中国	韓国
学校の生徒自治活動に参加したい	高校生	10.9	49.3	49.9	24.0
	中学生	14.7	40.8	53.7	20.6
学校の生徒自治活動には参加したくない	高校生	29.5	27.7	12.8	39.3
	中学生	28.5	24.8	7.2	38.4
どちらでもいい	高校生	57.9	20.7	37.0	36.2
	中学生	51.6	19.5	37.6	40.0

表1-2 以下、「とてもそう思う」と「まあそう思う」を合わせた割合 (%)

		日本	アメリカ	中国	韓国
自分はダメな人間だと思う	高校生	65.8	21.6	12.7	45.3
	中学生	56.0	14.2	11.1	41.7
私は人並みの能力がある	高校生	52.5	89.0	85.1	69.0
	中学生	53.4	78.9	84.6	73.7
私の参加により、変えてほしい社会現象が少し変えられるかもしれない	高校生	30.1	69.8	62.7	68.4
	中学生	37.3	53.3	58.3	66.5
社会のことはとても複雑なので、私が関与したくない	高校生	48.7	33.5	26.0	37.9
	中学生	53.6	27.3	22.2	41.2

（『中学生・高校生の生活と意識調査報告書―日・韓・中・米の比較―』抜粋 日本青少年研究所 2009年3月発行）



■ 図5-1から5-3 自己肯定感につながる経験・意識の状況

全国の小学6年生及び中学3年生を対象に行った調査によると、「ものごとを最後までやりとげて嬉しかったことがある」「難しいことでも失敗をおそれないで挑戦している」「自分にはよいところがあると思う」という問いに対し、「あてはまる」又は「どちらかといえばあてはまる」と回答した子どもは過半数を占めるなど、生命力を感じさせる子どもの像を読み取ることのできるデータもある。

一方で、いずれの問いも中学2年生の回答の方が小学6年生よりも低く、成長するほど、ものごとを最後までやり遂げて嬉しいと思う経験が少なくなったり、失敗を恐れるようになったり、自分にはよいところがあると思えなくなっていることが見える。

図5-1 「ものごとを最後までやりとげて、うれしかったことがありますか」

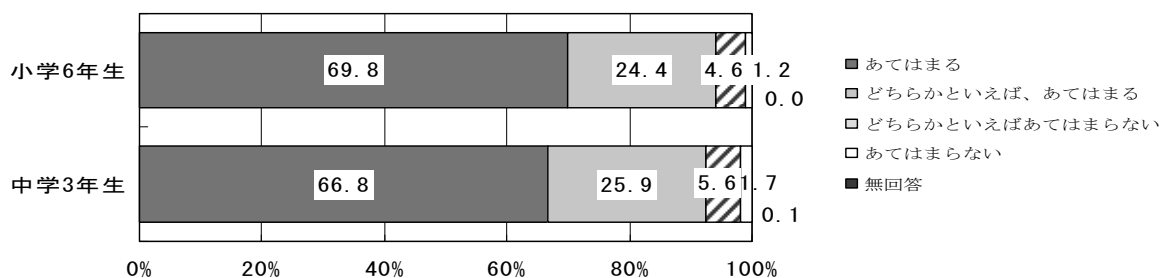


図5-2 「難しいことでも、失敗をおそれないで挑戦していますか」

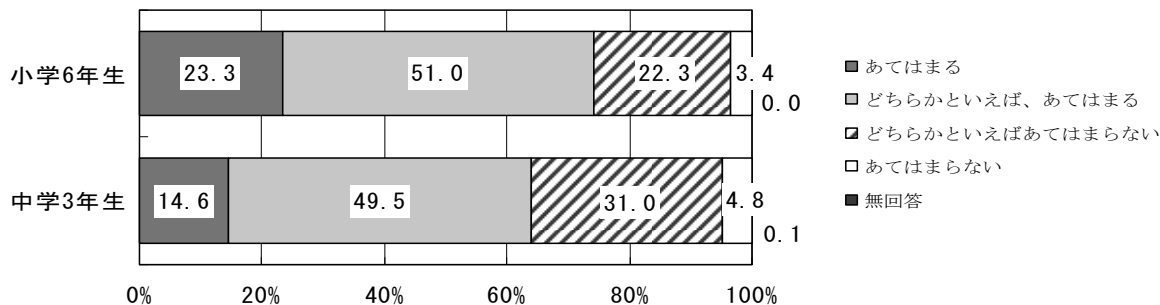
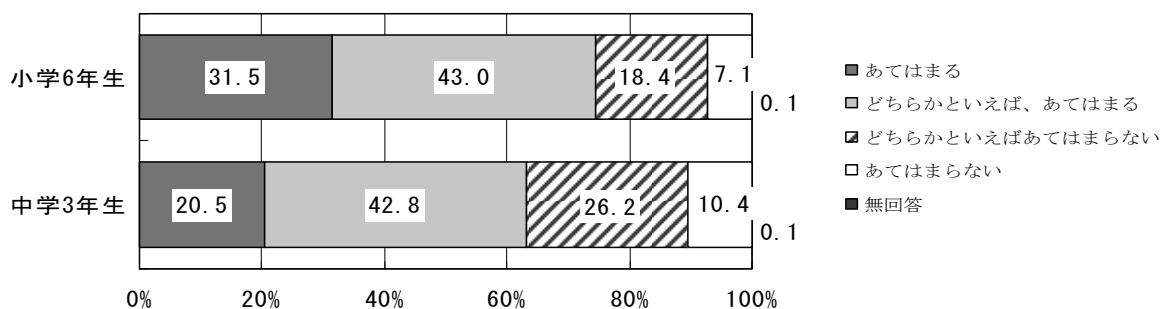
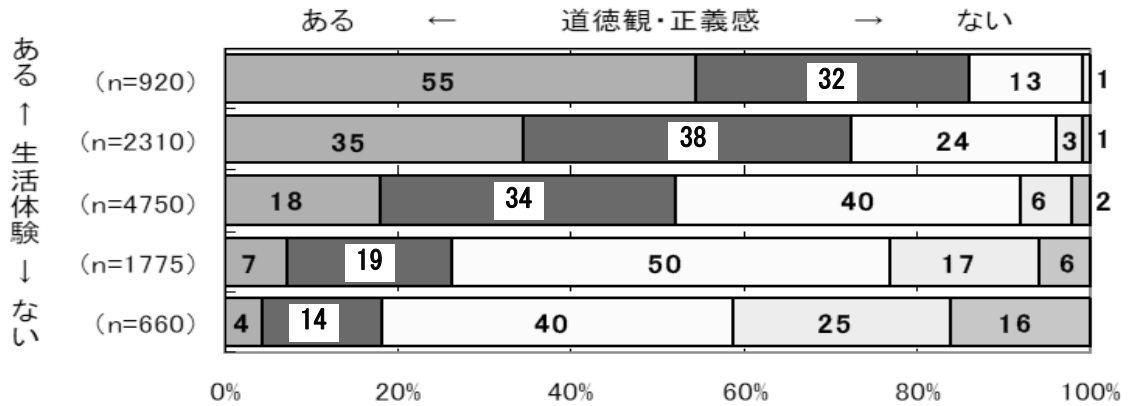


図5-3 「自分には、よいところがあると思いますか」



■図6 生活体験と正義感・道徳観の関係

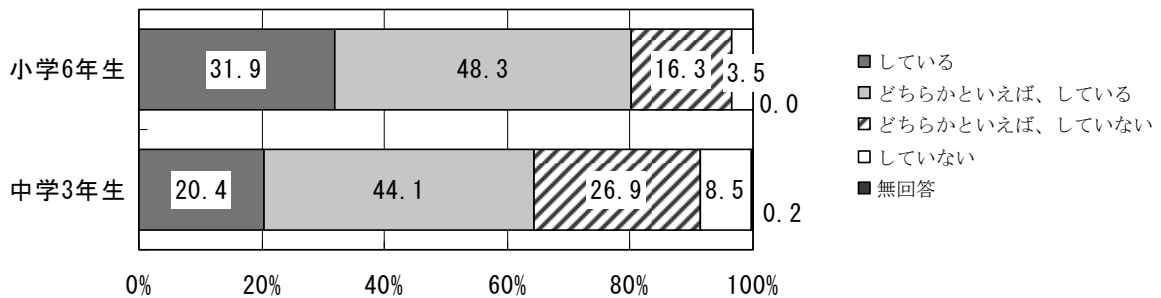
全国の小学1～6年生、中学2年生、高校2年生に対して行った調査によると、「ナイフや包丁で果物の皮をむいたり野菜を切ったこと」「タオルやぞうきんをしぼったこと」「道路や公園に捨てられているゴミを拾ったりしたこと」など(計6項目)の生活体験の頻度の高い小中学生(小4・小6・中2)ほど、「バスや電車で体の不自由な人やお年寄りに席をゆずること」「友達が悪いことをしていたらやめさせる」という正義感や道徳観が身につけている割合が高い。



(「青少年の体験活動等と自立に関する実態調査」平成21年度調査報告書 平成22年10月 (独) 国立青少年教育振興機構)

■図7 家で手伝いをしている子どもの割合

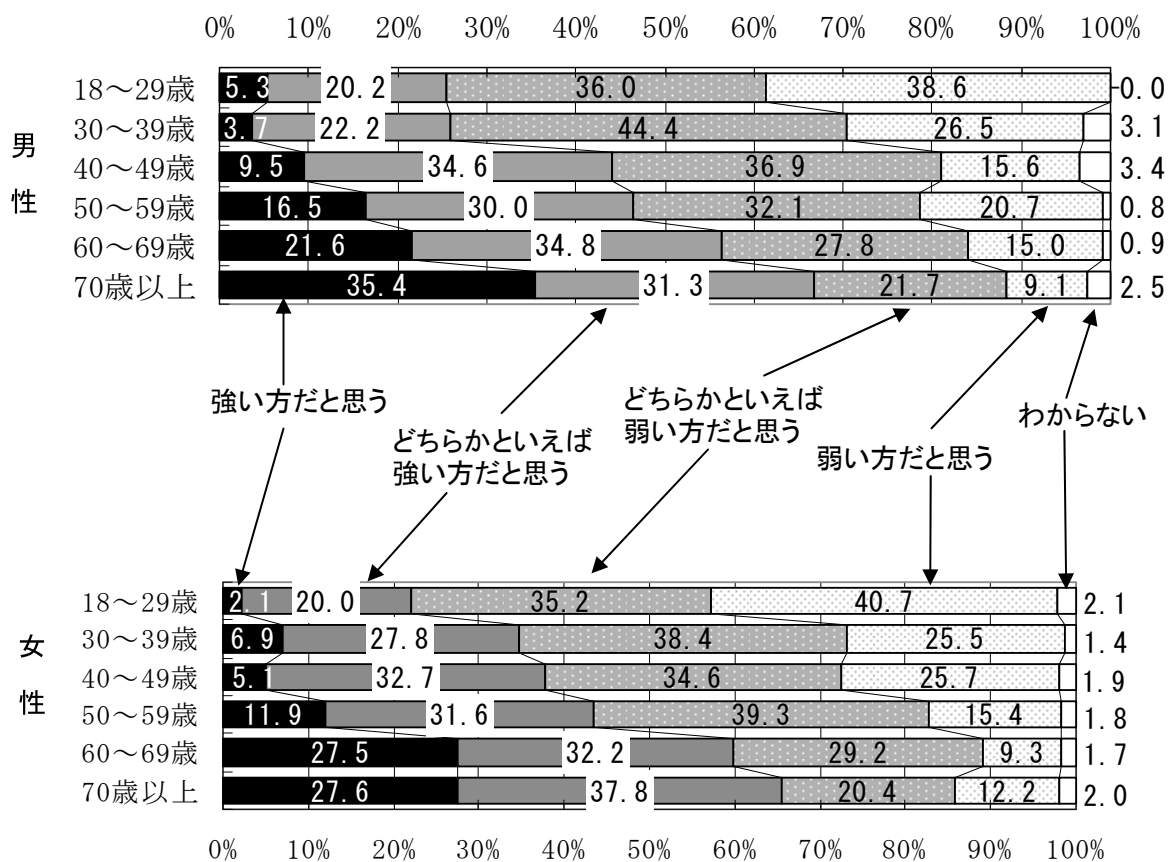
全国の小学6年生及び中学3年生を対象に行った調査によると、家で手伝いを「している」子ども(小学6年生)の割合は3人に1人程度。「どちらかといえば、している」子どもと合わせると5人に4人は手伝いをしている。中学生では手伝いをする子どもの割合は減少する。



(平成22年度全国学力・学習状況調査 文部科学省)

■ 図8 地域の人たちとのつながり

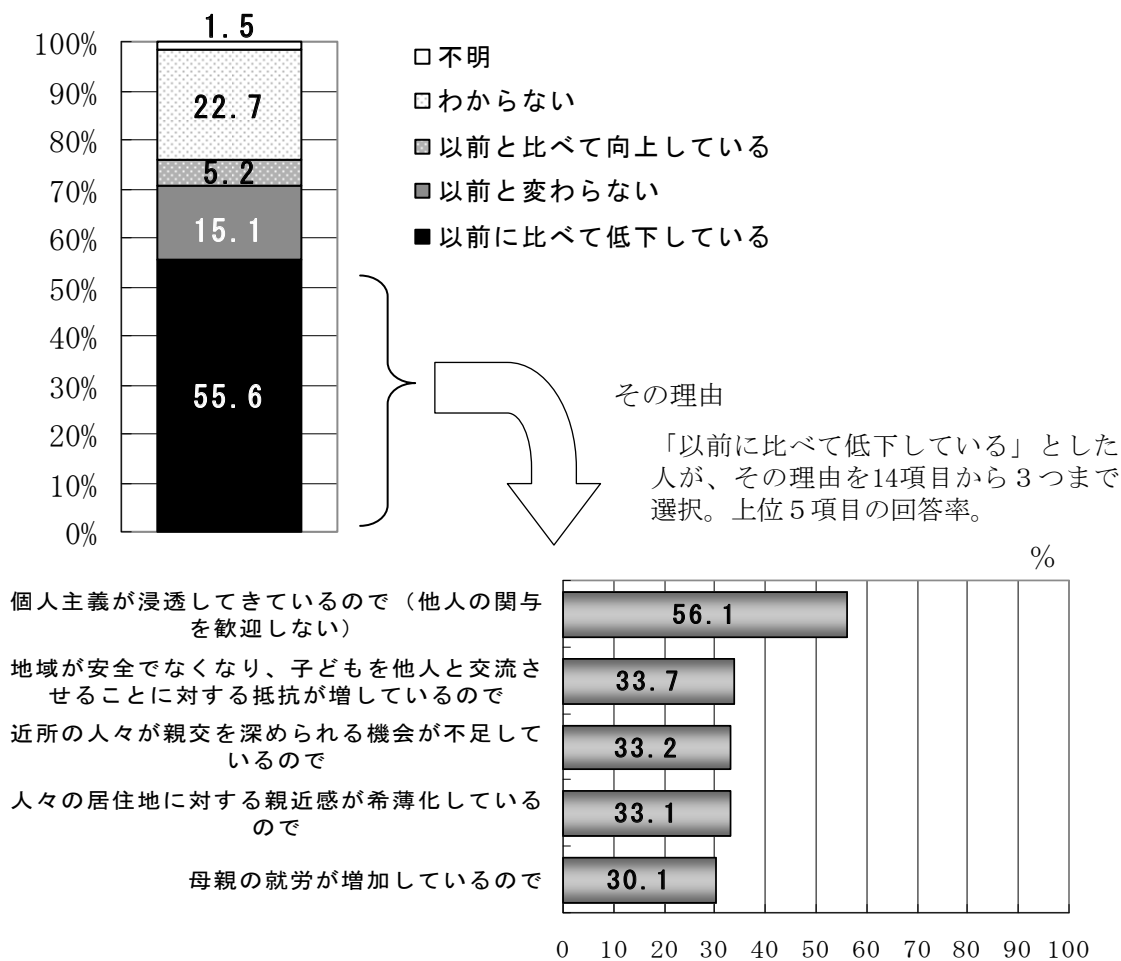
全国の18歳以上の者を対象に対する「あなたにとって、ご自分と地域の人たちとのつながりは強い方だと思えますか。」との問いに対し、18～29歳の7割以上が「弱い方だと思う」又は「どちらかといえば弱い方だと思う」としている。



(少子化対策と家族・地域のきずなに関する意識調査 平成19年2月内閣府)

■ 図9 「地域の教育力」に関する認識

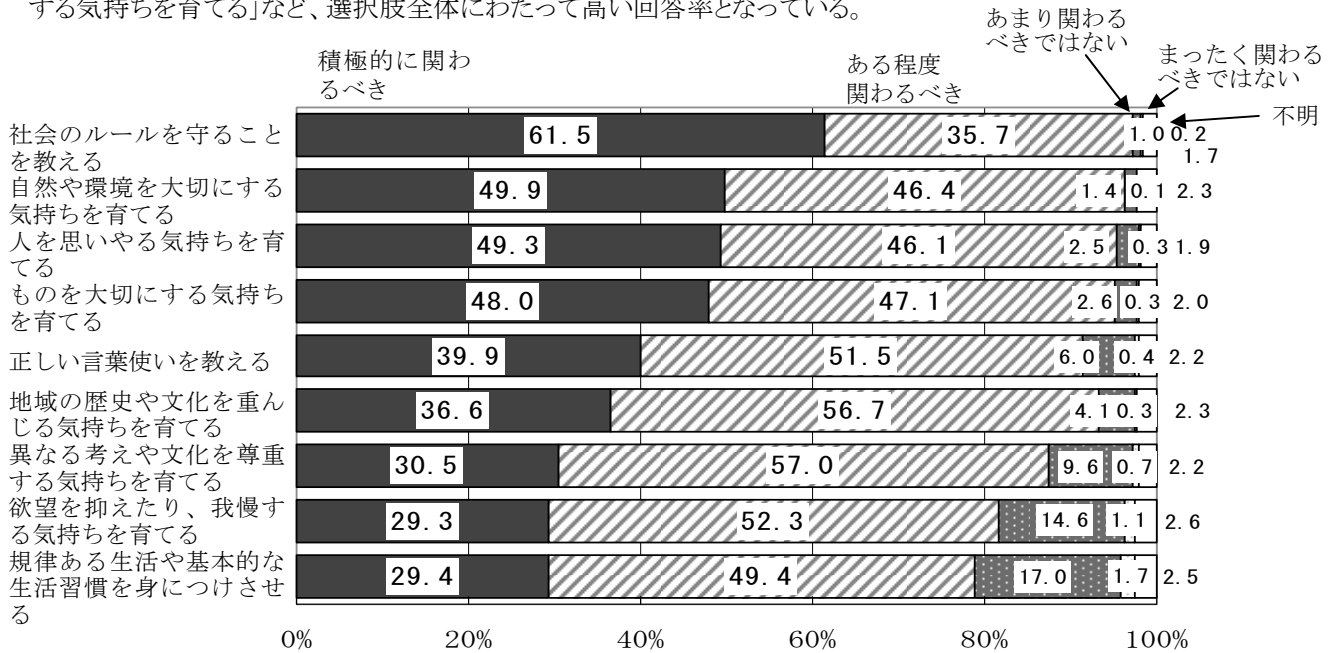
小学2年生・5年生、中学2年生の子どもの保護者に、「地域の教育力」を自身の子ども時代と比較してもらったところ、過半数が「以前に比べて低下している」(55.6%)としている。また、その要因をたずねたところ、「個人主義が浸透してきているので」が最も高く、多くの保護者は、他人の関与を歓迎しない風潮が「地域の教育力」の低下の要因と考えている。



(地域の教育力に関する実態調査報告 平成18年3月 文部科学省)

■図10-1 子どもを育てる上で地域が果たすべき役割

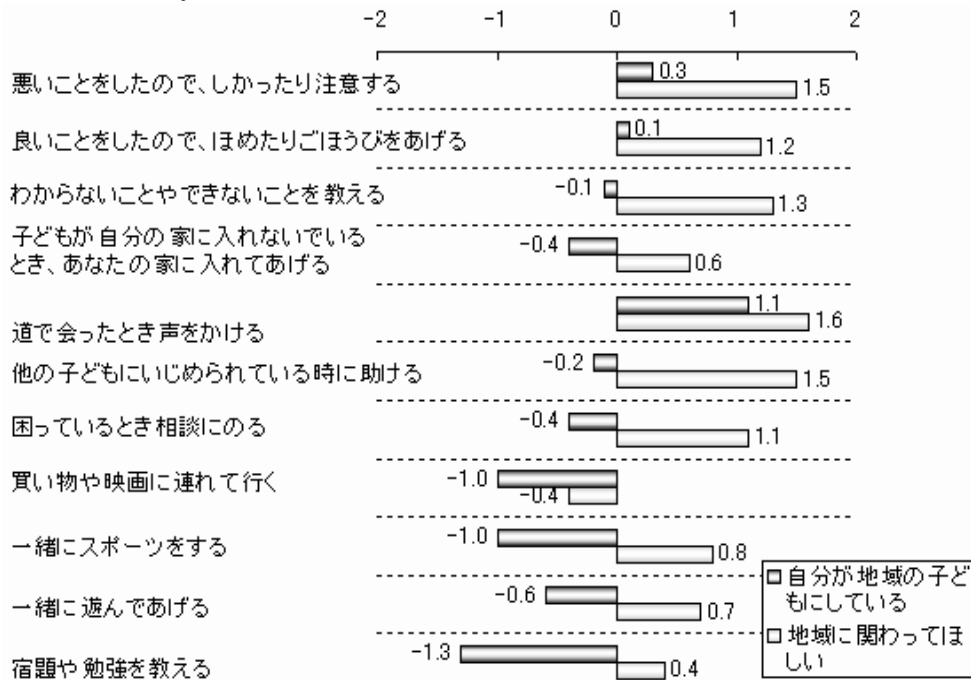
小学2年生・5年生、中学2年生の子どもの保護者に、子どもを育てる上で地域が果たすべき役割についてたずねたところ、地域に求めることは数多く、「社会のルールを守ることを教える」「自然や環境を大切に育てる」など、選択肢全体にわたって高い回答率となっている。



(地域の教育力に関する実態調査 平成18年3月 文部科学省)

■図10-2 保護者の認識と実際の行動

一方で、自分の子どもに対して地域に関わってほしいと考えるほど、自分自身は地域の子どもに対して十分な関与ができていない。

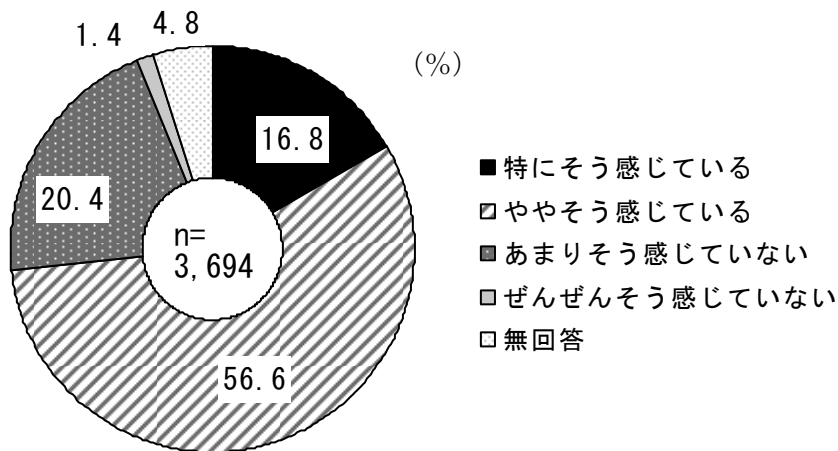


「積極的にしている」2点、「時々している」1点、「あまりしていない」-1点、「まったくしていない」-2点として、「叱る」「誉める」などの項目ごとに平均点を計算。

(地域の教育力に関する実態調査 平成18年3月 文部科学省)

■図11 「家庭で子どもに十分しつけをしない保護者が増えている」という声について

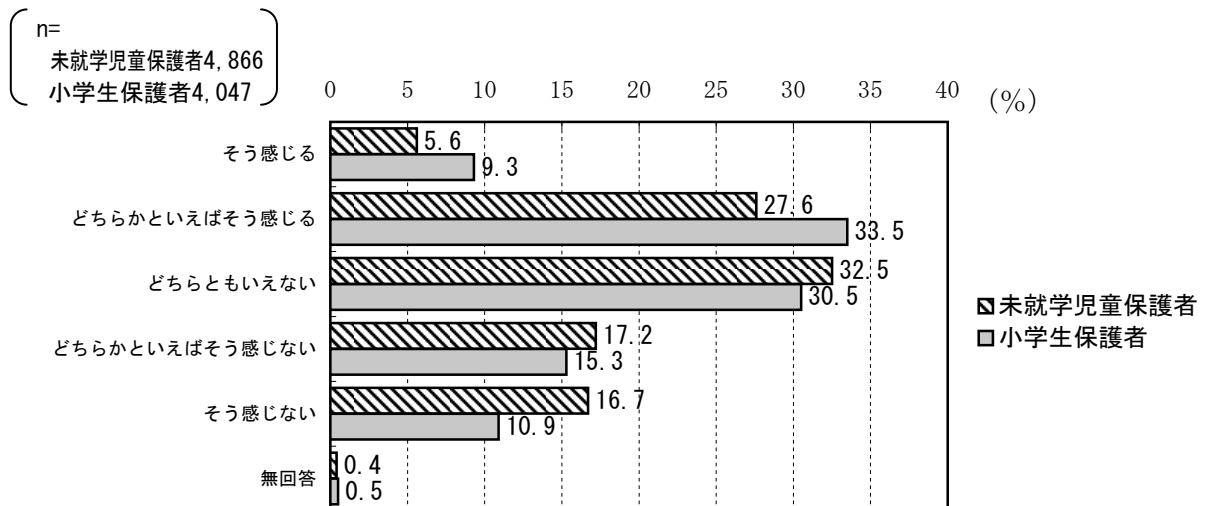
小学5年生及び中学2年生の保護者を対象に実施した調査によると、『家庭で子どもに十分躾をしない保護者が増えている』との声を聞くことがありますが、あなたはどのように感じていますか。』との問いに対し、「特にそう感じている」「ややそう感じている」と回答した割合の合計は73.4%にのぼっている。



(教育に関する保護者の意識調査報告書 社団法人日本PTA全国協議会 平成22年3月)

■図12 地域から見守られていると感じるか

横浜市内に在住する未就学児(0~5歳)保護者及び小学生保護者に対して行った調査によると、「子育てをしていて、地域社会から見守られている、支えられていると感じますか。(1つに○)」という質問に対し、「そう感じる」「どちらかといえばそう感じる」と回答したのは、未就学児保護者が33.2%、小学生保護者が42.8%で、未就学児保護者と比較すると若干小学生保護者の割合が高いが、いずれも過半数には満たない。



(子育て支援に関するニーズ調査報告書 横浜市 平成21年6月)

## 2 県内取組状況アンケートの結果について

### (1)実施概要

ア. 実施時期 平成22年8月下旬～10月29日(金)まで

イ. アンケート送付先 県内約1,700箇所(市町村経由 約1,200箇所)

その他、青少年課ホームページや県政情報コーナー等において周知

〈主な送付先〉子育て支援団体(1/5抽出)、私立認可保育所(1/7抽出)、公立保育所(一部)、  
青少年関係NPO(Eメールアドレスを公開している団体のみ、県登録団体の  
1/4程度)、子ども会、小学校PTA、放課後児童クラブ、児童館など

ウ. 回答数 回答数 512(送付先数の約3割が回答)

### エ. 質問内容

〈質問1〉貴団体において、①地域で、②「子どもの社会性を育む」「子どもの社会参画をすすめる」という視点から、③子ども(4～12歳の子どもを含む、一部も可)を対象に行っている活動や取組はありますか。

選択肢: 「ある」「あると思う」「ない」

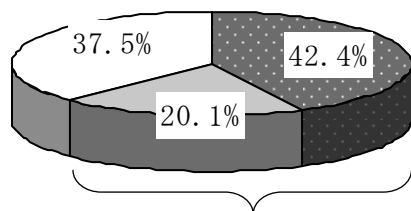
〈質問2〉質問1で「ある」「あると思う」と回答した団体に質問します。

1 活動時期 2 対象者の年齢 3 活動内容

### (2)回答内容

#### ア. 団体の属性等

属性	主な団体	全回答数	うち「ある」の数(※1)	うち「あると思う」の数(※1)	比率(※2)
地域団体・NPO	子ども会、小学校PTA、ガールスカウト・ボーイスカウト、青少年育成に取り組む任意団体、NPO等	219	104	57	73.5%
子どもの居場所・関係機関	児童館、子どもセンター、学童クラブ、社会福祉議会等	191	66	25	47.6%
保育・教育機関	保育所等	86	37	17	62.8%
不明等	名称・記載内容から属性が判別できないか、調査対象外団体	16	10	4	—
合計		512	217	103	62.5%



「ある」と「あると思う」が 62.5%

- ある
- あると思う
- ない

※1 「数」… 「①地域で、②『子どもの社会性を育む』『子どもの社会参画をすすめる』という視点から、③子ども(4～12歳の子どもを含むこと、一部も可)を対象に行っている活動や取組の有無」という質問に対する回答数

※2 比率…「ある」「あると思う」を合わせた、全回答数に対する比率

イ. 対象者の年齢(重複回答あり)

	回答数	母数に対する比率
10歳以上を含む	266	83.1%
7～9歳を含む	259	80.9%
4～6歳を含む	126	39.4%
母数(※4)	320	—

80%超の団体は、「7歳以上の子ども」を(も)対象に活動している。

他方、「4～6歳の子ども」を(も)対象に活動している団体も約40%ある。

※4 母数…「ある」又は「あると思う」とした団体の総数

(3) 活動内容(重複回答あり)

態様	内容(例)	回答数	比率(※5)
大人の活動に参加したり、 大人が設定した子ども向けの場に参加	大人と交流させる(遊ぶ、食べる等)	67	20.9%
	子ども会主催の子ども対象イベントに参加する等	60	18.8%
	地域のイベントに参加させる	105	32.8%
	清掃・資源回収、募金活動を手伝ってもらう	76	23.8%
	模擬店等で販売を手伝ってもらう等	28	8.8%
子ども主体で企画運営	子どもが(イベントなどに)企画から関わる	20	6.3%
	「子どもスタッフ」が(イベントなどを)主体的に企画運営	32	10.0%
	「子ども実行委員会」「子ども会議」を組織し、子どもが主体的に企画運営	6	1.9%
野外体験	自然体験、農業体験、キャンプ、冒険遊び場等	35	10.9%
その他	団体が子どもの受入側として協力等(保育体験、出前講座等)	18	5.6%
	母数(※4)	320	—

〈分類の視点〉

下にいくほど「子どもの主体性」が意識されていると思われる活動態様

この部分は重複回答なし

約18%の団体が、「子ども主体で企画運営する」ことを意識しながら活動している。

※4 母数…「ある」又は「あると思う」とした団体の総数

※5 比率…母数に対する比率



～ 青少年関係に取組んでいらっしゃる方へ～

# アンケートご協力をお願い


神奈川県青少年問題協議会では、現在、「川崎で育つ」子どもの社会や「子どもの社会を  
回復する」ための取り組みに、子どもが主体的に力を発揮し、社会参加につなげる力を育  
む方法や実践方法を検討しています。

※対象者  
4～12歳児

この協議会に依頼しているため、皆さまの関心や活動の状況、子どもの社会性「や  
」子どもの社会参加」別の視点や意見があれば、ぜひ参加にご答应いただきた  
たく、アンケートへのご協力をお願いします。

現代の青少年の抱える課題の徹底をまず前提の一つとして、子どもの社会性、コミュニケー  
ションや自己肯定感の低下が言われていますが、子どもの健全な育ちのためには、多  
様な場での体験・経験の機会を多くすること、中でも、自然に溢れた地域社会の  
場で、生活者が現場から子どもの社会性を育む機会をつくるということが重要です。

「うちではやっている」「特に意識していないけれど」の活動こそ、その地域にも深く  
いる人々のつながりによって行われて、ぜひ情報をお寄せください



裏面アンケート申し込みのうえ、FAXにお送りください。||  裏面へ

**回答期限：平成 22 年 10 月 29 日（金）必着**

● 神奈川県青少年問題協議会について  
青少年の成長に必要となる様々な活動の場や機会について、県民の皆様からのご意見を伺い、青少年の健全な育成や活動の場づくり  
のために取り組んでいます。詳しくは、ホームページ「青少年関係の青少年育成の取り組み」をご覧ください。  
▶ <http://www.pref.kanagawa.jp/sois/resse/sois/sosionen/index.html>

\*2 子どもの「社会参加」について  
→ [http://www.pref.kanagawa.jp/sois/resse/sois/sosionen/06\\_06\\_01.html](http://www.pref.kanagawa.jp/sois/resse/sois/sosionen/06_06_01.html)  
【子どもが参加する機会を多くする】の場へ参加してください

神奈川県青少年問題協議会（事務局：県青少年課）  
〒210-0800 横浜市中区本町1  
電話 045-221-0135（F）  
FAX 045-221-0111  
E-mail kanagawa-sois@sois.pref.kanagawa.jp

神奈川県県民局青少年部青少年課企画グループ 行き   
FAX番号 045(210)8841 

## 青少年の活動に関するアンケート

<質問1>  
貴団体に於いて、①地域で、②子どもの社会性を育む「子どもの社会参加をすすめる」という視点から、③子ども(4～12歳)の子どもを含む、一部も司)を対象に行っている活  
動や取組はありますか。

- ※ 子どもの社会性を育む活動について  
※ 「子どもの社会性」や「子どもの社会参加」を  
活動で実現しているか、それともなが  
るに努めている場合は、ある程度「子ども」を  
対象にしてください
- ある ・ ない ・ みると思う

<質問2>  
質問1で「ある」又は「あると思う」と回答した団体に質問します。  
1 活動頻度や回数 ※活動の頻度、時期等を教えてください。

- (回答例) 不定期  
○ 毎月2回のイベント  
○ 毎週火・木の15時～18時

2 対象者の年齢 ※対象とする子どもの年齢を教えてください。

- (回答例) 別荘  
○ 6歳から12歳  
○ 小学生～中学生に限定

3 活動内容 ※活動内容は、下記のとおりにご記入ください。

- (活動例) 例として…  
○ 遊びの場を提供  
○ 自然体験活動  
○ 公民館や学校  
○ 地域公民館  
○ 子どもの社会性  
(活動) 体験、参加  
活動に参加する  
を奨励している。

※ 参考となる資料やホームページなどがあれば、可能であれば送付をお願いします

貴団体の「担当者名」  
連絡先  
〒  
〒  
〒  
〒

～ ご協力ありがとうございました～

### 3 本協議会における実践と検証<詳細>

#### ○ 11の視点を生かした取組の実践と検証 ～ぷちひらつか 2011における実践と検証 (平塚商業高等学校と社団法人平塚青年会議所)

##### (1)「ぷちひらつか 2011～キッズビジネスタウンひらつか～」の事業概要

###### ① 目的

小学生が企業、団体、模擬官公庁などで構成する一つの街の市民となり、そこで体験する仕事や消費などをおして、ともに協力しながら街づくりを行い、主体性と想像力をもって社会の仕組みを学ぶ。また、事前に子ども議員や市長によって構成される「子ども会議」において主体的に計画した街づくりを実践することにより、地域の課題点について考えるとともに問題解決力を育成し、生きる力を育む。

また、小学生を中心とした取組に高校生、大学生、大人が協力・参画して運営することにより、キャリア教育としての側面を分かち合い、地域づくりの一助という共通の目的に向かって協働することの大切さを学ぶ。

さらに、平塚商業高校チャレンジショップなどと連携したプレ事業を実施し、上記の目的を達成する一助とするのと同時に、「ものづくり、政策」をキーワードとした展開を意識することにより、高いレベルで目的を達成することをめざす。

###### ② 事業内容

事業は「子ども会議」、「プレ事業」、「メイン事業」の3つで構成される。

#### ○ 子ども会議

##### <目的>

事前に募集した「子ども議員」によって構成される「子ども会議」を開催し、街づくりについて議論し準備を行い、各事業の中心となり行動することを目的とする。

##### <内容>

- ・ 「子ども議員」は「子ども会議」の一員として活動する。
- ・ ぷちひらつかのデザインを事前に行う。
- ・ 事前調査、交渉、広報活動を行う。
- ・ メイン事業において、街の運営とぷち市民会議を運営する。

##### <構成メンバー>

- ・ 子ども議員（小学4～6年生約30名）
- ・ ガイド役として平商生徒小委員会（5名）、大学生協力団体A p a s（約10名）

#### ○ プレ事業

##### <目的>

子ども会議と連動、または単独の事業として開催し、ものづくりや研修体験を通してメイン事業へ向けた活動を行う。

### <内容>

- ・ 体験により学び、発表を行う。
- ・ 体験により学び、ものづくりを行う（第2通貨支給）。

### <参加者>

- ・ 6月実施分：子ども議員
- ・ 8月実施分：必要に応じてウェブページ等で募集する。

## ○ メイン事業 ※ 仕組みは、参考図（P70）を参照

### <目的>

事業全体の目的（（1）「ふちひらつか 2011～キッズビジネスタウンひらつか～」の事業概要 ① 目的）参照。

### <内容>

#### 【参加児童の流れ】

- ① 「受付」にて市民証を提示し、出席確認後、それぞれの役割において行動を実施。
- ② 「職安」にて体験したい仕事を選び、「職業カード」を受け取る。その後、各ブースに移動し仕事をする。なお、体験時間は基本的に1時間とする。
- ③ 仕事終了後「銀行」に行き、給料（域内通貨「ふち」）を受給する。
- ④ 参加児童は受け取った域内通貨「ふち」のうち10%を所得税として「税務署」にて納税する。
- ⑤ ②～④を繰り返すか、「ふち」を買い物で消費する。  
リアル店舗で使用できる「ゴールド」は銀行にて両替を行う。  
※ 「銀行」開店時は域内通貨「ふち」を預金可能。  
ただし「ゴールド」は預金できない。
- ⑥ 「市役所」にて終了作業を行う。

#### 【消費活動のみ参加】

- ・ 抽選の結果参加できない児童であっても、昨年までの貯金を用いて消費活動に参加できる。受付を行い、バンダナ、通帳（市民証を兼ねる）を渡す。消費活動終了後、帰宅時には市役所へ寄り市民証を返納することで、小学生のまちへの出入を管理する。
- ・ まちかど商品券（まちかど広場のチャレンジショップで販売）を購入した大人は消費活動（模擬店のみ）に参加できる。但し、消費時に釣銭は払わず、また現金への換金も不可とする。交換枚数：1,000円→2,200ふち=200ふち×11枚  
※ 1,000円のみでの交換しか行わない代わりに、120%のプレミアを付ける。

### <参加者>

#### \* 児童

- ・ 平塚市、大磯町、二宮町内の小学校に通学する児童及び同地域在住の児童（1～6年生）…事前募集280名、当日参加【先着順】20名（受付でバンダナを配付）
- ・ 子ども議員（小学4～6年生約30名）
- ・ 消費活動のみ参加できる小学生

#### \* 高校生、大学生

主催者、協力団体を含め約100名で運営

＊ 大人

- ・ 主催者、協賛及び協力企業団体を含め約 100 名で運営
- ・ 「まちかど商品券」購入者が消費活動に参加。まちかど広場にてチャレンジショップ（小田原総合ビジネス高校）が販売する。

(2) 「ぶちひらつか 2011～キッズビジネスタウンひらつか～」委託事業に関わる組織形態

事業名	主催者	担当者	実動組織	小学生の関わり
子ども会議事業	平塚 J C、平商	平商	子ども会議準備委員会（大学生、高校生の組織）	子ども会議（対象地域内から募集した小学 4～6 年生の組織）
プレ事業	平塚 J C、平商	①平塚 J C 6 月例会における事業：平塚 J C ②平商チャレンジショップ内におけるものづくり事業：平商	チャレンジショップ、ぶちひらつか委員会（高校生の組織）	子ども会議（対象地域内から募集した小学 4～6 年生の組織）
メイン事業	平塚 J C、平商	平塚 J C、平商	平塚 J C、平商、子ども会議準備委員会、チャレンジショップ、ぶちひらつか委員会	参加児童（対象地域内から募集した小学 1～6 年生）

- ・ 別途立ち上げた「子どもの社会性を育む方策実践検証委員会」が全体をフォロー。
- ・ 「子どもの社会性を育む方策実践検証委員会」と「子ども会議準備委員会」が、11 の視点を実践検証する。
- ・ 文中略記（以下同様）平塚 J C＝社団法人平塚青年会議所、平商＝神奈川県立平塚商業高等学校

(3) 視点・項目の選択と選択理由

11 の視点のうち 3 つ以上を、また、新たな視点の追加や、11 の視点の修正等を検討する項目を選択して実践し、その結果に対して検証を行うこととなっており、以下の視点及び項目を選択した。

① 11 の視点の選択及び理由

「4 自分にできることを見つけていく気持ちを育てる」という視点

- … 子ども会議事業が組み立てていくメイン事業は、対象年齢が 6 歳から 12 歳と幅広く、また、子ども会議準備委員会としても主体的な街づくりを行ってほしいという願いから選択した。

「6 異年齢、多世代が交流する」という視点

- … 「ぶちひらつか 2011～キッズビジネスタウンひらつか～」全体像を考えたとき、小

学生、中学生、高校生、大学生、専門学校生、個人事業主、教職員他、多くの人たちが交わってキャリア教育という側面で事業が形成されている一面があるため、選択した。

#### 「7 疑似体験で終わらせない、現実の社会につなげていく」という視点

… 本物の商店で働く体験を実現し、さらに模擬通貨を実際の商店街で使用できる仕組みを検討する方向性をめざしたため、選択した。

### ② 新たな視点の追加や、11の視点の修正等を検討する項目の選択及び理由

#### 「ア 子どもに役割を与えること」

… 子ども会議事業において、児童は単なる受け身でなく、自ら主体的に考え行動し、役割を担っていくことをめざしたいと考えていたため、選択した。

#### 「イ 鍵となる場所を定めることで、地域の大人が参加でき、現実社会につなげられる展開とすること」

… メイン事業会場として実際の商店街を含むエリアを選択し、その中で現実社会と絡んだ展開、具体的には本物の商店でのミニインターンシップを実現していく方向性があったことに加え、「ものづくり、政策」をキーワードとして展開することをめざしたため、選択した。

#### 「ウ 支援者を組織化し、ノウハウを伝承するしくみをつくること」

… 主催者が計画的に支援者を募ることに加え、大学生団体を含め参加児童に絡む支援母体を模索することが本事業全体における今後の検討事項となる可能性があったため、選択した。

## (4) 視点別実践内容と方法

### ① 11の視点

#### 「4 自分にできることを見つけていく気持ちを育てる」という視点

##### ○ 事前の子ども会議

##### <実践内容>

話し合い（白紙状態から主体的な街づくりの発想を導く。補助としてワークシートで展開）

##### <方法>

- ・ 事前の子ども会議においては、「自分にできることを見つけていく気持ちを育てる」ためには各子ども議員の発想を大切な要素と考え、子どもたちの発言から実現可能なアイデアをピックアップし、具現化させていくという方向性で話し合いを進めた。

→ 主に第1回子ども会議の報告においてこの視点が反映されている。

… 「何をしたいか」を整理、仕事について、今年のニュースを取り入れよう。

- ・ 展開の補助として、多数決による議決と少数意見の尊重という民主主義に則った展開を図った。

- ・ 子どもたちが話し合いを円滑に進めることができるような配慮として、事前にワークシート形式による各自の意見集約と、それに基づいた話し合いを持ち、会議を進めた。
- ・ 想定される様々な意見に合わせたワークシートをあらかじめ用意し、子ども会議がスムーズに進むような配慮を行った。
  - 結果的には役に立たないワークシートが発生した。

#### <参加者及び関係者の反応、感想（考察）>

##### \* 子ども議員

子ども会議を構成する子ども議員は4～6年生であり、初めての子ども、過去の参加児童経験者、過去の子ども議員経験者がそろっていた。その中で、それぞれの子ども会議自体へのイメージはバラバラだったが、議論が進むにつれて、自分が知っている知識を基に積極的な発言を重ねていった。また、大人の発言に対しての反応は非常にシビアであり、自分たちが主役で議論を進めていくということについて、自覚と責任が強くなっていったようだ。

##### \* 子ども会議準備委員会

- ・ 子どもたちをリードしていくこと、教育していくことの難しさを痛感したが、これから社会に出るにあたり、良い経験となった。
- ・ 思った以上に子どもたちが活発な反面、想定したとおりに行かず軌道修正が大変だった。
- ・ 主催者の意向に沿って進めていくことを強く考えすぎてスムーズに行かなかったシーンがあった。

##### \* オブザーバー（主催者）

- ・ 主催者としては、昨年の子ども会議の形骸化を防ぐために活性化を目論んでいたため、計画的な展開が必要であった。
- ・ 学生団体A p a sに、子ども会議の進行をスムーズに行かせるための計画を立ててもらい、それに高校生5名が加わり、子ども会議の進行を子ども会議準備委員会が担うという仕組みとしたが、そうした一番の理由は、主催者（大人）よりも、より年齢の近い高校生・大学生が会議を進行することにより、子どもたちは自分たちの活動として主体的に考えやすいただろうという推測による。
- ・ 実際には、我慢しきれず一部手出しをしすぎてしまい、子ども会議準備委員会が板ばさみになってしまった。大学生にリーダーをゆだねたのだから、という面と裏腹に、時間が足りないという部分において、反省多々あり、というところである。

## ○ メイン事業

### <実践内容>

仕事のないふち市民の行動シーン

### <方法>

子ども議員の活動拠点となる市議会ブース前に、仕事のないふち市民が集まり、希望制で仕事につく。それを子ども議員がサポートする。

### <参加者及び関係者の反応、感想（考察）>

##### \* 子ども議員

- ・ 委員会別の仕事と並行していたため、十分な対応ができなかった。
- ・ 事前に考えていた仕事の中で、募金の仕事については、子ども議員が率先して実行することができなかった。
- ・ やりたいことを優先してしまい、全体がうまくいくように考えて行動できないときがあった。
- \* 子ども会議準備委員会
  - ・ 開始早々であったため、全体への指示業務に加え、保護者からの問い合わせが殺到し、さらに市役所やハローワークのシステム上の問題とリンクして子どもたちがあふれ、パニック状態になってしまった。
- \* オブザーバー（主催者）
  - ・ この時間帯に周囲を見渡し、自分が次にしたいことを考え、行動している児童がいたので、参加児童ができることを見つけるという意味では興味深いシーンであった。
  - ・ 一般の参加児童は待ちの状態となるシーンであったが、リアルな街と考えた場合には存在しうる要素であると捉えた。ただし、保護者が理解しづらい部分ではある。
  - ・ 運営側の人数配分や業務内容がうまくいかなかったことは否めない。

## 「6 異年齢、多世代が交流する」という視点

### ○ 事前の子ども会議

#### <実践内容>

事業全体

#### <方法>

小学生のリード役を高校生が実施、それを大学生がまとめ、大学生の相談を主催者である大人（平商教職員、平塚JCメンバー）が実施、その見学を保護者が行い、必要により主催者へ提案を実施した。

#### <参加者及び関係者の反応、感想（考察）>

- \* 子ども議員
  - ・ 高校生、大学生、大人と仲良く活動できた。
  - ・ 大人が多少口うるさいときもあった。
  - ・ 高校生、大学生を困らせてしまったときがあった。
- \* 子ども会議準備委員会
  - ・ 子どもたちをリードしていくこと、教育していくことの難しさを痛感したが、これから社会に出るにあたり、良い経験となった。
  - ・ 思った以上に子どもたちが活発な反面、想定したとおりに行かず軌道修正が大変だった。
  - ・ 子どもたちに教えられたことがたくさんあった。
- \* オブザーバー（主催者）
  - ・ 全体的には、参加者それぞれが予想以上に活発に絡み、成果があったと思われる。
  - ・ 子ども議員は、議員同士が初めての顔合わせであり、高校生や大学生とうまく交わることと並行して、小学生同士の人間関係を作り上げることにこずった様子も窺え

る。大人から見れば同じ小学生だが、当事者から見れば学年の隔たりも強いと思われた。これは6年生の意見が通りやすい面からも窺えた。

- ・ 高校生と大学生はうまく協調し、機能していた。高校生に対しては、大学生にいろいろな面で配慮をいただけたと思われる。
- ・ 大学生は小学生の扱い方が難しいような印象だったが、この事業を通じて克服していた様子である。
- ・ 保護者と主催者は積極的に意見交換する場を持つことができた。

## ○ プレ事業1（平塚JC主催「地域の魅力発見」）

### <実践内容>

事業全体

### <方法>

平塚JCが地域のB級グルメを集めてイベントを実施したが、子ども議員を招き見学や試食をすることで、地域の活性化を考えさせると同時に、地域の大人と交流することをめざした。

### <参加者及び関係者の反応、感想（考察）>

#### \* 子ども議員

- ・ いろいろなものが食べられてよかった。
- ・ 商店街の大人の人にあいさつ回りができ、声をかけてもらったのがよかった。また、メイン事業の場所が見られたのでよかった。
- ・ ステージで参加している人達に宣伝活動ができた。うまくできなかったかもしれないけれど。
- ・ きゅうり作付け面積が全国的に高いことは知らなかった。

#### \* 子ども会議準備委員会 → 日程の関係で不参加。

#### \* オブザーバー（主催者）

- ・ 子どもたちが商店街に足を運び、商店街や街の大人と触れ合う機会としてはよいシーンであった。
- ・ メイン事業に地域の魅力を取り入れようと企画したが、結局メイン事業につなげるには敷居が高すぎたようだ。
- ・ 全体的には、参加者それぞれが予想以上に活発に絡み、成果があったと思われる。

## ○ プレ事業2（平商主催「チャレンジショップにおけるものづくり体験教室」）

### <実践内容>

事業全体

### <方法>

ものづくり体験教室に参加する子ども議員及びその家族や友人に対して、大学生、保護者及び専門家が指導を行いものづくりを実施。それを平商チャレンジショップ委員（高校生）や教職員がバックアップした。

※ 実施場所である手づくり食工房は平塚商工会議所から提供を受けており、職員が常駐しアドバイスをいただいている。



※ 製作物はメイン事業にて販売する。

#### <参加者及び関係者の反応、感想（考察）>

##### \* 子ども議員

- ・ いろいろなものが作れておもしろかった。もっとたくさん作りたかった。
- ・ 高校生や大人の人がやさしく教えてくれた。
- ・ 作ったものを、メイン事業当日に給料で買うことができてよかった。

##### \* 子ども会議準備委員会

- ・ キャンドル作りは好評だった。一部固まらないろうそくがあった。
- ・ いろいろな立場の人たちが協力して、事業を盛り上げることができた。

##### \* 指導者

- ・ 小学生が一生懸命に取り組む姿が見られ、良い体験となった。
- ・ 男子向けの製作物が少なく心配であったが、結果としては問題なかった。

##### \* オブザーバー（主催者）

- ・ 初めての試みであったが、様々な方々が絡み、事業自体活気のあるものとなった。成功したといえる。
- ・ 時間と予算をかけるだけ成果がある内容といえる。

#### ○ メイン事業

##### <実践内容>

事業全体

##### <方法>

小学生、中学生、高校生、大学生、商店街関係の大人、主催者等、様々な人間が絡み事業が成り立っている。

##### <参加者及び関係者の反応、感想（考察）>

- ・ 主役である小学生をキーとして、すべての関係者が協働することにより、お互いが学びあう姿勢がみられた。
- ・ それぞれが自分の先のキャリアを見つめることができる展開となった。

#### 「7 疑似体験で終わらせない、現実の社会につなげていく」という視点

##### <実践内容>

（事前の子ども会議）話し合いの中で、現実社会につなげていく内容の導き

（プレ事業）ものづくり体験教室の実施

（メイン事業）商店街店舗での仕事体験、商店街で通貨を使える取組とそれに絡む為替及び変動為替の実施

##### <方法>

- ・ 「商店街での実施」を提示し、提案された内容を実施する。  
→ 商店街店舗での仕事体験が提案され、それを具現化した。関連して給料を商店街で使えるようにしたいという提案があり、為替レートを設定することを条件として実施が決定した。
- ・ 「時事問題」を列举させ、関連した内容を実施する。

- 防災関係の時事問題より、大震災の被災者児童と交流する提案がされた。結果としては、被災者への配慮や予算の問題として、募金活動をする方向となった。
- ・ 「やりたいこと」を列挙させ、提案された内容を実施する。
- ものづくりの仕事体験が提案され、それを具現化した。関連して、作ったものを販売するということを決定した。

#### <参加者及び関係者の反応、感想（考察）>

##### \* 子ども議員及び参加児童

（商店街店舗での仕事体験について）

- ・ 商店街で働くことができてよかった。
- ・ 商店街でお金が使えてうれしかった。

（通貨の為替について）

- ・ お金の交換の仕組みが難しかった。
- ・ たくさんのゴールド（商店街で使えるお金）を交換できてよかった。

（震災関係の取組について）

- ・ 被災した小学生と一緒に働いたり、話を聞きたかった。
- ・ 募金活動が実行できなかったのが残念だった。

##### \* 子ども会議準備委員会（主催者を含む）

- ・（商店街店舗での仕事体験について）模擬店に比べて全体的に人気があった。

（通貨の為替について）

- ・ お金の交換の仕組みの説明が難しかった。
- ・ 時間限定で変動相場としたとき、参加児童が殺到したので大変だったが、仕組みを理解している人にとっては面白い取組となった。
- ・ 1～6年生が参加しているが、低学年にはしくみは分からなかったと思う。逆に高学年は、ある程度理解できているという感触があった。
- ・ 保護者からは難しすぎるという話もあったようだが、保護者には見守る姿勢で、難しいものを長期的に理解していくための入り口と考えていただければと思う。

（震災関係の取組について）

- ・ 被災した小学生と一緒に働きたいという希望があったが、被災した児童の中には家族が無事でない児童もいるので、配慮した結果として今回は実施しなかった。
- ・ 募金活動は、市議会ブースの運営をスムーズにすれはうまくできただろう。
- ・（その他）小学生は思ったよりも発想が大人であり、現実社会へ子どもたちの活動がつながっていくことを意識したほうがよいと考えていたので、取組内容としてはとても充実したものとなった。

## ② 新たな視点の追加や、11の視点の修正等を検討する項目

「ア 子どもに役割を与えること」

### ○ 事前の子ども会議

<実践内容>

市長決め、委員会活動、選挙管理委員会活動

## <方法>

- ・ 市長決めは例年通りであるが、決め方に関して議論を行い、立候補の条件整備、選挙管理委員会の立ち上げなどを考えさせた。
- ・ 委員会活動に関しては、子ども会議事業を効率的に進めるために、子ども会議準備委員会からの提案として実施した。具体的には「リアル店舗模擬店委員会」、「ステージ委員会」、「政策金融委員会」に分け、それぞれが活動を展開した。

## <参加者及び関係者の反応、感想（考察）>

### \* 子ども議員

- ・ 市長になれてよかった。
- ・ 委員会活動ではたくさん話し合いができて、全体のとくに比べて自分の意見が反映された。
- ・ 自分の希望した委員会に入れなかった。
- ・ 選挙管理委員会は各学年1名だったが、選挙のやり方を説明したり、欠席者のことを相談したりして、充実した活動ができた。

### \* 子ども会議準備委員会（主催者を含む）

- ・ 子どもたちが役割に応じた仕事をする事自体はよいことで、時間が効率的に使えた。
- ・ 委員会活動については、事前に用意した委員会での希望を取ったところ、希望が偏ったため、委員会を合併するなどの工夫をせざるを得なかった。ぷちひらつか→仕事→店舗という感覚が子ども議員の中に根強く、政策金融委員会はとりわけ人気なかった。市長には政策金融委員会に入ってもらうことが前提であったが、市長の希望と合わなかった。
- ・ 選挙管理委員会は非常にうまく機能したと思われる。これは担当した子ども議員の理解度が高いことが挙げられる。

## ○ メイン事業

### <実践内容>

- ・ 参加児童に仕事、消費という役割を与える。
- ・ 子ども議員に役割を与える。

### <方法>

- ・ 参加児童は仕事、消費を通じて街に参加する。
- ・ 子ども議員に対して、委員会活動、ぷち市民会議、開会式及び閉会セレモニーにて役割を与える。

### <参加者及び関係者の反応、感想（考察）>

- ・ 役割を与えることにより、小学生の主体性が増していく。ただし現状では、役割を自分たちで作りに上げるということは、メイン事業においては難しい。
- ・ 小学生以外の関係者に関しては、小学生の役割分担が進むことにより、より主体的に動くための工夫と配慮が必要となり、運営上はネックとなるだろう。

「イ 鍵となる場所を定めることで、地域の大人が参加でき、現実社会につなげられる展開とすること」

## ○ メイン事業

### <実践内容>

メイン事業は、紅谷町まちかど広場を拠点として展開する。また、ものづくりの拠点を手づくり食工房とする。

### <方法>

道路使用許可、まちかど広場使用許可など、行政や地域の協力を得る。

### <参加者及び関係者の反応、感想（考察）>

- ・ 紅谷町まちかど広場は、平塚駅前商店街の中心に位置するため、ここでイベントを実施すると街全体から注目される。また、今回は多くの保護者が引率で来場したため、商店街自体が賑やかとなり経済効果も生まれた。
- ・ 商店街の店主の感想としては、非常に良い取組に協賛し、参加できたことで、将来の平塚市を担う小学生の啓発活動につながったことは意義深い、との感想をいただいている。
- ・ 自転車置き場や気温の問題など、クリアしなければならない問題はある。
- ・ メイン事業のものづくりについては、当日急遽という面があり混乱した面もあるので、事前に計画が必要である。

## 「ウ 支援者を組織化し、ノウハウを伝承するしくみをつくること」

### <実践内容>（事業全体において）

- ・ メイン事業運営スタッフ会議（協賛企業団体の組織）
- ・ 子ども会議準備委員会（大学生、高校生の組織）
- ・ ものづくり体験教室実施における保護者有志の協力組織

### <参加者及び関係者の反応、感想（考察）>

#### \* 主催者より

- ・ メイン事業運営スタッフ会議については、長い歴史があり、メイン事業における協力のあり方についてはすでに継承されている。今後は、毎年の新しい要素を理解し、対応していく方向になるだろう。また、協賛団体は平塚J Cの関係者が多く、非常にありがたいことであるが、今後は新たな協賛を開拓していく必要性もあると同時に、逆に協賛に頼るという体質へのアレルギーもあるようだ。
- ・ 子ども会議準備委員会については、既存の平塚J Cが主体であった子ども会議の運営を、今年より年齢に近い高校生、大学生に依頼をするという形で進んだ。これは、事業の分担化と新しいエッセンスを取り入れることにより、事業が今後発展的に展開する可能性を鑑みてのことである。活動が実際どのようなものであったかは前述のとおりであるが、非常に多くの学びの場であった。学生団体A p a sにおいては、非常に優秀なスタッフを要し、ボランティアとして重要な役割を果たしてくださったことに感謝したい。
- ・ 今回は、急遽ものづくり体験教室における保護者有志の協力を得ることができた。協力いただけたこと自体が非常に助かったのだが、ぷちひらつかに対する保護者の目線が主催者にはない発想が含まれており、今後の展開として、保護者の絡み方は注目度が高い。

## (5) 視点を盛り込んで事業を実施した結果としての課題、意見及び提案

### ① 事業実施の前提

このたび実施した「ぶちひらつか 2011～キッズビジネスタウンひらつか～」は、平塚 J C が従来実施していた「ぶちひらつか」と、平商が中心となり実施していた「キッズビジネスタウンひらつか・キッズビジネスタウンかながわ」がコラボレーションしたものである。初めての実施は平成 22 年 7 月のことで、今回は第 2 回目となる。

事業としての大きな方向性は、昨年 of 平成 22 年実施で固まった。その内容の主だったものを、昨年の実施報告書総括に下記のとおり記述した。

ア 人同士がつながり、連携をすること自体は大きな財産であり、その中での学びは多岐にわたる。今年の実践により、より多くの「財産と学び」を得た。

イ 平商の持つ「キッズビジネスタウン」の財産と、平塚 J C が持つ「ぶちひらつか」の財産が融合し、地域の財産である「小学生や中学生、高校生」といった将来を背負う人材そのものの「資源強化」を行った。

その一方で、昨年実施内容の改善点として以下の内容が挙げられた。

ウ 子ども会議の充実

… 子ども会議については、平塚 J C 主導で実施してきたが、大人と子どもの隔たりが埋まらず、さらに子ども会議の専属スタッフがいない状況において、十分な活動が当日得られない、ということである。

エ 主催者相互の隔たりの克服

… 例) 昨年実施時には「リアルな街づくり」に対するイメージの相違があり、その部分がなかなか解消されなかった。

例) 平塚 J C は単年度組織であるため、担当者から内容が継承されない傾向がある。  
また、組織内打ち合わせ事項の確定が遅い。

以上を改善することを前提に今年の事業展開を計画して進めてきた。

### ② 事業実施の方向性

ア 前年度の反省を踏まえた事業委託に関する検討事項

上記①の改善を前提として計画を進める中、平成 22・23 年期神奈川県青少年問題協議会より、11 の視点の実践検証の提案がされたが、検討した結果は以下のとおりである。

上記①ア「人同士がつながり、連携をすること自体は大きな財産であり、その中での学びは多岐にわたる。今年の実践により、より多くの『財産と学び』を得た」の内容に関連し、11 の視点「6 異年齢、多世代が交流する」という視点に絡め検証することは、有効であると考えた。

上記①イ「平商の持つ『キッズビジネスタウン』の財産と、平塚 J C が持つ『ぶちひらつか』の財産が融合し、地域の財産である『小学生や中学生、高校生』といった将来を背負う人材そのものの『資源強化』を行った」の内容に関連し、11 の視点「4 自分にできることを見つけていく気持ちを育てる」という視点及び「6 異年齢、多世代が交流する」

という視点を検証することは有効であると考えた。

上記①ウ「子ども会議の充実」に関連し、今回の事業に対しては「子ども会議」を実施するための組織作りが必要と判断していたのだが、このことが、選択したすべての11の視点及び新たな視点の追加や、11の視点の修正等を検討する項目に関連することから、子ども会議を事業として切り離し、検証を実施する場としてふさわしいと考えた。とりわけ、新たな視点の追加や、11の視点の修正等を検討する項目「ウ 支援者を組織化し、ノウハウを伝承するしくみをつくること」は、子ども会議を運営するための組織作りの後押しとなると考えた。

上記①エ「主催者相互の隔たりの克服」に関連し、今回の事業に対してはリアルさのイメージを、商店街での実施という要素と絡めてフォーカスするために、実践・検証を行う視点は、事業内容を確定する後押しとなると判断した。

11の視点「7 疑似体験で終わらせない、現実の社会につなげていく」という視点を選択し、子ども会議事業を進めつつ、新たな視点の追加や、11の視点の修正等を検討する項目「イ 鍵となる場所を定めることで、地域の大人が参加でき、現実社会につなげられる展開とすること」を検証するために、事業内容を確定することが可能、さらに子ども会議の方向性が定まる、と考えた。

## イ 事業形態の分割

全体としては、非常にボリュームのある事業であるため、今年は事業を3事業形態（子ども会議事業、プレ事業、メイン事業）に分割した。その理由は、主催者間の責任分担を明確にする意味合いはもちろんであるが、実践・検証を行うためには、ある程度別組織にお任せすることが大切であると考え、とりわけ子ども会議事業を運営する組織を立ち上げるために、この事業形態の分割が決定された。

## ③ 実施結果

### ア よかった点

- ・ 視点を意識して事業展開を行うことにより、事業のフレームが崩れず、計画から実行までの流れがスムーズであった。具体的には商店街店舗における活動や為替に関する内容等が挙げられる。
- ・ 視点の検証をすることを考えたときに、事業自体の整理及び実施に絡む主催者をはじめとした組織の整理整頓が進んだ。
- ・ 多くの視点から選択した、という事実から、選択した視点自体が他の視点よりも、より有効であるというイメージに基づき行動することができた。
- ・ 既存の支援者組織に加えて「保護者」という支援者がいるということへの気づき、次年度への発展的な展開を考えたときに、視点を意識した事業展開の恩恵に与かったという理解をしている。実は小学校1～6年生までの6年間保護者が小学生とともにこの事業に絡み、継承役として大きな役割を果たすのである。
- ・ 事業委託を受けていることにより、いままでよりも注目度が増し、さらに他地域での実施内容に触れることができ、視野が広がった。
- ・ 事業委託の予算執行があったこと自体、非常にありがたく、支援組織への委託実践と検

証がスムーズであった。

- ・ 視点を意識した活動の中で、小学生は6学年と幅広いこと、それに対応するためのきめ細やかさが求められることへの理解が進んでいった。

## イ 課題

- ・ 視点をいつも意識できるわけではなく、「視点に関する検討」という限定題目に対して、事業最中は実施できなかった。
- ・ 前年の実績においてすでに検証がある程度できている「安全」と思われる項目を選択している面があり、もう少し別の視点を取り入れてもよかったのではと思われる。反面すべての視点に関連した事業展開であるということも言える。
- ・ 商店街は広域であるため、レギュラスポットの人が集まれる場所をキースポットとして、ということに対しては時間が必要と感じた。偶然紅谷町まちかど広場があるという状況であったが、フリースポットでもあり、この部分は視点に沿ったものであるとはいいいがたい。

## ウ 提案のための検討

- ・ 11の視点「4 自分にできることを見つけていく気持ちを育てる」について、この対象となるのは子どもたちだけではなく、「小学生から大人までのキャリア教育としての位置づけであるぷちひらつか」と考えたときに、それぞれの立場で学びがあり、それは大人も同じである、という相互教育の場としての視点は興味深いものだ。
- ・ 11の視点「6 異年齢、多世代が交流する」という視点について、交流自体は難しいことではないが、その絡み方、こと意図的にとなると、そこに教育が生まれ、これは閉鎖型の学校教育では得られない非常に有効なシーンが多く、この部分を含めた視点への修正もあり得るだろう。
- ・ 11の視点「7 疑似体験で終わらせない、現実の社会につなげていく」という視点及び新たな視点の追加や、11の視点の修正等を検討する項目「イ 鍵となる場所を定めることで、地域の大人が参加でき、現実社会につなげられる展開とすること」について、現実の社会、現実社会というものが何をさすのか分かりづらいので、時間軸で考えた今現在の現実社会、すなわち大人の働く世界であるのか、将来子どもが大人になったときに体験する現実社会なのか不明確である。
- ・ 新たな視点の追加や、11の視点の修正等を検討する項目「ウ 支援者を組織化し、ノウハウを伝承するしくみをつくること」について、ノウハウ蓄積型のイベントであるぷちひらつかは、将来街を担うであろう小中高校生のための学習形態の一つ、と捉えたとき、①事業自体の長期計画性、②事業に参加した人たちがその後街でどう活動していくか、という切り口も有効だろう。

## (6) 11の視点の追加・修正案

### ① 視点の追加案 → 「子どもは将来の地域を担う」という視点

(提案理由) 新たな視点の追加や、11の視点の修正等を検討する項目「ウ 支援者を組織化し、ノウハウを伝承するしくみをつくること」を考えると、ノウハウ蓄積型のイベントであるぷちひらつかは、将来街を担うであろう小中高校生のための学習形態の一つ、と捉えたとき、①事業自体の長期計画性、②事業に参加した人たちがその後街でどう活動していくか、という切り口が有効であると考え、特に②を重要視し、提案する。

### ② 視点の追加案 → 「背中を見せる」という視点

(提案理由) ぷちひらつかにおいては、いろいろな年代、職種、様々な学校に通う人間が集まり、分け隔てなく展開する。その中では、言葉で導くのではなく、人間自体がぶつかり合い、理解するという側面を持っており、「背中を見せる」という文言の中には、言葉で語れないものを感じる、大人はきちんと振舞うなど、深みのある視点だと思い、提案する。

### ③ 11の視点「4 自分にできることを見つけていく気持ちを育てる」という視点の修正案

→ 提案しない

検討したが、大人・子どもに関係なく、参加者全員が事業の中でできることを探すという視点自体は主役である小学生のみならず、「保護者」のあり方や運営側の立ち居振舞いを考える意味でも有効であると考えたが、よい文言が見つからず、できればこういった意味を含んだ視点を追加したい。

### ④ 11の視点「6 異年齢、多世代が交流する」という視点の修正案

→ 「異年齢、多世代、多くの社会的立場を持つ人たちの交流」

(提案理由) 「交流した結果どうなったか」を考えたときに、交流する人間の立場を踏まえた意図的な絡み方によって、多くの人間が同時多発的に交流する事業は、ある程度の想定のもとで実行されることとなる。一見慎重に思われるかもしれないが、社会的立場を視点として意識することにより事業展開に深みが増すため、提案する。

### ⑤ 11の視点「7 疑似体験で終わらせない、現実の社会につなげていく」という視点の修正案

→ 11の視点「7 疑似体験で終わらせない、将来的に現実社会につなげていく」という視点

(提案理由) 現実の社会というものが何をさすのか分かりづらく、時間軸で考えた今現在の現実社会、すなわち大人の働く世界であるのか、将来子どもが大人になったときに体験する現実社会なのか不明確である。

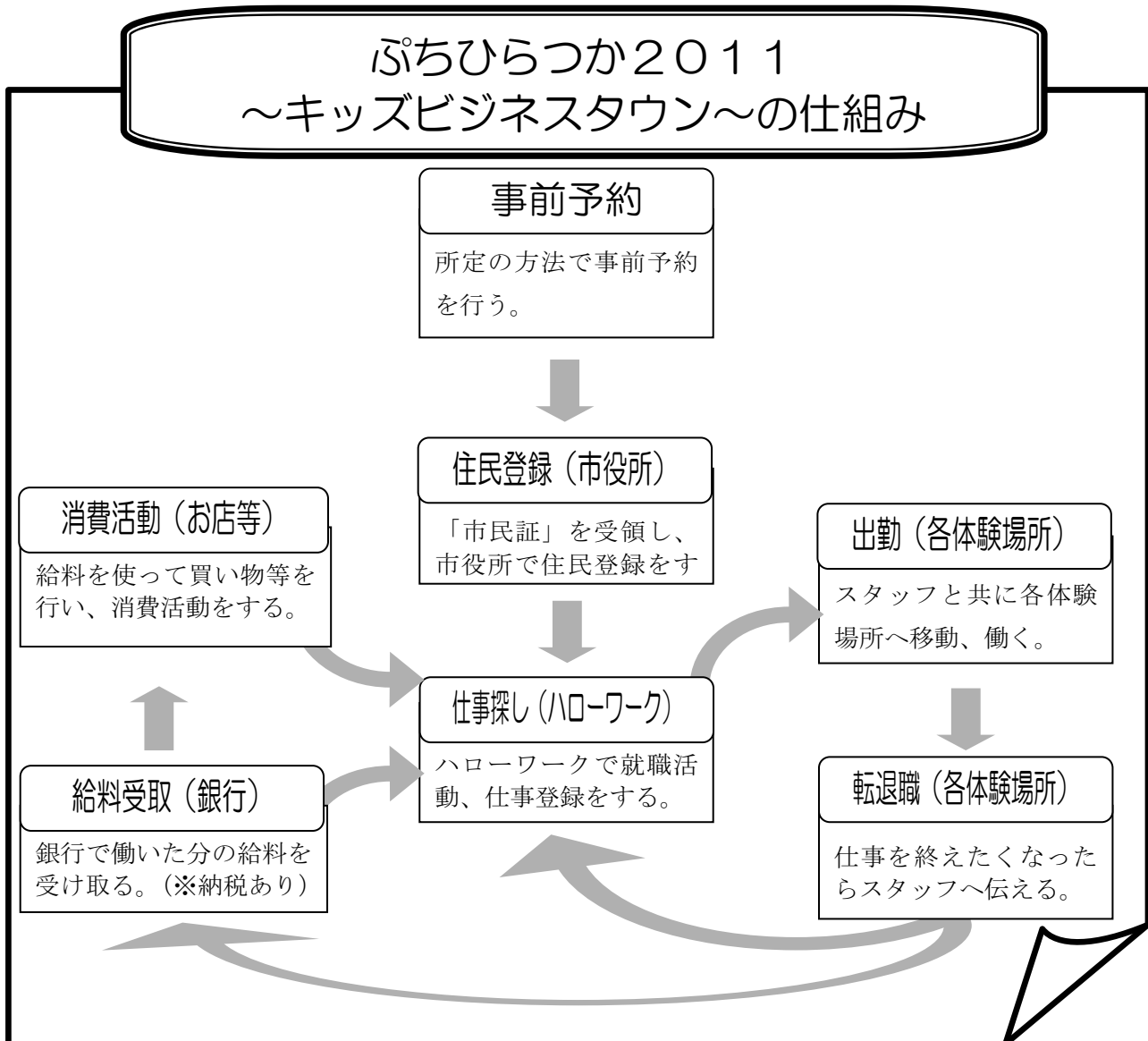
今回の修正では「将来的に」とつけることで限定的な取り扱いとなってしまうため、新たな視点の追加や、11の視点の修正等を検討する項目イに関して以下のように修正することを併せて次のように提案したい。

### ⑥ 新たな視点の追加や、11の視点の修正等を検討する項目イの修正案

→ 鍵となる場所を定めることで、地域の大人が参加でき、リアルな現実社会につなげられる展開とすること。



<参考図>



## ○ 取組経験者による 11 の視点とその具体化策の検証

～ミニヨコOB・OGによる検証（NPO法人ミニシティ・プラス）

### （1）主な業務工程

- 平成 23 年 6 月 19 日 「ミニヨコ電子本プロジェクト会議」を行い、今までの 4 年間の歴史を振り返る。
- 平成 23 年 8 月 14 日 U-19 シンポジウムを開催し、こどものまちを通した「社会参画ができるために必要なこと」について議論。
- 平成 23 年 9 月、10 月 報告書の作成

### （2）検証の手順

#### ① 活動している子どもたちからのコメント収集（6月～8月にかけて）

6月の会議で、ミニヨコの活動に継続的に参加している子どもたちや、OB、OGから今までの活動の体験談などコメントを収集。そして8月のU-19シンポジウムにて同じミニシティ活動をしている他のこどものまち継続メンバーや、OB、OGから11の視点をキーワードにコメントを収集した。

#### ② コメントの集約を踏まえた検証（9月、10月）

6月、8月と収集してきたコメントを、OB、OGとしての見解を包含させながら、ミニヨコOB、OG会にて整理・統合し、改めて11の視点に合わせ検証した。（別添リスト参照）

#### ③ 報告書のまとめ

9月、10月で検証した視点を基に文章を作成。また、新たな視点も書きすすめていく中で何度か検証を重ねた。

### （3）検証した視点及びまとめ

今回は、6月に行ったミニヨコハマシティの4年間の活動を振り返る会議、そして8月に全国各地にあるミニシティから子どもを呼びU-19シンポジウムを行った中の意見を、ミニヨコOB、OGで整理し、11の視点に当てはめていきながら検証した。

11の視点に当てはめる中で、ミニシティの場合「大人」・「異世代の人との関わり」という大きな2つテーマから出た意見が11の視点に当てはまっていくと考えた。

まず、視点「2 子どもと大人はパートナー」、視点「3 遊びを通して育む、大人が方向づけをしない」は、ミニシティにおける特徴であり、どのミニシティでも当てはまっていた。大人が見守りという立場を取っていることから、どの子どもも自分の思い通りに活動できると満足している。しかしミニシティは準備や運営などの面でも、大人のサポートなしには運営できない。意見の中には「大人はお助けマン（小学6年・女）」であるというものもあり、視点「10 子どもの気持ちを深く理解し調整できる人材が必要」であるという視点にも当てはまるのではないかと考

える。これは大人に限らず、子どもと年齢の近い大学生ボランティアや、ミニシティを中心になって進めていく高校生の存在もあると考える。子どもだけで進めていく中で、大人に頼らず失敗したが、そこで自分自身で考え、行動したこと、それが成長に繋がっていると感じている子どもが多い。その失敗から学ぶことが、視点「4 自分にできることを見つけていく気持ちを育てる」、視点「5 達成感・充実感を味わえる経験を増やす、子ども自身の潜在的能力を引き出す」ということにつながっていると考える。

またミニシティは、サポートしてくれる大人、大学生がおり、学校、年齢に関係なく友だちを作ることのできる場所となっていて、視点「6 異年齢、多世代が交流する」にも当てはまると考える。ただ友だちを作るだけではなく、一緒にミニシティづくりをしながら、教えたり教わったりしながらの中で交流が生まれると考える。このような異年齢・多世代が交流することが、視点「7 擬似体験で終わらせない、現実の社会につなげていく」にも当てはまる。仕事場に体験をさせてもらいに行き教えてもらうことは、多世代の交流にもなり、社会に繋がる経験にもなる。このような体験を通して大人が頑張っている所を見せ子どもに影響を与えられることが、視点「1 大人がまず自ら行動し、子どもを巻き込む」という視点につながるのではないかと考える。他にも、今後も他の子どもたちにこのイベントの楽しさを知ってもらいたいと考えている子どもも多いことから、視点7の現実の社会につながっていく長いイベントになると考える。またこれは、視点「8 全ての子どもに知ってもらい、参加してもらおう」にもつながる。

このように、ミニヨコは「人」をキーワードに成り立っていると思う。家族以外の人との関わりが、子どもに経験や刺激を与えるいい機会になると思う。子どもの社会性を育むためにも、地域全体で子どもを育てていく、また多世代が交流しようという意識が広まればと思う。

#### (4) 地域での取組に取り入れるための課題

ミニヨコOB、OGはミニヨコでの経験から、こういった子どもの社会性を育むためには、「大人」と「異年齢との交流」が重要になってくるのではないかと考える。

大人が子どもと活動する時に、課題として、子どもにパートナーとしてどのように接するかということがある。子どもが何かに取り組んでいるのを見るとアドバイスをしてしまいがちになるが、それを我慢し見守ること、また本当にしてはいけないことは注意するなど適切なアドバイスをすることが重要であると思う。その関わり方は、ミニヨコのような環境の中で子どもと一緒に活動をしていくことで得てもらえるのではないかと考える。また、ボランティアとして参加する大人にも十分にこのイベントの趣旨を理解してもらった上で、参加してもらおう事でスムーズになるのではないかと考える。

また異年齢との交流は、ミニヨコは19歳以下のまちなのでその中では自然と行われている。特にボランティアの大学生や中心になってミニヨコを進めていく高校生の存在は、子どもたちと年齢が近いため色々な場面で大人と子どもとの間の架け橋になっている。また大学生が見本を見せていくことで、子どもたち自身も自分の将来が描きやすくなるのではないかと考える。このように大人と子どもとの間のクッションになる存在をいれることも、子どもだけのまちであるミニヨコには欠かせないことだと思う。ミニヨコは5年続けてきたことでそのような役割を担ってくれる子がだんだんと出てきた。ただボランティアとして大学生などに頼るのではなく、長く続くイベントを続け、一緒に成長していくということも重要ではないかと考える。

11の視点「9 協力者とは、互いのメリットとなる関係になるよう工夫する」とあるが、ミニヨコではそれが課題なのではないか。もちろん大学生や地域の企業など色々な方の理解、協力を得て運営されているが、やはり大人のボランティアは少なく、準備に戸惑うことが多い。より多くの人にメリットを感じてもらい、またボランティアに来たくなるような環境をどう創るかが課題だと感じている。

#### (5) 新たに加えるべき視点

新たに加えるべき視点として、「強制的に社会参画の機会をつくること」に関係することとして、ミニヨコは来てもらって、体験してもらってこそ、良さや楽しさが分かるイベントであるため、周りの大人がキッカケづくりをするということは重要なのではないかと思う。ただしこの“強制的な参加”というのはあくまでもその場に行くということであり、これが継続的な社会参画につながるわけではない。このキッカケづくりは新たな視点「日常活動の中で、大人がさりげなく助言すること」にも当てはまると考える。

また、このような子ども中心のイベントでは子どもが必要としているとき、注意しなければいけない時などのタイミングをみて助言することが必要であると思う。子どもが周りのすすめなどのキッカケから参加し、活動を通して視点1、2、3のような経験をすることで、継続的な参画になるのではないかと考える。

#### <別添リスト>

#### ○ミニヨコ電子本プロジェクト会議におけるコメントと11の視点に関する検証

(11の視点に当てはまるコメントだけを抜粋)

おもしろかったできごと	いつのミニヨコハマで?	それってどういうとき?	どんなばめんだった?	どんなことだった?	オモシロかったこと、スゴかったこと、とくべつなところは?	あてはまる11の視点
子どもたち1人1人の成長	2011年	ミニヨコ活動中	私が忙しい時	お手伝いをしてくれる	2008年～2009年の時、中々頼れる人がいなくてたいへんだった。最近小学生たちがとても成長して、積極的に動いてくれて助かる。将来のミニヨコは大丈夫だっ!	6 異年齢、多世代が交流する 10 子どもの気持ちを深く理解し調整できる人材が必要
あんぱんまんぱんをたくさんうりました	2010年(1年前)	あんぱんまんや	はじめてのてんちょう	4さいのてんちょうたんじょう	さいねんしょうてんちょう。3にちかんずとおみせのまえでうってがんばった	4 自分にできることを見つけていく気持ちを育てる 3 遊びを通して育む、大人が方向づけをしない

おもしろかったできごと	いつのミニヨコハマで？	それってどういうとき？	どんなばめんだった？	どんなことだった？	オモシロかったこと、スゴかったこと、とくべつなところは？	あてはまる11の視点
名古屋で色んなミニヨコシティの人と一緒に泊まった事	2010年	名古屋でミニヨコシティに参加した	名古屋に行ったメンバー		他の県に住むお友だちができたこと	6 異年齢、多世代が交流する
お店やさんですてきなものがかえたこと	2010年(1年前)	うれしかったとき	かえたとき	じゆうにお金がかえたこと	ぎんこうにいったって、こ金を少しもらってから、いろいろじぶんがほしかったものとかたべたいものがかえたから、うれしかった	5 達成感・充実感を味わえる経験を増やす、子ども自身の潜在的な能力を引き出す 7 擬似体験で終わらせない、現実の社会につなげていく
パフェをつくりました。おうちでもパフェをつくれるようになりました	2010年(1年前)	パフェをついている	おきやくさんがきてるとき	お金をはらったりした	ちょっとしか(ざいりょうが)なかったのにゼリーとかパフェがつくれるなんてびっくりしました！	4 自分にできることを見つけていく気持ちを育てる
ミニイチカワで…みんなでミニイチカワを訪問してタコセン占いをした	2009年の後	みんなでミニイチカワに行った	ミニヨコでブースを出した時	タコセンのソースのしわ??でちょっとメチャクチャな占いをした	みんないなくなった時に、バイトの子が全部やってくれてた！2代目占い師	3 遊びを通して育て、大人が方向づけをしない
たこせん屋でソースで絵を描くサービスをやったら思いのほか好評だった。段々ポケモンの絵とか要求してくる絵のレベルが上がってきて苦戦してた気がする	2008年(3年前)	たこせん屋勤務中	バイトの子とソース絵を見せてる時	最初は簡単な☆とか♡とかを描いていたけど、そのうちお客さん側から絵のリクエストが入って、上手に描けると好評になったのでお客さんが増えてとても忙しかった		5 達成感・充実感を味わえる経験を増やす、子ども自身の潜在的な能力を引き出す
友だちの友だちと仲良くなった！	2008年(3年前)	ストロベリーカフェ	店長のお友だちと共同作業	気が合う人がいた！		6 異年齢、多世代が交流する

おもしろかったできごと	いつのミニヨコハマで？	それってどういうとき？	どんなばめんだった？	どんなことだった？	オモシロかったこと、スゴかったこと、とくべつなところは？	あてはまる11の視点
ソースせんべい屋がてきとううらないをしててユニーク	2008年	ミニ市川に参加	ミニ市川のミニヨコのお店で	健康、恋愛運などをまじめに占っていた		3 遊びを通して育む、大人が方向づけをしない
小さい子の対応	2008年(3年前)	保育園のあと	小さい子の親が中に入れないのでかわりに小さい子2人をつれて中で遊んだ。けれど2人とも好き勝手にあわあわ・・・		人見知りだった小さい子が最後に笑顔でバイバイしてくれたのには感動	4 自分にできることを見つけていく気持ち育てる 6 異年齢、多世代が交流する
ゴミステーションでミーオくんの着ぐるみを借りてきてとっても楽しかった	2008年(3年前)	ミニヨコ開催中	たくさんの方がいる中、大きなミーオくん登場	もともとたくさんの方がいたけど、ミーオくんのまわりに小さな子どもが集まって身動きが取れなくなった	事前に区役所に行き、着ぐるみを借りる他、分別の仕方や注意事項を教えてもらい、自分たちも勉強になった	9 協力者とは、互いのメリットとなる関係になるよう工夫する
うれしかったできごと。お店を初めて出した時、大工だった！	2008年(3年前)	2008年でミニヨコ2回目	大工の体験をさせたり、展示をした	大工が初めてお店を出せてうきうきした	お店を初めて出した時、大工をやり、イスを作りました。最終日に作品を売ってすごくもうかりました。(放送後、ほぼ完売)	5 達成感・充実感を味わえる経験を増やす、子ども自身の潜在的な能力を引き出す
朝5時位に集まって、NHKの番組にでたこと	2007年(4年前)	ミニヨコ初日		3月なのに寒い中、朝5時に集まってNHKの取材をうけたこと、みんなでテレビに出た	朝早かったのに、たくさんの方が集まったこと。初めてのミニヨコなのに、いきなりNHKにでたこと	7 擬似体験で終わらせない、現実の社会につなげていく
ネイルショップで大もうけ	2007年			ヘアとネイル	いっぱい小学生が来て、カワイくなって帰っていった	4 自分にできることをみつけていく気持ちを育てる

おもしろかったできごと	いつのミニヨコハマで?	それってどういうとき?	どんなばめんだった?	どんなことだった?	オモシロかったこと、スゴかったこと、とくべつなところは?	あてはまる11の視点
市長選	2007年(4年前)	演説		みんなの前で、自分の思いを発表!!	小2の子がしっかりしていた。選挙用紙が本物	7 擬似体験で終わらせない、現実の社会につなげていく
ゴミステーションをやるにあたって、たくさん区役所に行って、ミーオくんグッズをもらった	2007年(4年前)	ミニヨコの準備	準備	区役所に行ってゴミについて話をきいた	ミーオくんの着ぐるみが思ったより重くて大変だったけど人気だった	5 達成感・充実感を味わえる経験を増やす、子ども自身の潜在的な能力を引き出す
第一回とは思えないほど本格的でビックリした!	2007年(4年前)	第一回ミニヨコ	ミニヨコ	たくさんの方が来てびっくりした	思っていたよりたくさんの方が来てくれてみんな楽しんでいて良かった	5 達成感・充実感を味わえる経験を増やす、子ども自身の潜在的な能力を引き出す
当時中三の女の子のやりたかったカフェのサンドイッチは「なっとう」「あずき」などあってユニークだった	2007年	2007年準備中	応募シートをかくとき	15種類のめんみつなサンドイッチ計画がゼロになった	店長が「ダメ」といわれてあつという間に気分てんかんしてすぐに違うアイデアをだしてきたこと!	4 自分にできることをみつけていく気持ちを育てる

## OU-19 シンポジウムにおけるコメントと11の視点に関する検証

(11の視点に当てはまるコメントだけを抜粋)

所属のミニシティ	年齢	U-19 シンポジウム内での発言	当てはまる11の視点
仙台こどもまち	高校2年生 女子	10歳の時からずっとこの活動をしている。自分が10歳のときに楽しかったことをずっと伝えていきたい	8 全ての子どもに知ってもらい、参加してもらう
ミニいちかわ	小学5年生 男子	・大人が子どもたちを優しく見守ってくれる ・友だちとアイデアを出し合いながらまちを作れ、失敗してもそこから学べる ・自由な発想が許されて、それを実現できる	2 子どもと大人はパートナー 3 遊びを通して育む、大人が方向づけをしない 4 自分にできることを見つけていく気持ちを育てる 5 達成感・充実感を味わえる経験を増やす、子ども自身の潜在能力を引き出す

所属のミニシティ	年 齢	U-19 シンポジウム内での発言	当てはまる 11 の視点
ダガネランド	中学1年生 男子	・年齢関係なく友だちを作ることができる ・年齢を気にしないアイデア溢れるまちを作りたい	2 子どもと大人はパートナー 7 擬似体験で終わらせない、現実の社会につなげていく
ミニヨコハマシティ	小学6年生 男子	・大人口出し禁止で、子どもたちの思い通りにできる ・自分の思いを自分の言葉で伝えられるようになった	4 自分にできることを見つけていく気持ちを育てる 5 達成感・充実感を味わえる経験を増やす、子ども自身の潜在的能力を引き出す
ミニ☆大阪	高校1年生 男子	・大人が子どもたちを優しく見守ってくれる ・簡単にまちを変えることができる	2 子どもと大人はパートナー 3 遊びを通して育む、大人が方向づけをしない
とさつ子タウン	短大2年生 男子	大人が子どもたちを優しく見守ってくれる	2 子どもと大人はパートナー
イツアスモール CBT	大学2年生 女子	・学外の友だちがたくさんできた ・子ども心を分かってくれる大人がたくさんいる ・自分たちがやりたい事に何でもチャレンジできる	6 異年齢・多世代が交流する 10 子どもの気持ちを深く理解し調整できる人材が必要 3 遊びを通して育む、大人が方向づけをしない
エンジョイスマイル さがみ	中学1年生 女子、 小学6年生 女子	・自分の力で問題を解決できるようになった ・大人は子どもたちの夢を実現してくれるお助けマン ・子どものアイデアでまちをどんどん楽しく創ることができる	3 遊びを通して育む、大人が方向づけをしない 4 自分にできることを見つけていく気持ちを育てる 5 達成感・充実感を味わえる経験を増やす、子ども自身の潜在的能力を引き出す

#### <地域でのボランティア活動経験者>

所 属	年 齢	U-19 シンポジウム内での発言	当てはまる 11 の視点
戸塚でのボランティア	高校2年生 男子	引っ込み思案だったが、ボランティアを通し積極的になった	5 達成感・充実感を味わえる経験を増やす、子ども自身の潜在的能力を引き出す
つづきジュニア編集局	高校3年生 男子	子どもたちにどうやったら上手く伝えられるようになるか、気を配るようになった。	6 異年齢・多世代が交流する 10 子どもの気持ちを深く理解し調整できる人材が必要
神奈川青少年問題協議会特命子ども委員	高校2年生 女子	子どもの表情をよく観察するようになった。	10 子どもの気持ちを深く理解し調整できる人材が必要



## ○ 本協議会の審議への子どもの参画 ～特命子ども委員の活動記録と提案

平成 22・23 年期神奈川県青少年問題協議会の最終報告をまとめるための実践と検証の方法の一つとして、子どもの視点から審議に参画し、最終報告に向けた意見を提案してもらうために、中学生、高校生の特命子ども委員を任命した。

### (1) 任期

平成 23 年 7 月 1 日～平成 24 年 3 月 31 日

### (2) 役割

- ① 神奈川県青少年問題協議会の審議過程に子どもの視点から参画し、最終報告に向けた意見を提案すること
- ② 子どもを含む県民の意見を広く集めるためにフォーラムの形で実施する第 8 回企画調整部会の内容や運営方法に対して、子どもの視点からアイデアを提案し、子どもの社会参画の取組に対する好印象や、今後地域で実施される取組への参加意欲を参加者に持ってもらうこと

### (3) 設置に至る経過

平成 23 年 3 月 24 日 (木)

第 2 回神奈川県青少年問題協議会において、中間報告の実践・検証方策の一つとして、設置を決定

同年 4 月 11 日 (月)～5 月 11 日 (水) 公募

同年 5 月 12 日 (木)～31 日 (火) 選考(書類及び面接)

同年 6 月 1 日 (水) 決定、選考結果の通知

### (4) メンバー

中学生、高校生計 8 名

氏名	住所	年齢
あだち ひめみ 安達 妃美	横浜市	16
かとう わかば 加藤 わかば	厚木市	16
すが ちかこ 菅 千華子	厚木市	16
すがわら あかり 菅原 朱里	横須賀市	14
みやさか わかな 宮坂 和郁奈	川崎市	14
みやじま なつみ 宮島 菜摘	横浜市	16
やまぐち だいちろう 山口 大地郎	小田原市	14
やまだ えみこ 山田 恵美子	小田原市	16

※あいうえお順。年齢は平成 23 年 4 月 1 日時点

(5) 特命子ども委員の活動の記録

日時、会議名	議題・内容	活動内容
平成 23 年 7 月 28 日 (木) 第 3 回協議会・ 第 7 回企画調整 部会	1 第 8 回企画調整部会 (フォー ラム) について 2 県民向け事例集 (素案) につ いて ○ (報告事項) ミニヨコハマシテ ィの活動予定 ほか	・会長である知事からの任命 ・各特命子ども委員より自己紹介 ・第 7 回企画調整部会の始めに、 菅特命子ども委員がアイスブ レイキングを実施した。 ・第 8 回企画調整部会で、特命子 ども委員がやってみたいこと について発言した。
平成 23 年 8 月 3 日 (水) 第 1 回ワーキン グ会議	第 8 回企画調整部会 (フォーラ ム) について ・全体の概要やねらいを理解する ・やってみたい企画の内容につ いて、お互いの考えを聞き、特命 子ども委員として何をやるか 具体的に決定する ほか	特命子ども委員がやってみたい ことについて話し合い、企画を絞 った。
平成 23 年 8 月 30 日 (火) 第 2 回ワーキン グ会議	第 8 回企画調整部会 (フォーラ ム) について ・子ども委員としての企画等を決 定し、具体的な役割分担や、当 日までの準備の進め方を決める ・このフォーラムが、参加してく れた子どもたちにとって良いも のになるようにするためにはど うしたらよいか、運営の方法な どを考える ほか	特命子ども委員がやってみたい 企画について、役割分担を決め、 詳細を詰めた。
平成 23 年 9 月 19 日 (月) 第 3 回ワーキン グ会議	第 8 回企画調整部会 (フォーラ ム) について ・オープニングセレモニーや全体 会などの進行や分担について考 える ・特命子ども委員企画に必要なも のや準備のスケジュールにつ いて考える ほか	特命子ども委員が担当するオー プニングセレモニー等について、 実際の進行や役割分担を考えた。 また、特命子ども委員企画に必要 なものや準備のスケジュールを 考え、実際の準備作業を行った。
平成 23 年 10 月 15 日 (土) 第 8 回企画調整 部会 (フォーラ ム)	内容については、本章 4 「子ども を含む県民との意見交換～かな がわ 子どもの社会参画をすす めるフォーラムの開催」のとおり ム)	オープニングセレモニーや、全体 会の進行を行った。また、特命子 ども委員が企画した各ブースや 分科会を通じて、子どもの社会性 を育むことや子どもの社会参画 について、主に子どもの参加者に 理解してもらい、意見をもらっ た。
平成 23 年 11 月 13 日 (日) 第 9 回企画調整 部会	○<報告事項>第 8 回企画調整 部会 (フォーラム) について 1 最終報告 (素案) について 2 県民向け事例集 (案) につ いて ほか	第 8 回企画調整部会において、特 命子ども委員が企画・実施したプ ログラム等について、報告を行っ た。また、最終報告 (素案)、県 民向け事例集 (案) について発言 した。

日時、会議名	議題・内容	活動内容
平成 23 年 12 月 26 日 (月) 第 4 回ワーキング会議	1 最終報告に向けた提案の取りまとめ 2 かながわ 子どもの社会参画をすすめるキャラクター募集 応募作品の選考	最終報告に向けた特命子ども委員としての提案の内容について話し合った。また、かながわ 子どもの社会参画を進めるキャラクター募集への応募作品の中から、優秀作品 5 点を選考した。
平成 24 年 3 月 27 日 (火) 知事報告	知事へ最終報告を行った。	

### <ワーキング会議の様子>



### (6) 最終報告に向けた特命子ども委員からの提案

#### ① 子どもの社会参画とはどういうものか。どう説明すれば、子どもに伝わりやすいか。

- 自らの体験を踏まえて考える子どもの社会参画とは
  - ・ 地域の人を元気にすることや笑顔にすること
  - ・ 地域の人とコミュニケーションをとること
  - ・ 地域には、友だちや学校の先生を含め、色々な人がいるが、障害をもった人にも同じように接するなどして、皆が皆を理解し合おうとすること
  - ・ 皆で理解し合い、協力し合って、地域をつくり上げること
  - ・ 子どもが積極的に社会に参加する一つのきっかけ であると考えている。
- 子ども会やジュニアリーダーなどの活動も、子どもの社会参画の一つである。そのような活動の中で、子ども自身が企画するという経験ができ、小学生であっても自分の意見をしっかり伝えることができるようになり、活動を通じて地域のことを知り、子どもがより積極的になることができる。
- 子どもの社会参画を説明するには、相手がこれまで体験したことに絡めて、又は実際に取組を体験してもらってから、こういうことが子どもの社会参画だよと教える方がわかりやすい。

② 子どもの社会参画の取組から、どのようなものを得ることができたか。また、自分にどのような変化があったか。

- 人から何か教わる立場から、自分が教える立場になるなど、役割を交代することにより、自分を客観的に見ることができるようになる。また、自分の頭で改善点などを考えて、人にどう伝えていけばよいかを考えるようになる。そのほか、人前で話す機会をたくさん持つことにより、そのような場面でも緊張することがなくなったり、様々な人とコミュニケーションをする中で、自分の将来につながる情報を得ることができる。

③ 子どもの社会参画の輪を広げていくには、どうすればよいか。

- 自分で積極的に始めることは難しいが、機会があればやって見たいという気持ちは、多くの人が案外持っているのではないかと。友だちや知り合いなど、自分の身近な人、信頼している人が声をかけたり、勧めてくれる、また、自分が活動への参加を迷っている時に、親や先生が後押ししてくれると、やってみようかなという気になる。自分が体験し、感じたものを伝えつつ、友だちなどを誘うという形がベストである。
- ボランティア活動などは、入試の時の得点となったり、学校の単位になったりすることもある。最初のきっかけや目的がそういう形でも、実際に取り組んでみると、活動の内容や、人との触れ合いを楽しむことができたということもある。参加すると何かもらえる、自分の得になるなど、メリットとなるきっかけづくりは大事であり、活動していく中で、物や得点よりも、もっと大事なものが見つかるはずである。
- 子どもの生活の大きな部分を占める学校が、社会参画のきっかけを作るという形もあり得る。例えば、学校の委員会活動の場を地域にも広げていく、また、そのような活動を近くの学校と共同企画するなど、学内という範囲に縛られることなく取組を進めていくことができる。

また、子どもの社会参画を進める上で、家庭が子どもの社会参画に積極的か、という要素は重要であるが、学校で社会参画に取り組んだ子どもが、家で、今日こんなことをしたと親に話せば、親にも、子どもの社会参画とはどういうものか、またその重要性が伝わると考える。

④ 特命子ども委員の目から見た、10の視点について

- 視点「1 大人がまず自ら行動し、子どもを巻き込む」は、子どもにとって大切な視点である。大人が、社会に参画することは楽しいということを、子どもに見せてほしい。活動の大切さを伝えたいならば、大人がまず行動してもらいたいと考える。  
また、小さな子どもだけでは活動はできない。親や学校の先生を含め、大人がアクションを起こし、子どもが安心して活動できるような環境を整え、子どもの活動の土台づくりをしてもらいたい。
- 視点「3 自分にできることを見つけたり、作り出していく気持ちを育てる」も大切であり、そのためには、まず大人が行動するということにつながる。
- 子どもには、今しかできないことを経験するということが一番大事と思われる。視点「4 達成感・充実感を味わえる経験を増やし、子ども自身の潜在的な能力を引き出す」を重視し、子どもに自信を持たせることが大切である。

○ 視点「9 子どもの気持ちを深く理解した上で、関係者を調整し提案できる人を取組に加える」について、自分たち中学生・高校生が、大人と子どもの中間的な存在として橋渡し役となるということは、ジュニアリーダーになると一番初めに教えられる言葉である。

子どもの中には、大人には言えないことも、中学生・高校生のジュニアリーダーには話してくれるという子がいるが、それを上手く大人に伝えることで、意志疎通の手伝いをすることができる。中学生・高校生の自分たちは、この年代でしかできないことを広めていくことができればと考える。

#### (7) かながわ 子どもの社会参画をすすめるキャラクターの募集について

県内において、子どもの社会性を育む取組や、子どもの社会参画を広くすすめる上で、シンボルとなるキャラクターがあるとよいという特命子ども委員の発案により、キャラクターの募集を次のとおり行い、155点の応募作品の中から、最優秀作品として「神奈川ラン（ランちゃん）」を決定した。



【名前】神奈川ラン（ランちゃん）

【プロフィール】

<身長>150cm

<体重>ひみつ♥

<誕生日>6月2日（開港記念日）

- ・神奈川県で生まれた元気な女の子
- ・とくに横浜が好きで中華街によく行く

（横浜市南区 福原奈々子さん（中学2年生）の作品）

※ 県内の市町村や団体が行う子どもの社会参画の取組（イベントなど）に関する広報やPRに、県青少年課へ事前に申し込みを行った上で、無料で活用できる。（ただし、最優秀作品を印刷した商品の販売など、商用目的での利用は不可）

## <募集の概要>

### ① 募集期間

平成 23 年 10 月 15 日（土）から 12 月 16 日（金）まで

### ② 応募資格

神奈川県在住の方（年齢不問）

### ③ 応募方法

応募用紙に、キャラクター（カラー）のイラスト、キャラクターの名前やプロフィール、応募者の名前などの必要事項を記入し、以下のいずれかの方法で応募してもらう。

- 第 8 回企画調整部会として開催した、かながわ 子どもの社会参画をすすめるフォーラムの会場のキャラクター募集ブースで、直接応募する。
- 募集期間内に、県青少年課宛てに、郵便等又はメールで送付する。

### ④ 応募条件

一人につき 2 作品まで応募できるものとする。

### ⑤ 最優秀作品の決定及び賞状等の授与について

応募作品の中から、特命子ども委員が、下記の審査のポイントを踏まえて、優秀と思われる作品 5 点を順位をつけて選ぶ。その後、神奈川県青少年問題協議会の委員が、優秀作品 5 点の中から、特命子ども委員がつけた順位を参考に、最優秀作品 1 点を決定する。

最優秀作品の応募者本人には、文書で通知すると共に、県のホームページで最優秀作品を発表する。

最優秀作品の応募者には、青少年部長より、特命子ども委員が作成する賞状とキャラクターが入った缶バッジ及び図書券（1,000 円相当）を贈る。

### ⑥ 審査のポイント

- ・ 神奈川県をイメージさせるキャラクターであるか
- ・ 親しみやすいキャラクターであるか
- ・ 子どもの社会参画をすすめるという意図が伝わりやすく、子どもたちが社会参画に興味を持てるキャラクターであるか

### ⑦ 最優秀作品の活用について

最優秀作品の著作権に関するすべての権利（著作権法第 27 条及び第 28 条に定める権利を含む。）は神奈川県に帰属するものとする。

最優秀作品は、神奈川県青少年問題協議会の最終報告書や事例集に掲載するほか、県内の市町村や団体が行う子どもの社会参画の取組（イベントなど）に関する広報や PR に、県へ事前に申し込みを行った上で、無料で活用できるものとする。ただし、最優秀作品を印刷した商品の販売など、商用目的での利用は不可とする。

## ○ 子どもを含む県民との意見交換

### ～かながわ 子どもの社会参画をすすめるフォーラムの開催

本協議会では、審議テーマについて子どもを含む県民の意見を広く集めるために、以下の三点をねらいとして、第8回企画調整部会をフォーラムの形で実施した。

- ① 本協議会が出した11の視点への意見（追加・修正を含む）を県民から聞く。
- ② 低年齢期の子どもの社会性や社会参画の芽を育む取組のアイデアを持ち帰ってもらい、取組の広がりにつなげる。
- ③ 様々な立場や年齢の人々が子どもの社会参画について考える機会を提供する。

### （1）開催概要及び実施結果

<日時> 平成23年10月15日（土曜日） 9:50～15:30（9:30 受付開始）

<会場> 県立青少年センター（横浜市西区紅葉ヶ丘9-1）

<来場者数> 226人（大人92名、高校生以下の子ども134名）

#### <主なプログラムの内容と実施結果>

プログラム名	プログラムの内容	実施結果
9:50～10:10 アイスブレイキング、オープニングセレモニー 〔1F ホワイエ〕	・特命子ども委員によるアイスブレイキング ・特命子ども委員が運営するオープニングセレモニーを実施し、当日のスケジュールや注意事項のお知らせ、開会宣言などを行った。	（参加者数集計せず）
10:10～15:00 「子どもがつくる子どものまち」ミニ体験 〔1F ホワイエ〕	NPO法人ミニシティ・プラスが実施する「子どもがつくる子どものまち <sup>*7</sup> 」を展開し、来場者に体験してもらう。	18ブースが出店。
10:10～14:45 子どもバザー 〔本館周辺及び1F ホワイエ〕	子どもが出品する物を家から持ってきて、自分で値つけ（上限500円まで）・販売する。今回は、ブースで発生する売上の半分を、東日本大震災復興支援のために寄付した。	12組が出店。 売上総額 11,830円 寄付総額 12,355円 （寄付総額には、寄付があった物品の売上を含む）
13:00～13:45 みんなで集まろう！全体会 〔1F ホール〕	・フォーラムの趣旨説明 ・特命子ども委員の紹介 ・劇団プレイバックーズが、「子どもが社会をつくるってどういうこと？」をテーマに、来場者の発言を基に即興劇を演じる。	（参加者数集計せず）

\*7 子どもがつくる子どものまち（p.84）

ドイツの「ミニミュンヘン」を発祥とした取組で、遊びの中から生まれる発想から、子どもたち自身が、社会について、まちについて自由に考えながら、小さな子どものまちを創る。NPO法人ミニシティ・プラスが取り組む「ミニヨコハマシティ」では、以下のルールで、子どもが自分たちのまちを創る。

- ・ 一人で遊ぶことのできる19歳以下の子どもが参加できる。大人は口出し禁止。
- ・ 市役所で市民登録を行い、ミニヨコ学校で基本ルールの説明を受けた後に、ミニヨコハマシティの中だけで流通する通貨をもらい、仕事をしたり、遊ぶことができる。
- ・ 働きたい子どもはJOBセンターへ行って仕事をもらう。働いた後は、子ども銀行でお給料をもらえる。
- ・ 各ブースの出店者は、売上の30%を税金として納める。

プログラム名	プログラムの内容	実施結果
11:00～12:10 13:50～15:00 分科会1 「チェンジ☆THE☆ かながわ！！」 〔3F 研修室2〕	小・中学生だけが参加できる子ども向け分科会(大人は立入禁止)。童話を元にした創作ストーリーを紙芝居の形で見せ、クイズや質問を織り交ぜながら、子どもに社会参画とはどういうものかを理解してもらい、意見を引き出す。	約 10 名が参加 (午前中の回は参加者がいなかったため、午後の回のみ実施)
13:50～15:00 分科会2 「子どもがつくる子どものまち、どうやったらできるの？」 〔3F 研修室1〕	ミニヨコ、ぶちひらつかなど、実際に行われている子どものまちの取組を簡単に紹介し、11の視点へのアプローチの可能性などについて話し合う。	約 15 名が参加
13:50～15:00 分科会3 「子どもの社会参画の可能性を考えよう」 〔1F ホール〕	埼玉県立新座高校金子教諭(学びの共同体の実践)、劇団ひこばえの村上氏と劇団の子どもたち(区民ミュージカルを実施)、ボーイスカウト指導者の根岸氏をパネリストとして、各自の取組を紹介しつつ、学校や放課後の時間の中に、子どもの社会参画の機会を取り入れていくことができないか考える。	約 20 名が参加
15:10～15:30 最後に集まろう！ まとめの全体会 〔1F ホール〕	分科会のまとめや、特命子ども委員企画等の報告を行う。	(参加者数集計せず)

※ その他、子どもの社会参画の取組を紹介するパネル展示等を実施。

「みんなで集まろう！全体会」の時間帯は、「子どもがつくる子どものまち」ミニ体験及び子どもバザーは休み。

### <各分科会の概要及び参加者からの意見>

#### ○分科会1「チェンジ☆THE☆かながわ！！」

童話を元にした創作ストーリーを紙芝居の形で見せながら、実際の社会で起こるようなことを考えてもらう質問を織り交ぜた。

「さて、就職をすることになりました。

あなたは…

お金が沢山もらえるA社、

担当さんがよかったB社、

有名なC社、どれを選びますか？」など。

(この質問で一番手が挙げたのはA社)

分科会終了後、「楽しかった」という意見が最も多かった。

参加した子どもたちも、台詞を言う形で紙芝居に加わってもらったため「紙芝居で自分も台詞を言いたかった」「私も、特命子ども委員のように紙芝居をやりたい」などの意見があり、子どもたちに楽しみながら社会参画について考えてもらうことができた。





## ○分科会2「子どもがつくる子どものまち、どうやったらできるの？」

「ミニヨコハマシティ」の取組を行っているNPO法人ミニシティ・プラスと、「ぷちひらつか」の取組を行っている平塚青年会議所・平塚商業高等学校から、以下のとおり各自の活動内容の紹介があった。



### \* NPO法人ミニシティ・プラス

- ・ 横浜市都筑区の住宅展示場で、5年前から年1回「ミニヨコハマシティ」を開催しており、毎回1,000人くらいの子どもの参加している。
- ・ 19才以下の子どもが市民として関わることができ、運営の主体は小学校高学年から高校生。OBやOGがサポートするが、運営の仕方や町の仕組みを自分で考えなくてはならず、子ども同士での話し合いの仕方が身につく。
- ・ 大人は、子どもがやりたいことを引き出す役目を果たしており、11の視点のうち「2子どもと大人はパートナー」に当てはまっている。子どもがやりたいことがある場合、例えば「法律で禁止されているからできない」と、単にできないことを教えるのではなく、子どもがその中で本当にやりたいポイントを引き出してあげて、「〇〇は法律で禁止されているけれど、こういうやり方なら△△はできるよ」と導いてあげる。
- ・ 子どもがやりたいことについては、できるだけ本物を経験するようにしている。例えば「子ども放送局」の企画については、実際の放送局をヒアリングし、体験した。
- ・ 東日本大震災を経て、町の中で「生きていく」こと自体を子どもたちが考えるようになり、畑で野菜をつくり、それを使って料理し、食べるという取組が始まった。

### \* 平塚青年会議所・平塚商業高等学校

- ・ 「ぷちひらつか」は、決まった場所では開催しておらず、毎年担当者も違う。小学生を対象としており、高校生が小学生に指導し、大人は見守る立場である。
- ・ 疑似体験に留まらず、青年会議所と一緒にあって、商店街の本当の店（リアル店舗）で働く機会を作り出している。
- ・ 大人は上、子どもは下ではなく、大人の位置を、子どもと同じ目線で考えられるまでに下げるのに苦労している。
- ・ 平塚商業高校の学生さんが取組に加わってくれ、大人と子どもの間のクッションの役割を果たしてくれている。

### \* 参加者からの意見は特になし。

### ○分科会3「子どもの社会参画の可能性を考えよう」

各パネリストから、以下のとおり各自の活動内容の紹介があった。

\* 埼玉県立新座高校金子教諭（学びの共同体の実践）

- ・ 授業という小さな社会をまず何とかしないと、子どもたちは大きな社会でやっていくことができない。そこで、教師が一方的に教えるのではなく、机をコの字型に配置し、生徒に自分の言葉で話をさせる「伝達から対話へ」という新しい形の授業を作り出そうとしている。
- ・ 先生は教える者ではなく、仲立ちする者として教室にいる。
- ・ 21世紀のリテラシーとして、「読み・書き・そろばん」ではなく「3C（concern＝関心を寄せる、commitment＝互いに関わる、care＝心を砕いていく）」を身につけてもらいたい。この社会に住んでいていいんだという感覚を養っていきたいと考えている。



\* 劇団ひこばえの村上氏と劇団の子どもたち（区民ミュージカルを実施）

- ・ 2001年に青葉区で小・中・高校生のミュージカルが行われ、その出演者により劇団ひこばえの前身が結成された。今では横浜市内の13の区で、区民ミュージカルが作られている。
- ・ 劇団ひこばえでは、脚本を読んだ子どもが公演のテーマを理解し、自分で役を作ってくるようにしている。大人の評価を基に、また自分で役を作り直すということを繰り返し、子どもが自分で演劇を作ろうとする力を育てている。
- ・ 私たちは、俳優やタレントの養成を目的としているのではなく、子どもが地域で劇を作り、それが地域づくりにもつながっていく、ということを考えている。

\* ボーイスカウト指導者の根岸氏

- ・ 「野外で体験をしながら学ぶ」というボーイスカウトの活動の概要や組織について説明。日本では、13万人の青少年がボーイスカウトで活動している。
- ・ 地域の美化などの身近な地域活動や、子どもの仲間を増やす活動により、仲間意識を育て、世界の一員という考え方が身についていく。

\* 参加者からの意見

- ・ テーマを深く理解するために、脚本で舞台となっている地域のフィールドワークを行い、地名の由来などを理解した。（劇団ひこばえに参加している子どもより）
- ・ 少子高齢化を考えるという観点から、このフォーラムに参加した。今の日本では、急速に高齢化が進んでいる。今後どのような社会になっていくのか、専門家でも想定できていない。本日は子どもが社会で元気に活動することをテーマとしているが、子どもと高齢の人が、お互いに刺激を与え合いながら、一緒にいる場面をもっと作っていききたい。

## (2) アンケート集計結果

フォーラム当日に、大人・子ども別にアンケートを実施し、プログラムや11の視点などについて参加者から意見をもらった。

### <子ども向けアンケート>

○回答数 19 (子どもの来場者 (134名) のうちの14%)

○回答者の属性等 ( ) 内は、各項目の全回答数に対する割合

#### ① 学年

保育園児・幼稚園児 4 (21%) 小学校1～2年生 2 (11%) 小学校3～4年生 10 (53%)  
小学校5～6年生 2 (11%) 無回答 1 (5%)

#### ② 誰と一緒にフォーラムに来たか (複数回答有)

お父さんやお母さんなどの家族 17 友だち 2 無回答 1

### ○質問に対する回答内容

1 今日のプログラムの中で、「よりよい社会づくりのために、子どもがアイデアをだし、大人といっしょに活動する」ということについて、よくわかったのはどれですか? (複数回答可)

( ) 内は回答数

- ・ 「子どもがつくる子どものまち」ミニ体験 (10)
- ・ 子どもバザー (6)
- ・ みんなで集まろう! 全体会 (6)
- ・ 分科会3「子どもの社会参画の可能性を考えよう」(6)
- ・ 分科会1「チェンジ☆THE☆かながわ!!」(2)
- ・ さいごに集まろう! まとめの全体会 (1)

※ 「オープニングセレモニー」「分科会2『子どもがつくる子どものまち、どうやったらできるの?』」「子どもの活動展示パネル」は回答0

2 「よりよい社会づくりのために、子どもがアイデアをだし、大人といっしょに活動する」ために大切と思うことに、○をつけてください (複数回答可)

11の視点	回答数	回答数による順位
1 まず、大人が助けあいながら生活する	9	2位
2 子どもも大人も、いっしょに社会をつくっていくということを意識する	8	4位
3 子どもが、楽しみながら、あそびながらとりくめるようにする	10	1位
4 自分にできることを自分で見つけていく	6	9位
5 「こんなことができた!」「自分が役に立った!」という気持ちになるようなきかいをふやす	7	6位
6 いろいろな年の子どもや大人と、いっしょにとりくむ	7	6位
7 「子どもがつくる子どものまち」などのたいけんを、本当の社会にもいかしていく	6	9位
8 だれでも参加できるような工夫をする	8	4位

11の視点	回答数	回答数による順位
9 みんなが「よかった」と思えるような工夫をして、きょうりよくしてくれる人がふえていくようにする	9	2位
10 子どもの気持ちをよくわかってくれる大人に、きょうりよくしてもらおう	7	6位
11 今やっているとりくみに、上にかかれた1～10のポイントをいかす	6	9位

### 3 自由意見 ( )内は回答数

- ・ とても楽しかった。今日は少ししか遊べなかったので、3月にまた来たい。(3)
- ・ 楽しかった。(3)
- ・ また来たい。(2)
- ・ たくさんおもちゃが売れて、うれしかった。(2)
- ・ たくさんミニロが集められて楽しかった。(1)
- ・ これから受付とかをやろうと思う。(1)
- ・ フォーラムの構成を考えた方がよいと思う。分科会も盛り上がっていない。みんなの協力があってできていることを理解した方がよい。(1)

#### <大人向けアンケート>

○回答数 28 (大人の来場者 (92名) の30%)

○回答者の属性等 ( )内は、各項目の全回答数に対する割合

##### ① 性別

男性 10 (36%)      女性 18 (64%)

##### ② 年齢

20～30代 9 (32%)      40～50代 18 (64%)      60～70代 1 (4%)

##### ③ 属性

保護者 21 (75%)      保育・教育関係 3 (11%)      NPO・青少年関係団体 3 (11%)  
行政関係者 1 (4%)

##### ④ 住んでいる地域

横浜市内 17 (61%)

横浜市外 11 (39%)

…県内 (川崎市、藤沢市、厚木市、綾瀬市) 6、東京都 2、県外 (静岡県) 2、不明 1

##### ⑤ 誰と参加したか

子どもと一緒に参加した 19 (68%    子どもの年齢は2歳～16歳まで)

知人や友人と一緒に参加した 7 (25%)      一人で参加した 2 (7%)

##### ⑥ フォーラムを何で知ったか (複数回答可)

チラシ 10      県のHP 5      県のたより 1      関係団体からの情報提供 4

その他 8 (知人からの誘い、子ども会の回覧板、学校からのお知らせ、NPO団体のフェイスブック)

○質問に対する回答内容

1 本日のフォーラムに参加して、子どもの社会参画について、これから自分でも参加したり、取り組んでみたいと思われましたか？

積極的に参加・取り組んでみたい 8 (29%)      参加・取り組んでみたい 16 (57%)

既に取り組んでいる 2 (7%)      無回答 2 (7%)

※「参加・取り組んでみたいとは思わない」は0

2 本日のプログラムで、また参加したいもの、自分でも取り組んでみたいものを教えてください。(複数回答可) ( )内は回答数

- ・ オープニングセレモニー (1)
- ・ 「子どもがつくる子どものまち」ミニ体験 (23)
- ・ 子どもバザー (10)
- ・ 13時からの全体会(劇あり) (7)
- ・ 15時10分からのまとめの全体会 (2)
- ・ 分科会2「子どもがつくる子どものまち、どうやったらできるの？」(1)
- ・ 分科会3「子どもの社会参画の可能性を考えよう」(3)
- ・ 分科会(テーマ不明) (2)

※ 「分科会1」「展示パネル」「その他」は0

3 青少年問題について有識者等が話し合う神奈川県青少年問題協議会では、子どもの社会参画を進める取組を行う上で、以下の11の視点が大切と考えています。

次の各項目(視点)について、あなたのお考えは1~4のうちどれが一番近いですか？

(とても大切(4点)、まあまあ大切(3点)、あまり大切ではない(2点)、大切ではない(1点)のどれかを選んでもらう)

11の視点	総得点 (総得点 による順 位)	各項目に対する回答数			
		とても大切 (4点)	まあまあ大切 (3点)	あまり大切で はない(2点)	大切では ない(1点)
1 大人がまず自ら行動し、子どもを巻き込む	101点 (7位)	20	7	0	0
2 子どもと大人はパートナー	106点 (4位)	22	6	0	0
3 遊びを通して育む、大人が方向づけをしない	98点 (8位)	15	12	1	0
4 自分にできることを見つけていく気持ちを育てる	107点 (2位)	23	5	0	0
5 達成感・充実感を味わえる経験を増やす、子ども自身の潜在的能力を引き出す	112点 (1位)	28	0	0	0
6 異年齢、多世代が交流する	107点 (2位)	23	5	0	0
7 疑似体験で終わらせない、現実の社会につなげていく	103点 (5位)	19	9	0	0

11の視点	総得点 (総得点 による順 位)	各項目に対する回答数			
		とても大切 (4点)	まあまあ大切 (3点)	あまり大切で はない(2点)	大切では ない(1点)
8 全ての子どもに知ってもらい、参加してもらおう	98点 (8位)	15	12	1	0
9 協力者とは、互いのメリットとなる関係になるよう工夫する	92点 (11位)	12	14	0	0
10 子どもの気持ちを深く理解し調整できる人材が必要	102点 (6位)	21	6	0	0
11 今ある資源に、新しい視点で光をあてる	96点 (10位)	15	12	0	0

**4 11の視点以外に、子どもの社会参画を進める取組を行う上で大切と思われるポイントがあればご記入ください。**

- ・ 5、10の視点について、大人側から褒めることが大切。
- ・ 大人と子どもの中に位置する高校生、大学生をどう巻き込んでいくかを考えることが必要。
- ・ 子どもを子ども扱いしないこと。お客様にしないで、一緒につくっていくこと。
- ・ 大人も関わりを持ちたいので、子どもに大人の意見を言うことも大切と思う。
- ・ 1つや2つで終わらず、継続することが大切と思う。
- ・ 子ども同士が強くながり合う。そうなれる機会をつくれるよう大人がサポートする。お互いが仲間だと思合えるからこそ頑張れるし、楽しいし、参画できるんだ。分科会3での3人のお話を聞いてそう感じました。
- ・ 大人の共通認識、大人のエゴを通さない我慢
- ・ 社会に参画する必要性や自立させていく意識を育てていく大人の投げかけや大人の導きは必要。やる気のある子より、ない子をどうそのように向けていくかを見つけ出していくか、も注目してほしい。ひきこもり、不登校などの子たちも含めての何かアクションがほしい。
- ・ 子どもが気軽に参加できる社会参画の拠点を増やす。(各市町村に1つ以上はほしい)
- ・ 社会の仕組みをもっと具体的かつリアルに子どもたちに伝えていく。
- ・ 誰でも参加できるという意識を持つ。
- ・ 子どもも一人の人格であると認めること、意識すること。
- ・ 社会に関心を持つ。たくさんの人々のおかげで自分が生活できているということを知るの大切だと思う。
- ・ 子どもにとって信頼できる社会づくりができるよう、大人との関わりにおいて自立・信頼性を育てる工夫が必要。

**5 その他、フォーラムや11の視点に関するご意見、又はこれから取り組んでみたいことなどがありましたら、ご記入ください。**

- ・ 大人が自ら行動することができない時代になっていると思う。子どもの社会参画に大人も参画することで、自分の行動を振り返る機会になると思う。
- ・ 初めて参加した。お祭りや文化祭のような切り口から、社会の一人だという気持ちが育っていくような活動ができたらいいと思う。
- ・ 西区、中区の子どもが参加しやすいため、都筑区だけでなく青少年センターでも再度開催し

てほしい。子どもたちの目が輝いていた。よい体験をありがとうございました。

- ・ (子どもに) 口出しせずに放置していたら、最初のJOBセンターでは「？」という感じだったが、後は自分でスイスイやっていた。側に寄ったら追い払われた。親から離れること自体を楽しんでいるようだった。
- ・ 子どもたちが自主的に取り組んでいる姿には驚かされた。また、今回のために月に一度会議等もされているとのこと、今後も継続し広まっていくことを願っている。社会の中に色々な仕事があることを子どもが体験するとてもいい機会である。
- ・ 分科会3のパネリストの選定に、もう少し違う方向があるのではないか。伝えたいものが少しわかりづらかった。(まとまりがない、方向性が見えない)
- ・ 分科会3に参加したが、事例発表のみのパネラーの意見であり、会場とのやり取りがなかった。私たちも、会場にいて参加しただけで、参画しなかった。(パネラーと意見のやり取りをするなど)
- ・ 分科会の下打合せはもっとしていただいた方が、大人にとっては有意義になると思う。(どの分科会への要望なのか不明)
- ・ もう一度、子どもの社会参画について考えるフォーラムを企画してもらいたい。
- ・ もっと宣伝してほしい。人数が少なくてもったいない感じがした。
- ・ 行政が関わって、このようなことができると思い思った。
- ・ 情報をもらいながら少しずつお手伝いしていくつもりである。

### (3) 出口インタビュー集計結果

フォーラム当日に、会場の出口で、退場しようとする人にフォーラムの感想を聞いたところ、次のとおりだった。

**<質問>本日のフォーラムは楽しかったですか？感想を教えてください！**

とても楽しかった 35人 (大人13人、子ども22人)

まあまあ楽しかった 9人 (大人2人、子ども7人)

あまり楽しくなかった 2人 (大人・子ども1人ずつ)

楽しくなかった 0人

(4) フォーラムの様子





#### 4 取組事例と実践のヒント

ここでは、10の視点を実際の取組に生かしている15の事例を紹介する。

取組事例名	実際の取組の中に生かされている10の視点									
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
	大人がまず自ら行動し、子どもを巻き込む	子どもと大人とが、互いによりパートナーとなって一緒に取り組む	自分に行うことができることを見つけたり、つくり出していき気持ちを育てる	達成感・充実感を味わえる経験を増やし、子ども自身の潜在的な能力を引き出す	異なる年齢世代・立場の人が交流する	実際の社会に関わりながら、社会への関心や具体的な行動につなげていく	全ての子どもに知り、参加してもらい、参加してもらう	協力者とは、互いのメリットとなる関係になるよう工夫する	子どもの気持ちを深く理解した上で、関係者を調整し提案できる人を取組に加える	大人や子どもが継続して参加できるように、活動の核となる場所を定める
防災訓練を兼ねた一泊キャンプ	○				○	○	○	○	○	○
きつずキャプテン	○	○	○	○	○		○		○	○
茅野市こども会議		○							○	○
児童青少年センター(ゆう杉並)		○	○	○			○	○	○	○
6年生を主体とした子ども会行事の企画・運営		○	○		○		○	○	○	○
子どもたちがまちを創る	○	○	○	○	○	○		○	○	○
ぶちひらつか			○		○	○				○
一日冒険遊び場	○		○	○	○		○		○	○
くだかけバザー		○	○	○	○					○
こどもキャンプ			○	○	○				○	○
川崎市子ども会議						○				○
こどもまち探検ワークショップ	○				○	○		○		○
すべての子どもが豊かに遊べる東京を	○	○	○	○		○		○	○	
秋津っ子バザー	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

<海外における先進的な取組事例>

○ヒア・バイ・ライト

※取組にどの視点を生かしているかは、取組団体又は文責者が判断しています。

「1 大人がまず自ら行動し、子どもを巻き込む」

「8 協力者とは、互いのメリットとなる関係になるよう工夫する」ほか実践例

## 防災訓練を兼ねた一泊キャンプ

～災害時の避難所生活の疑似体験とお楽しみキャンプの合体版～

(秋津コミュニティ)

<文責：岸裕司委員>

### 1 取組の概要

学校が災害時の校区住民の避難所であることの共通認識や住民同士の融和を図ることを目的に、防災被災訓練と父子を主体にした※お楽しみ一泊キャンプを、夏休みに、子どもの身近な秋津小学校の校庭で開催。

特に若い父親へはテント張りから夕食の準備、キャンプファイヤー、添い寝などの体験を協働することで参画意欲をうながし、父子や他の家族との近隣共助の絆を深めることに役立っている。

1995年の阪神淡路大震災の教訓から学び、翌年から毎年開催。年々参画者が増え校区の自主防災と防犯意識の向上、大人は「どの子どもみんな地域の宝」意識の醸成にも寄与している。



※ 保護者とその子どもを対象としたキャンプであるが、主に父親に参加してもらうことをねらいとしている。

### 2 事例の優れた点、子どもに与える好影響、他の活動に参考になる点

- ・ 防災訓練は町会が実施していたが、緊急時に活躍する若者男性の参加が少ないことから町会と融合し、お楽しみ一泊キャンプと合体させたことで若者家族の参画を増やしつつ、参画者の保険代を町会負担にし、参画者の自己負担を軽減した点。
- ・ 小学校での実施により低学年からテントに泊まる野外体験が気軽にでき、何かがあってもすぐに帰宅したり、校医との連携により安全確保も容易である点。
- ・ 新人父親の参加をうながし、普段触れ合う時間の少ない家族の協働を図る点。

- ・ 防災訓練は学校や役所の防災課・消防署などの理解が得やすく、学校に設置の防災倉庫の炊き出し釜や防災備品の借用ほかさまざまな協力が得られる点。
- ・ 管理責任は主催団体が担い、教職員の出勤義務がない夏休みに実施することから学校や行政に負担をかけない自主・自律・自己管理で運営している点。
- ・ 長年の継続から卒業中学生や高校生の参画も自然に得られるようになり、肝試しや各種の遊びのリーダー役を担うように育ててきた点。

### 3 10の視点をどのように取組に生かしているか

#### 【1 大人がまず自ら行動し、子どもを巻き込む】

若い父親がテント張りから夕食の準備、キャンプファイヤー、添い寝などの体験を協働し、父子や他の家族との近隣共助の絆を深めることに役立っている。

#### 【8 協力者とは、互いのメリットとなる関係になるよう工夫する】

防災訓練は町会が実施していたが、緊急時に活躍する若者男性の参加が少ないことから町会と融合し、お楽しみ一泊キャンプと合体させたことで若者家族の参画を増やしつつ、参画者の保険代を町会負担にし、参画者の自己負担を軽減した。

ほか、取組全体に、以下の視点を含んでいる。

- 【5 異なる年齢・世代・立場の人が交流する】
- 【6 実際の社会に関わりながら、社会への関心や具体的な行動につなげていく】
- 【7 全ての子どもに知ってもらい、参加してもらう】
- 【9 子どもの気持ちを深く理解した上で、関係者を調整し提案できる人を取組に加える】
- 【10 大人や子どもが継続して参加できるように、活動の核となる場所を定める】

取組団体の概要	
団体名	秋津コミュニティ
所在地	千葉県習志野市秋津3-1-1 習志野市立秋津小学校コミュニティルーム内
連絡先	下記のHP内に連絡・見学案内あり (平成24年春にリニューアル完了予定)
団体のHP	<a href="http://www.akitsu.info/">http://www.akitsu.info/</a>
スタッフの人数	運営委員51名
予算規模	約20万円/年の自主財源+市より3万円/年及び水道光熱費代
財源の確保方法・ 財源を得る工夫	地域祭りでのお化け屋敷や、秋津っ子バザーにおける大人のバザー売上
指導者や支援者の 確保方法	学校で知り合う子縁(子どもを通した大人のご縁)による

「2 子どもと大人とが、互いによいパートナーとなって一緒に取り組む」  
「4 達成感・充実感を味わえる経験を増やし、子ども自身の潜在的能力を引き出す」  
ほか実践例

## きっずキャプテン ～児童館の活動を盛り上げる子どものリーダー～ (社会福祉法人 川崎市社会福祉事業団 KFJ多摩すかいきっず)

※ 文責の記載がない取組事例は、事務局がヒアリングの上作成した紹介記事である。(以下同じ)

### 1 取組の概要

川崎市内の児童館「KFJ多摩すかいきっず」では、平成23年度から、児童館の子ども向けイベントの企画・実施に、年間を通して携わる子どものリーダー「きっずキャプテン」を募集している。

きっずキャプテンの任期は1年で、実行委員会形式で行われるイベントを、子どもの実行委員（各イベント限りの委員）と協力しながら企画・実施する。定員や学年による応募制限はなく、希望する子ども全員がきっずキャプテンになることができる。

児童館では、近隣の小学生に毎月配られる「すかいきっずだより」というお知らせに、きっずキャプテンの募集情報を掲載するとともに、KFJ多摩が運営している学童保育へ通う子どもへ声をかけたところ、小学1、2、4年生の男子11人と女子1人が、きっずキャプテンに応募してくれた。児童館の来館者は男子が多いため、応募者も男子中心となったようである。



### <活動の様子>

平成23年7月に行われたベイブレード大会が、きっずキャプテンの初イベントとなり、大会の審判や全体運営を行った。また8月には、近隣の商店街のお祭りであるナイトバザールに、きっずキャプテンと実行委員の子どもが企画したゲームのお店「さかなつり」と「ダストシューター（ゴミの分別ゲーム）」を出店した。

子どもが児童館の年間行事をよく理解しているため、設立一年目であるが、きっずキャプテンの活動はスムーズに進んでおり、来年度以降は、地域の清掃活動などにも参加の場を広げたいと考えている。児童館のスタッフは、きっずキャプテンには、単なる行事やさんではなく、児童館に来る子どものリーダーとしての意識を持ってもらいたいと考えている。

子どもたちの保護者には、各イベントの手伝いなどはお願いしていないが、きっずキャプテンが活動するイベントが夜に行われる場合もあるため、活動に関する保護者の了承は得るようにし

ている。保護者からは、きつずキャプテンになって、子どもが有意義に過ごせており良かったという意見が寄せられている。

### <取組の課題>

どのイベントも、集まる子どもの顔ぶれが変わらないこと。これまで児童館に来たことがない子にも、活動に興味を持ってもらい、来館してもらえるよう工夫したい。また、児童館の利用者は男子が多く、女子がなかなか主役になれない。昨年は、ビーズやミサンガ作りが上手な女の子がきつず講師となって、子どもたちに教える取組があったが、スタッフ側の事情により、平成23年は実施していない。女子も楽しめるような企画を考える必要がある。

## 2 事例の優れた点、子どもに与える好影響、他の活動に参考になる点

児童館の壁に、皆がやってみたい行事についてのアンケートを貼って、誰でも書き込めるようにしている。アンケートに書き込まれた内容を実現できるかどうかは、きつずキャプテンが話し合う。児童館のスタッフは、子どもがしたいことを実現できるよう取り組んでいるが、子どもの発想はユニークなので、例えばお祭りで使うゲームの装置を子どものイメージどおりにどうやって作るか、等に苦労している。

大会などのルールを考える時には、男女、学年の区別なく楽しめるか、平等に判定できるかを、きつずキャプテンや実行委員に気づいてもらえるよう、児童館のスタッフが声がけをしている。

イベントの後には反省会を行っているが、「開会式の時に参加者を静かにさせられなかった」「審判がきちんとできなかった」など、きつずキャプテンや実行委員は自分に厳しく、次につなげようとする姿勢が見られ、参加者のせいにはしていない。ベイブレード大会の時に「上の学年の子にもちゃんと注意していた」「頑張っていた」「次回は自分も実行委員をやりたい」という意見が参加者アンケートに寄せられ、きつずキャプテンや実行委員は達成感ややりがいを感じ、今後の励みになっていたようである。

児童館の運営や活動をバックアップしてくれるすかいきつず連絡協議会には、地元の商店街も入っており、地元からの協力がスムーズに得られるような形になっている。児童館があるエリアは、元々世代間の交流が積極的に行われており、児童館のスタッフは、子どもたちに、住んでいる地域に愛着を持ってもらいたい、また、大人は子どもを見守っているということを知ってもらいたいと思っている。そのためにも、商店街の行事など、地域の活動に意識的に出て行こうと考えている。

取組を継続させるためにも、きつずキャプテンに限らず、児童館を利用する子どもからの様々な要望をどう実現していくかを常に考えている。

## 3 10の視点をどのように取組に生かしているか

### 【2 子どもと大人とが、互いによいパートナーとなって一緒に取り組む】

きつずキャプテンや実行委員と児童館スタッフとで、一緒にイベントを作っていくという意識を持っている。

- 【4 達成感・充実感を味わえる経験を増やし、子ども自身の潜在的能力を引き出す】  
きつずキャプテンについて、この視点を特に重視している。

ほか、取組全体に、以下の視点を含んでいる。

- 【1 大人がまず自ら行動し、子どもを巻き込む】
- 【3 自分にできることを見つけたり、つくり出していく気持ちを育てる】
- 【5 異なる年齢・世代・立場の人が交流する】
- 【7 全ての子どもに知ってもらい、参加してもらう】
- 【9 子どもの気持ちを深く理解した上で、関係者を調整し提案できる人を取組に加える】
- 【10 大人や子どもが継続して参加できるように、活動の核となる場所を定める】

取組団体の概要	
団体名	社会福祉法人 川崎市社会福祉事業団 KFJ多摩すかいきつず
所在地	川崎市多摩区登戸2249-1
連絡先	電話 (044)934-0801 FAX (044)934-0802
団体のHP	<a href="http://www.kfjtama.or.jp/">http://www.kfjtama.or.jp/</a> (KFJ多摩)
スタッフの人数	正職員2名、常勤の契約職員5名、パート4名

「2 子どもと大人とが、互いによいパートナーとなって一緒に取り組む」

「9 子どもの気持ちを深く理解した上で、関係者を調整し提案できる人を取組に加える」

ほか実践例

## 茅野市こども会議 ～子どもと大人は茅野市の未来を創るパートナー～

(茅野市、茅野市教育委員会)

<文責：茅野市教育委員会 学習企画課>

### 1 取組の概要

茅野市こども会議は、平成14年7月に策定された茅野市こども・家庭応援計画の施策目標に「こども会議」が掲げられたのが始まりである。その後、柳平（やなぎだいら）市長のマニフェストとして、平成19年3月に「『茅野市こども会議』の創設」が掲げられ、当選後、学校との打ち合わせ等の準備が進められた。そして、市制施行50周年記念事業として、平成20年11月に第1回茅野市こども会議を開催することとなった。



茅野市では、市民と行政がパートナーシップの手法（公民協働）で、お互いの意見を会議などでキャッチボールしながら様々な事業を進めている。今後は、大人の意見だけではなく茅野市の未来を担う子どもたちの意見を生かすことが必要であり、子どもたちの本音や考えていることの意見交換、大人たちへの意見、市政に対するアイデアや提言などを出し合い、自由に話し合う場として開催している。会議の企画・運営等については、可能な限り子どもたちの自主性に任せ、市では出された要望や提言を施策に反映させるよう努力している。



#### <開催概要>

第1回は、市内4中学校と茅野市リーダースクラブ、CHUKOらんどチノチノこども運営委員会\*<sup>9</sup>から推薦されたこども運営委員20名で、運営委員会を8回開催し準備を進めた。当日は「環境」「福祉」「教育、インターネット・ケイタイ」「社会」の4項目についての提言書を市長へ提出し、その内容の発表と意見交換が行われた。

第2回は、運営委員に市内2高校からの推薦者を加えた30名で、計9回の運営委員会を開催し準備を進めた。こども会議では「福祉」「学校づくり」「観光」の3つのテーマについて意見交換を行い、それを踏まえて市長へ提言を行った。

\*9 CHUKOらんどチノチノこども運営委員会(p.100)

中高生が設計段階から関わり、子どもたち自身が企画・運営をして、「子どもの居場所」として、また「夢や希望をかなえる場」として創られた『CHUKOらんどチノチノ』という施設があり、その利用者の中高生達が自らの意志によって組織し、様々なイベント等の企画立案を行う運営委員会。

第3回は、より自主的な取組をめざすため、こども委員の公募を行い2名の応募があった。その他、市内4中学校、2高校、茅野市リーダーズクラブからの推薦により、計30名で計10回のこども委員会を行った。今回から、自由にのびのびと意見交換できる雰囲気づくりとワークショップにするため、ファシリテーターに進行役をお願いし、また、大学生をはじめとした大人にサポーターとして関わっていただき、子どもたちが考えたり意見を言ったりするのをサポートしてもらった。こども会議では「学校」「施設」「生活・環境」の3つのテーマについて、こども委員と来場者を交えた小グループで意見交換をした後、こども委員が各グループの意見を発表した。時間が足りないほど多くの意見が出され、子どもからは「普段思っていることをなかなか言う機会がないので、話せて良かった」という感想が出た。その後、こども会議での意見交換を踏まえ、「学校」「環境」「こども会議の継続」についての提言書を市に提出した。

第1回から第3回まで行った提言に対し、市では、それぞれ回答書を出して、子どもたちに返している。

第4回は、公募委員2名と市内4中学、1高校、茅野市リーダーズクラブからの推薦により、計25名で準備委員会を構成し、ファシリテーターを進行役に、大人のサポーター6名で子どもたちをサポートしながら、計10回開催する予定である。第4回の準備委員会の構成としては、中学1年生2名、2年生7名、3年生10名、高校2年生3名、3年生3名である。ファシリテーターは20代男性、サポーターは20代4名、30代1名、40代1名である。進め方は昨年と同様であるが、昨年よりも更に子どもたちの自主的な取組を促すように努めている。

## 2 事例の優れた点、子どもに与える好影響、他の活動に参考になる点

第3回こども会議から、ファシリテーターに進行役をお願いし、さらに子どもの支援者としてサポーターを養成している。ファシリテーターはアイスブレイクや子どもたちが楽しんでできるワークショップの手法を用い、子どもが話しやすい雰囲気づくりに努めている。また、子どもの意見が出ない時も急がず待ち、子どものちょっとしたつぶやきが出たら、それを拾い上げ、更に広げていくことで意見や主張につなげている。サポーターは、ファシリテーターと共に子どもをサポートし、ファシリテーターの手法を学んでいる。

「自分たちは子どもという立場であるが、自分の言いたいことを主張することができ、それに、大人がきちんと耳を傾けてくれ、大人と向かい合って話すことができ、とてもよかった」「この会議を通して、大人たちに子どもの意見を伝えられることは本当にいいことだと思いました」というこども委員の前向きな感想もあり、なかなかできない経験となっているようだ。

## 3 10の視点をどのように取組に生かしているか

### 【2 子どもと大人とが、互いによいパートナーとなって一緒に取り組む】

茅野市では、行政と市民がパートナーシップの手法でお互いの考えや意見をキャッチボールしながら様々な施策を進めている。市民の中には、当然子どもたちも含まれており、未来の茅野市を担っていく子どもたちの意見をまちづくりに取り入れていく必要がある。

こども会議は、普段なかなか大人に対してものが言えない子どもたちに、対等な立場で自由に意見が言える場ということで、子どもたちには「意見を言ってもいいんだ」という意識を持ってもらい、大人については、子どもの意見を聴くことの大切さを知り、子どもの意見を知ること



それを実社会において活かすための機会として開催している。

### 【9 子どもの気持ちを深く理解した上で、関係者を調整し提案できる人を取組に加える】

第3回こども会議から、ファシリテーターに進行役をお願いし、さらに子どもの支援者としてサポーターを養成している。

「子どもの権利条約ネットワーク」より派遣された20代のファシリテーターは、アイスブレイクや子どもたちが楽しんでできるワークショップの手法を用い、子どもが話しやすい雰囲気づくりに努めている。また、子どもの意見が出ない時も急がず待ち、子どものちょっとしたつぶやきが出たら、それを拾い上げ、それをさらに広げていくことで意見や主張につなげている。

また、地域の大人を対象とした公募により選ばれた20～40代のサポーターは、ファシリテーターと共に子どもをサポートし、ファシリテーターの手法を学んでいる。

ほか、取組全体に、以下の視点を含んでいる。

### 【10 大人や子どもが継続して参加できるように、活動の核となる場所を定める】

取組団体の概要	
団体名	茅野市、茅野市教育委員会
所在地	長野県茅野市塚原2-6-1
連絡先	(0266)72-2101 (内線 614)
団体のHP	<a href="http://www.city.chino.lg.jp/">http://www.city.chino.lg.jp/</a>
指導者や支援者の確保方法	子どもの権利条約ネットワークより、ファシリテーターを派遣してもらっている。また、サポーターは地域の大人を対象に公募している。

「2 子どもと大人とが、互いによいパートナーとなって一緒に取り組む」

「7 全ての子どもに知ってもらい、参加してもらおう」ほか実践例

## 児童青少年センター(ゆう杉並)

(児童青少年センター(ゆう杉並)中・高校生運営委員会)

<文責：杉並区保健福祉部児童青少年課>

### 1 取組の概要

#### <「児童青少年センター(ゆう杉並)中・高校生運営委員会」設置の経緯>

1991年(平成3年)に、旧児童福祉センター移転改築案が浮上、全国的には家庭内暴力、校内暴力、いじめが社会問題化した時代。区議会で、「地域での若者たちの居場所、中高校生の居場所」についての質問が出されたことをきっかけに、杉並区の多くの児童館が「中高生も利用しやすい児童館運営」として、週1での中高生タイムの実施(中高生のみ7時まで利用可能)やライブイベントの実施、中高生のための夜間映画会、中高生クッキング、中高生キャンプや館内宿泊などに取り組み始めた。

こうした中、利用する中高生からは「もっと自分たちにとって使いやすい居場所がほしい」という声が上がってきた。時を同じくして、子どもの権利条約などの盛り上がりとともに、中高生を取り巻く社会情勢も大きく変化し、「地域における中高生の居場所作り」について各方面(青少年育成委員会、PTA、町会、商店会)でその必要性が論じられるようになった。

こうしたことを背景に、1993年(平成5年)に、「大型児童館の建設」が基本計画から実施計画に移され、翌年には学識経験者を加えた「児童青少年センター建設協議会」と、児童館職員で構成された「センター建設検討会」が設置された。その一方で、センター建設に当たり、「当事者である中高生の声を生かしたセンターにしたい」という「センター建設検討会」の思いを受けて、「中・高校生建設委員会」が設置された。新しい自分たちの居場所となる大型児童センターの建設について、公募により集まった43名の中高生が6つのグループに分かれ、約半年をかけて8回にわたる話し合いやワークショップを行った。

1997年(平成9年)9月に、全国に先駆け、中高生の意見を活かした中高生の居場所としての大型児童館がオープンした。オープン後の中高生建設委員会は、中高生運営委員会(以下「委員会」という)として、運営面で中高生にとって魅力的な施設となるよう活動を続け、今年度(平成23年度)で15期目に入った。

#### <中・高校生運営委員会設置の意義>

中高生自身が、施設の運営に対する意見を述べ、事業の企画や準備、運営等、事業実施の中心を担うことで、社会や行政への参画を果たし、子どもの権利条約の「意見表明権」の具現化を図つ



ている。また、この委員会の設置が利用者全体の自主性や自立性を促進させ、自主企画実現システム等、彼等にとって魅力ある施設運営につながっている。

#### <開始時期>

設置 平成9年5月1日

任期1年間 18歳の誕生日を迎える年度まで再任可能

平成23年度 委嘱式：5月6日、定例会：毎週土曜日、  
部会・プロジェクトチーム（以下PT）等：週1～2回

#### <中・高校生運営委員会の構成>

区内在住・在学または児童青少年センターを利用する中学生から18歳までの児童、概ね20名

平成23年度構成 高校3年生5名、高校2年生7名、高校1年生6名、中学2年生1名

平成23年度部会・PT等 部会：広聴部会、広報部会、PT：見学・研修PT、調査返答PT

#### <呼びかけの方法>

区報等での公募、来館時の声かけ

#### <保護者とのかかわり方・反応>

申し込み時に保護者の承諾を得ての委嘱となる。保護者の反応は、活動内容には好意的だが、夜間の活動・回数については年間数件要望があり、その都度職員と委員が縮小方法を検討している。

#### <取組の課題や必要な支援など>

より自立度の高い参画の推進と、委員会での取組が、ゆう杉並全体の中高校生へと広がり、参画への意識・自立度ともに高まっていくことをめざす。

(1) 委員会の役員（委員長1名 副委員長2名）のファシリテーター研修の整備と、役員会の計画的な実施により、委員会全体の自立度を高める。

① 役員研修のあり方を整備し、ファシリテーターとしての役割を担えるよう、育成プランを立て、役員会での役員のステップアップと、旧役員から新役員への引継ぎ（ノウハウやファシリテーション技術を含む）を計画的に行う。

② ①で進める役員としての経験値を、ACTIVE FESTA<sup>※1</sup>のまとめ委員会<sup>※2</sup>全体で共有し、まとめ委員が、より積極的に意見やアイデアを出し、平成23年度の委員会運営全体のシンクタンクとして機能できるよう、計画的に組織・運営する。

③ ①、②で培った経験値を委員会全体で共有し、役員・まとめ委員以外のメンバーも力を発揮し成長できるよう、PTや部会、研修合宿等の役割分担をし、運営・実施する。

④ 新旧役員研修を実施し、前年度の役員の経験を次年度につなげるための引継ぎを計画的に行う。

(2) 委員会で培った力を「日常活動<sup>※3</sup>・自主企画<sup>※4</sup>から委員会へ」また「委員会から日常活動・自主企画へ」相互に役立てられるようにすることをめざす。

- ① 各系統<sup>\*5</sup>の自主企画経験者や自由利用の中から、中核となり得る利用者を育て、ACTIVE FESTAや平成24年度の委員会への参加を促す。
- ② ACTIVE FESTAでのセクション運営<sup>\*6</sup>の中で、委員がファシリテーターとなって、リーダーがセクション運営を行うことにより、委員会の持っている経験値を各系統の中高生に広げ、各自の活動場所での参画や自立度を高める。
- ③ 委員会OBの系統における活躍を意識し、現委員と連携した取組や、各活動場所における参画への意識や、自主活動の活性化につながるよう支援する。

## 2 事例の優れた点、子どもに与える好影響、他の活動に参考になる点

委員会の運営は独立しており、職員や館運営に対して対等に意見を言うことができ、それを職員も真剣に受け止め、議論していくことが特徴といえる。サポートの職員は、考える上での筋道や、手続きについてアドバイスする。

委員は、年度ごとの活動内容を自分たちで決めていき、時には職員とぶつかりながらも、児童館運営の中に、より中高生の意見を反映させていけるよう活動している。

取組の中でも「広聴部会」が実施している「ゆうに一言」や、「運営チェック<sup>\*7</sup>」は、子どもの権利条約の意見表明権を具現化し、中高生が自ら身近な居場所を変えていける、手ごたえのある取組といえる。

「ゆうに一言」とは、利用者が感じたこと・不満に思ったことなどを記入する投書箱で、月1回委員会の広聴部会が回収し、職員への指摘事項、要望、感想に分け、短期、長期に分類し、返答している。

このうち、職員への指摘事項は、職員会議で話し合い、改善点を部会へ返答し、「ゆうに一言」掲示板に意見と返答を掲示する形で、委員会が利用者に周知する。

<指摘事項の例>機材のメンテナンスについて、清掃について、ルール周知の徹底についてなど

要望事項は優先度、公共性（特定の利用者だけに利益があるものではないか）等を、委員会の定例会で検討し、必要なものは、一般利用者からの投票を行ったり、利用者懇談会<sup>\*8</sup>を開催した上で、児童青少年課長への要望書に盛り込む。要望書は、毎年2月に委員長から児童青少年課長へ提出され、事業系の職員が検討した上で、4月1日付けで児童館のルール変更・周知となる。

<要望事項の例>

自動販売機メニューについて、ゲーム機 ソフトについて、HPの充実について、開館時間について、入館票カード化についてなど

## 3 10の視点をどのように取組に生かしているか

### 【2 子どもと大人とが、互いによいパートナーとなって一緒に取り組む】

委員会と児童館の職員は対等であり、共に中高生にとって魅力的な施設にしていこうという意識を共有している。

### 【7 全ての子どもに知ってもらい、参加してもらおう】

取組の理解と委員会への関心をもってもらい、自分たちで変えていける施設であることを知ら

せていくため、「広報部会」を設置し、周知している。平成23年度の大きな取組として“ゆう杉並紹介”の自作ビデオ作成を予定している。

**【9 子どもの気持ちを深く理解した上で、関係者を調整し提案できる人材を取組に加える】**

役員会を中心に、ファシリテーターとしての技術の習得を目指している。詳細は、＜取組の課題や必要な支援など＞参照

ほか、取組全体に以下の視点を含んでいる。

**【3 自分にできることを見つけたり、作り出していく気持ちを育てる】**

**【4 達成感・充実感を味わえる経験を増やし、子ども自身の潜在的な能力を引き出す】**

**【8 協力者とは、互いのメリットとなる関係になるよう工夫する】**

**【10 大人や子どもが継続して参加できるように、活動の核となる場所を定める】**

＜注釈＞

※1 ACTIVE FESTA (p. 104)

ゆう杉並の文化祭的な全館をあげてのイベント。委員会が主催し、スタッフを募り、ジャンルごとにセクションに分かれて準備を進める。

平成22年度のスタッフは128名で、参加者は500名を越える。

※2 まとめ委員会 (p. 104)

委員会の担当は各セクションに分かれ、セクションから一人ずつ「まとめ委員」として、まとめ委員会議に出席し、全体でのテーマや、購入物品・館内物品、場所の調整などを行う。

※3 日常活動 (p. 104)

日常利用、居場所利用、目的利用、団体利用などの日常的な利用のこと。

※4 自主企画 (p. 104)

平成17年度から実施している「自主企画実現システム」。

中・高校生のやりたいことを実現していく過程で、講師交渉や、課題抽出、段取り力やコミュニケーションスキルなどのソーシャルスキルを獲得できるようサポートする。

※5 系統 (p. 105)

日常活動のジャンルのことで、音楽系、ホール系、体育系、工芸系、委員会担当の5つの系統がある。例えば、音楽系統の利用者と言えば、スタジオの利用者などを指す。

※6 セクション運営 (※1も参照) (p. 105)

セクションでの取組内容は、あらかじめ委員で決めるのではなく、参加のスタッフで決めていく。1名リーダーを選び、スタッフの意見をまとめていけるよう、委員会のメンバーがサポートしていく。このときに、役員会等で培ったファシリテーションのスキルが役立っている。

場づくりや、合意形成に至る苦勞と喜び、グループワークスキルは、セクションの運営をとお

して、委員会全体のものになる。

一般利用者であるセクションのリーダーやメンバーが日常の活動場所に戻ったときに、委員会と共に活動場所・居場所を変えていく力や意識が芽生えていくことをめざしている。

※7 運営チェック (p. 105)

中・高校生運営委員会の取組の一つ。

運営を見直し、中・高校生にとって使いやすいものなのか再検討し、要望書として提出する。

※8 利用者懇談会 (p. 105)

委員会以外の利用者が、活動や居場所について意見を述べ、検討する。

委員会は懇談会に出席し、その場で議論された意見や要望を持ち帰り、委員会の定例会で承認する。

取組団体の概要	
団体名	児童青少年センター(ゆう杉並)中・高校生運営委員会
所在地	東京都杉並区荻窪1-56-3
連絡先	(03)3393-4760
団体のHP	<a href="http://www2.city.suginami.tokyo.jp/kids/index.asp">http://www2.city.suginami.tokyo.jp/kids/index.asp</a>

## 6年生を主体とした子ども会行事の企画・運営

～最上級生としての一年の成長過程～

(鳶尾5丁目青空子ども会)

### 1 取組の概要

厚木市内にある鳶尾5丁目青空子ども会は、会員数23名(平成23年9月時点)の子ども会であり、うち6年生4名が活動の主体となって、5年生のサポートを得ながら、子ども会の行事の企画・運営、新聞の発行などを行っている。

企画担当の6年生は、なるべく全員が出席できるようスケジュールを調整した上で、1つの行事のために何回も集まって話し合いや準備を行う。子ども会の役員である大人は、お金の管理、買い物の時の車出し、打合せの部屋の確保、全体のスケジュール管理などを行う。

#### <年間行事>

春の1年生を迎える会、夏のお楽しみ会、自治会と協力して行う、秋の鳶尾5丁目秋のつどいと冬のどんと焼き、年度末の6年生を送る会などがある。また、年間を通じた活動として、西公園の花壇の植え替えや月1回の掃除を行っている。

厚木市七沢のキャンプ場で行う夏のお楽しみ会は、6年生の希望と予算との兼ね合いにより、泊まりで実施する年と日帰りの年とがあるが、平成23年夏は、2年ぶりに泊まりで行った。基本スケジュールや班分け、食事のメニューは大人が決め、子どもはゲームの企画やルールの

説明などを担当し、事前に6回くらい集まって企画会議を開いたが、子どもの意見がまとまらず、話し合いのサポート役として、高校生や中学生のジュニアリーダーに2回来てもらった。ジュニアリーダーは、子どもの目線で意見や提案をしてくれ、大人が気づかないことを気づかせてくれる存在であり、よい話し合いができたと感じている。

#### <企画・運営を担当する6年生について>

5年生は、年度末に6年生を送るために頑張り始め、一年かけて色々な行事を経験しながら育っていき、全員が積極的に活動に関われるようになるのは6年生の最後の方である。6年生が企画や運営を担当するのは、以前からの決まりであるが、話し合いに来ない子、意欲がない子もいる。そのやる気を上手く引き出すのが大人の役目と思っている。

年によって6年生の人数が違うが、人数が多いと、アイデアは出るが意見がまとまらなかったり、中には、話し合いの途中でケンカをして帰ってしまう子もいる。また、意見を出せば何でも



鳶尾5丁目青空子ども会で発行している新聞(6年生が作成)

大人がかなえてくれると思っており、アイデアを実現するための具体的なプロセスが考えられない子もいる。過去の様子を見ていると、上級生の連携が保たれてまとまっていると、下の学年の子も自然とついてくる。6年生の力は大事である。

### <取組の課題>

当子ども会は、自治会と協力して行う行事もあり、自治会との関係は大変上手くいっているのが長所である。課題としては、学年による縦割りの組織があまり機能していないことや、子ども会への入会率が半分くらいであること。また、今の子どもの特徴として、人から言われたいとできない、自由な時間があるとダレてしまう、自分の身の回りの小さな世界しか気にかけおらず、ゲームなどの場面で、自分が楽しむことを優先し、年下の子も一緒に楽しめるように配慮するなどの気遣いが見られないという面が見られる。そのような時には、大人が「それは一年生もできるの?」「男子だけしか楽しめないんじゃない?」などと気づかせるよう声をかけている。

## 2 事例の優れた点、子どもに与える好影響、他の活動に参考になる点

子ども会の行事は定例的なものが多いため、子どももアイデアを出しやすいようである。

また、どうやったら上手く進められるかを一年かけて理解していき、6年生の最初と最後とを比べると、かなりの変化が見られる。子どもが、学校や家では見られない別の顔をしており、この経験を通じて子ども同士が仲良くなることのできる。

## 3 10の視点をどのように取組に生かしているか

### 【3 自分にできることを見つけたり、つくり出していく気持ちを育てる】

子どもが主体となって、子ども会の行事を企画・運営している。大人は、子どものやる気を引き出したり、大事な視点到気づくよう声をかけるなどのサポート役。

ほか、取組全体に、以下の視点を含んでいる。

### 【2 子どもと大人とが、互いによいパートナーとなって一緒に取り組む】

### 【5 異なる年齢・世代・立場の人が交流する】

### 【7 全ての子どもに知ってもらい、参加してもらう】

### 【8 協力者とは、互いのメリットとなる関係になるよう工夫する】

### 【9 子どもの気持ちを深く理解した上で、関係者を調整し提案できる人を取組に加える】

### 【10 大人や子どもが継続して参加できるように、活動の核となる場所を定める】

取組団体の概要	
団体名	鳶尾5丁目青空子ども会
所在地	厚木市鳶尾5丁目
スタッフの人数	4人（子ども会の役員）
予算規模	約30万円／年
財源の確保方法・財源を得る工夫	子ども会の会費及び市からの助成金
指導者や支援者の確保方法	子ども会の役員は、本人の希望を尊重するほか、役員が声かけを行っている。



## 子どもたちがまちを創る

### ～子ども主体の仮想のまち「ミニヨコハマシティ」の活動～

(NPO法人ミニシティ・プラス)

<文責：三輪律江委員>

#### 1 取組の概要

スタートは2006年10月。ドイツ・ミュンヘンを発祥とする、子どもがまちのルールや仕組みなどをつくり変化するまち「ミニミュンヘン」プログラムに触発され「面白い、やってみたい」という大人たちが当NPOの原点となる「ミニヨコハマシティ研究会」を月1回開催、最終的に40名の大人（市役所職員、NPO活動をする市民、大学の研究者等）が集まり企画を練る中、研究会メンバーのNPO法人I Love つづき（横浜市都筑区を活動の中心とするまちづくりNPO）が主催団体となり、2007年3月に、最初のミニヨコハマシティ（通称ミニヨコ）を開催した。その後、研究会はNPO法人ミニシティ・プラスとして法人化し、このような活動を広く普及させることとその効果を継続的に検証していくことを目的とした法人の主要事業と位置付け、定期的で開催している。

最初のきっかけは大人側からの仕掛けであるが、大人が仕掛ける上で ①選挙権のない19歳までで、保護者から離れてひとりで活動できる子を対象とする ②まちを創る代表である「市長」を選出する ③大人口出し禁止、アドバイスのみ ④まちに完成形を求めず創り続けるといったコンセプトだけ決め、すべての決定は子どもたちに託した。その上で子どもたちの潜在的にやりたいこと（〇〇屋さんをやりたい、△△なまちにしたい等）を把握し、実行できる形で実現するため丁寧にヒアリングを行った。結果的に、この子どもたちの意見を否定せずよく聞く、といった姿勢が彼らとの信頼関係を築く第一歩だった。

ミニヨコハマシティ（通称ミニヨコ）は年に1回、3日間程出現する。集まった子どもたちは市民登録をし、ハローワークを通して仕事をし「ミニヨン」を稼ぎ、遊び、飲食をする。また期間中、選挙によって選出された子ども市長が中心になり、マニフェストに従い年間を通し月1回のペースで子ども会議が開催される。現在4～19歳の子どもたちが、子ども会議をしながら交流を深めている。大人たちは、ミニヨコでの参考となるよう時に子どもたちの興味がある「仕事場」



に見学・体験をする機会をつくったりしながら、サポート役に徹している。

第1回のミニヨコは「ミニヨコ運営市民募集、市長候補も！」とPRし、56名の運営市民（小学1年～高校2年）と6名の市長候補が集まった。当時中学3年の初代市長が選挙で誕生。その後、彼女は3期市長を務めた。彼女の公約は「笑顔あふれるまちづくり」「ミニミュンヘンなど他地域の子どものまちとの交流」であった。その公約どおり、2008年、市長を含むミニヨコ市民6名と大人スタッフ3名が、ミニミュンヘンと、ベルリンで開かれた「第1回子どものまち世界会議」に参加した。そして、2009年、開国博Y150の横浜にて、第2回子どものまち世界会議と、全国の子どものまちも参加した「子どものまちEXPO」が開催された。興味深いのは、当初まちのルール、運営や経済の仕組みなどに注がれていたものが、ミニミュンヘンへの参加を機に、まちのわかりやすさ、ハードの大切さに気付き、まちのシンボル、デザイン、お店のサインが、子ども会議の議題にあがるようになったことである。結果「子どものまちEXPO」では、段ボールの壁に黒板塗料を塗った「自由に描ける」お店に変化し、LED照明によるオリジナル行燈や時計台、メッセージの書けるシンボルツリー等、新アイテムが登場した。

さらにミニヨコの進化は続く。2010年には「キットをつくってミニヨコが出張する」という発想も生まれた。何度もブレスト会議を重ね、建築家の遠藤幹子氏の協力を得て「草むらハウス」キットが生まれた。しかし、このお披露目を予定していた2011年3月のミニヨコは、震災のため中止となった。震災を経て、幹部の子どもたちが会議で「ミニヨコハマシティは、この夏『ミニヨコビレッジ』となって再生する」と決めた。彼らが出したキーワードは「原点回帰」。会議をなるべく畑で行い、野菜を育て、収穫した野菜をみんなで料理して食べる自給自足のまちだ。仮想のまちを飛び出して実際に畑作業に取り組む、まさしく横浜が抱える郊外の農的空間を活かした実際のまちづくり活動に発展していく。2011年8月には、横浜トリエンナーレ連携企画・新港ピア会場で、子どもたちはアーティストに混じり「ミニヨコアートビレッジ」を出現、展示された草むらハウスの中に、彼らの野菜畑を連動させ、実際に収穫した野菜を使ったスープを提供する企画を実施した。

## 2 事例の優れた点、子どもに与える好影響、他の活動に参考になる点

本活動では、子どももまちに暮らす一員であり主体者であるという視点、まちは行政・市民・事業者など、様々な立場の主体者が関係し合って創り上げているといった、まちづくりの視点に力点をおいており、その上でこだわって工夫している点は以下のとおりである。

### <子ども達と目線を揃えた関わり方>

大人は、相談されたら「経験のある者」としてアドバイスをするが、決めるのは子どもたちである。そんな大人の存在を、子どもたち自身も、自分たちのまちを運営する上で欠かせない「パートナー」として受け入れている。

### <実社会との接点の創出と提供>

子どもたちの発想が豊かになるような「種」、すなわち本物の職人、機材との出会い、ミニヨコでの仕事を実現するための社会見学や体験の機会を提供するのも、「経験ある大人」の役目と考える。そのためには、様々な企業や大学、行政のサポートが必要であり、大人スタッフがそれらを繋ぎ、実現している。常に様々な連携先とネットワークを構築しながら進める動きは、いわゆる課題解決から理想のまちの実現をめざす実際の地域まちづくり活動に類するもので、私たちは、

子どもたちが「ミニヨコ」を通して、こういった様々な大人の動きを眺めることも、地域まちづくりを担う次世代の人材育成にわずかながら寄与していると考えている。

主体となって自ら動けるようになった子どもたち、まちづくりや子どもへの教育分野に関心を強め、将来の進路とする卒業生の出現など、この活動の効果は想像以上である。

### 3 10の視点をどのように取組に生かしているか

- 【2 子どもと大人とが、互いによいパートナーとなって一緒に取り組む】、
- 【3 自分にできることを見つけたり、作り出していく気持ちを育てる】、
- 【4 達成感・充実感を味わえる経験を増やし、子ども自身の潜在的能力を引き出す】、
- 【9 子どもの気持ちを深く理解した上で、関係者を調整し提案できる人を取組に加える】

10の視点のうち、視点2、視点3、視点4は、ミニヨコにおける特徴であり、大人が目線を揃えた聞き役になり、見守りという立場を取っていることから、どの子どもも自分の思い通りに活動できると満足しているようだ。しかし、ミニヨコは準備や運営などの面でも、大人のサポートなしには運営できない。参加する子どもたちからの意見には「大人はお助けマン（小学6年・女）」であるというもあり、サポート役の大人は、視点9にもあてはまるのではないかと考える。

- 【1 大人がまず自ら行動し、子どもを巻き込む】、
- 【5 異なる年齢・世代・立場の人が交流する】、
- 【6 実際の社会に関わりながら、社会への関心や具体的な行動につなげていく】

またミニヨコは、サポートしてくれる大人、大学生や学校、年齢に関係なく友だちを作る場所となっていて、視点5にも当てはまると考える。また、仕事場に体験をさせてもらいに行き、教えてもらうということは、視点6として、異世代の交流にもなり、社会に繋がる経験にもなる。

このような体験を通して、大人が頑張っている所を見せ、子どもに影響を与えられることが、視点1につながっており、複数の視点がそれぞれ相互に関係しながら盛り込まれている活動と言える。

ほか、取組全体に、以下の視点を含んでいる。

- 【8 協力者とは、互いのメリットとなる関係になるよう工夫する】
- 【10 大人や子どもが継続して参加できるように、活動の核となる場所を定める】

取組団体の概要	
団体名	NPO法人ミニシティ・プラス
所在地	横浜市都筑区南山田2-1-2-306
連絡先	(045)306-9004（月～金 9時～17時）
団体のHP	<a href="http://minicity-plus.jp/">http://minicity-plus.jp/</a>
スタッフの人数	7人
予算規模	200万円／年
財源の確保方法・ 財源を得る工夫	活動助成金、事業趣旨に賛同する企業等からの支援（寄付だけでなく物的提供や人的提供も含む）
指導者や支援者の 確保方法	参加する子どもの保護者、事業趣旨に賛同する他団体・企業等からの支援

## ぶちひらつか

### ～「キッズビジネスタウン」におけるまちづくり～

(子どもの社会性を育む方策実践検証委員会)

<文責：神奈川県立平塚商業高等学校 穂田智範教諭>

#### 1 取組の概要

「ぶちひらつか～キッズビジネスタウンひらつか～」は、以前は単独主催だった類似事業を、平成22年から、神奈川県立平塚商業高等学校と社団法人平塚青年会議所が協同主催する形式を取っている。

①メイン事業、②プレ事業、③子ども会議事業の3つから構成され、①メイン事業は、小学生が企業、団体、模擬官公庁などで構成する一つの街の市民となり、そこで体験する仕事や消費などをおおして、ともに協力しながら街づくりを行い、主体性と想像力をもって社会の仕組みを学ぶという内容であり、平塚市、大磯町、二宮町に在住または在校する児童を対象として、平成23年8月7日(日)に、紅谷町まちかど広場を中心とした商店街で実施した。

今回の対象である③子ども会議事業を中心とした取組は、事前に子ども議員や市長によって構成される「子ども会議」において主体的に計画した街づくりを実践することにより、地域の課題点について考えるとともに、問題解決力を育成し、生きる力を育むことを目的としている。

また、小学生を中心とした取組に高校生、大学生、大人が協力・参画して運営することにより、キャリア教育としての側面を分かち合い、地域づくりの一助という共通の目的に向かって協働することの大切さを学ぶことも重要だと考えている。



#### <実施の流れ>

- 4月 約20名の子ども議員を募集(平塚市、大磯町、二宮町に在住または在校する児童を対象)
- 子ども会議を計画的に進めるため、子ども議員が参加する「子ども会議」を4回実施
- プレ事業への参加(計6日間)
- メイン事業の運営
- 事後の「子ども会議」を実施

#### 2 事例の優れた点、子どもに与える好影響、他の活動に参考になる点

- ・ 就職・仕事・給料・買い物・退職まで体験する「働くこと」の一連の流れを体験させることとの企画立案をすることで、街づくりを主体的に学ぶことができる。

- ・ 異なる学校に所属する小学生同士が意見を交換することや高校生、大学生や大人と協働することで、コミュニケーション能力を高めることができ、次のキャリアを体感することができる。このことは小学生に限らずお互いに影響が大きいことである。
- ・ 他の児童と協力してものごとを行うことで、相手を思いやる気持ちを育むことができる。
- ・ 「ものづくり」を経験することで、働くことの楽しさ、喜び、大切さを学ぶことができる。
- ・ 高校生や大学生にとっては、「小学生の街づくり」の運営をマスターすることにより、日常の専門的な学習における知識を深めるほか、発想から具現化までの過程における学習を深める。
- ・ 大人にとっては、地域づくりという共通の目的に向かって協働する中で、社会人として責任の大きさを学ぶことができる。

### 3 10の視点をどのように取組に生かしているか

#### 【3 自分にできることを見つけたり、つくり出していく気持ちを育てる】

- ・ 子ども会議において「自分にできることを見つけたり、つくり出していく気持ちを育てる」ためには、各子ども議員の発想を大切な要素と考え、子どもたちの発言から実現可能なアイデアをピックアップし、具現化させていくという方向性で話し合いを進めた。また、展開の補助として、多数決による議決と少数意見の尊重という民主主義に則った展開を図った。  
また、子どもたちが話し合いを円滑に進めることができるような配慮としては、事前にワークシート形式による各自の意見集約と、それに基づいた話し合いを持ち、会議を進めた。
- ・ メイン事業においては、子ども議員の活動拠点となる市議会ブース前に、仕事のないふち市民を集め、希望制で仕事を与え、それを子ども議員がサポートした。

#### 【5 異なる年齢・世代・立場の人が交流する】

- ・ 「ぶちひらつか2011～キッズビジネスタウンひらつか～」全体像を考えたとき、小学生、中学生、高校生、大学生、専門学校生、個人事業主、教職員他、多くの人たちが交わり、キャリア教育という側面で事業が形成されている一面がある。
- ・ プレ事業では、子ども議員がイベントに招かれ見学や試食をすることで、地域の活性化を考えさせると同時に、地域の大人と交流することをめざした。また、ものづくり体験教室に参加する子ども議員及びその家族や友人に対して、大学生、保護者および専門家が指導を行い、それに平商チャレンジショップ委員（高校生）や教職員がバックアップした。

#### 【6 実際の社会に関わりながら、社会への関心や具体的な行動につなげていく】

- ・ 本物の商店で働く体験を実現し、さらに模擬通貨を実際の商店街で使用できるしくみを持っている。
- ・ 子ども議員に「商店街での実施」を提示し、提案された内容を実施した。具体的には給料を商店街で使えるようにする（為替レートを設定することを条件として実施）、「時事問題」を列挙させ、関連した内容の実施（震災募金など）、ものづくりの仕事体験や商店街での働く体験の実施など。

## 【10 大人や子どもが継続して参加できるように、活動の核となる場所を定める】

メイン事業会場として実際の商店街を含むエリアを選択し、その中で現実社会と絡んだ展開、具体的には本物の商店でのミニインターンシップを実現していく方向性があったことに加え、「ものづくり、政策」をキーワードとして展開した。

そのほか、10の視点以外として、以下の視点を含む。

### 【子どもに役割を与えること】

- ・ 市長決め、委員会活動、選挙管理委員会活動など、児童は単なる受け身でなく、自ら主体的に考え行動し、役割を担っていった。市長決めに関しては、決め方について議論を行い、立候補の条件整備、選挙管理委員会の立ち上げなどを実施した。委員会活動に関しては、子ども会議事業を効率的に進めるために、子ども会議準備委員会からの提案として実施した。具体的には「リアル店舗模擬店委員会」、「ステージ委員会」、「政策金融委員会」に分け、それぞれが活動を展開した。
- ・ 参加児童に仕事、消費を通じて街に参加する役割を与えた。
- ・ 子ども議員に対して委員会活動、ふち市民会議、開会式及び閉会セレモニーにて役割を与えた。

### 【支援者を組織化し、ノウハウを伝承するしくみをつくること】

- ・ 主催者が計画的に支援者を募るに加え、大学生団体を含め参加児童に絡む支援母体を模索することが本事業全体における今後の検討事項となる可能性がある。
- ・ メイン事業運営スタッフ会議（協賛企業団体の組織）、子ども会議準備委員会（大学生、高校生の組織）、ものづくり体験教室実施における保護者有志の協力組織それぞれの協力により実施した。
- ・ 主催者が共催であることにより、お互いの関わりを整理し、ノウハウを共有できている。

取組団体の概要	
団体名	子どもの社会性を育む方策実践検証委員会
所在地	平塚市中里50-1 県立平塚商業高等学校内
連絡先	(0463)31-2385
スタッフの人数	120人
予算規模	60万円／年
財源の確保方法・ 財源を得る工夫	主催者事業予算、協賛
指導者や支援者の 確保方法	主催者のつてによる

「3 自分にできることを見つけたり、つくり出していく気持ちを育てる」

「9 子どもの気持ちを深く理解した上で、関係者を調整し提案できる人を取組に加える」

ほか実践例

## 一日冒険遊び場

～「自由に遊ぶ」がモットー。「親は口出し、手出しはしない」「ケガとゴミはお持ち帰り」～  
(かまくら子育て支援グループ懇談会)

### 1 取組の概要

「一日冒険遊び場」は、鎌倉市内で活動する子育て支援団体や、子育て中の母親グループのネットワーク組織である「かまくら子育て支援グループ懇談会」が、平成16年度より鎌倉市の委託を受けて実施している取組である。「竹筒でご飯を炊こう」や「大きなシャボン玉づくり」など、毎回テーマはあるが、テーマにこだわらずに参加者が自由に遊ぶ場であり、木工や竹切りなどの場面では、親がちょっと手伝うことはあるが、親は子どもが遊ぶのを「見守る」のが基本方針である。

現在は、「深沢多目的広場」と「野村総研跡地」の2箇所をメイン会場として、月に約1回、年に12～13回開催しており、時間は10時から14時までである。会場に、のこぎりやとんかちなどの木工用具、こま、けん玉などの昔遊びの道具や、「半ドラ」を使用してのたき火を用意し、各回ともプレイリーダー1～3人とスタッフ5～6人で運営している。近隣の大学の学生がサポートに来てくれることもある。



#### <参加者について>

参加者は、ベビーカーに乗せられてくるような乳幼児から中学生くらいまでの子どもと、その親であり、最近では父親の参加が増えている。小学校低学年くらいまでの子どもは、親と一緒に遊ぶ形が多いが、現代は遊び方を知らない親が多いので、親の方が興味を持ち、楽しんでくれるケースが多い。

土曜日に開催することが多いが、小学生はクラブ活動などで忙しいため、主な参加者は幼稚園の年中くらいの年齢の就学前の子どもである。ただし、この年齢は、親の見守りなしに自然の中で自由に遊ぶのは難しいこともあり、基本的にはプレイリーダーがいれば自由に遊べる小・中学生をターゲットとしている。

最近では参加者が増えてきており、平成23年7月27日の「流しそうめん」を行った回には、過去最多の子ども約200人、その親約100人の参加があった。開催の周知は、開催地近くの小学校へのチラシの配布や、市の広報紙への開催情報の掲載などの方法により行っている。

#### <取組の課題>

取組の課題としては、支援メンバーを広げていくこと、プレイリーダーの人的確保、次世

代のプレイリーダーの養成、また現在のメイン会場は、再開発予定地であったり、交通の便が悪いなどの短所もあるため、適当な常設場所を見つけることである。

## 2 事例の優れた点、子どもに与える好影響、他の活動に参考になる点

参加者の中に自主保育（保育園・幼稚園以外の、親の手で保育の場をつくる取組）の親子が多いという特徴があり、親は口出しをせず、自然の中で遊ばせるという姿勢が、自主保育以外の親子にも伝わっている。

本来は、子どもが自主的に遊びを作り出していく場であるが、各回毎にテーマを設定したところ、参加者が増えた。テーマに惹かれて参加しても、参加者は遊びたいように遊んでおり、こういう子どもたちが何度も足を運んでくれば、より自主性が育っていくのではないかと思われる。

「一日冒険遊び場」では、親（特に父親）が楽しく遊ぶ姿を見て、子どもも遊び方を知ることができる。また、時間の区切りがないので、時間の流れ方が違う。気持ちが大らかになれ、子どもは自分のペースで遊び、親もそれを待つことができる。

地域の理解を得るために、市の協力を得ながら、会場周辺地域の自治会の役員の方にあいさつ状を送ったり、民生委員の方などを巻き込みながら実施している。

また、取組を継続させるために、新しいスタッフの育成を心がけており、新メンバーに少しずつ仕事を割り振りながら、中心スタッフとして活動してもらえるようにしている。

## 3 10の視点をどのように取組に生かしているか

### 【1 大人がまず自ら行動し、子どもを巻き込む】

親子での経験の場となっており、親育ちの場ともなっている。

### 【3 自分にできることを見つけたり、つくり出していく気持ちを育てる】

毎回テーマはあるが、参加者が自由に遊ぶ場所。親は子どもが遊ぶのを「見守る」のが基本方針である。

### 【4 達成感・充実感を味わえる経験を増やし、子ども自身の潜在的な能力を引き出す】

のこぎりで竹を切るなど、普段はなかなか行うことのない木工体験などから、達成感や充実感を味わうことができる。

### 【5 異なる年齢・世代・立場の人が交流する】、

### 【7 全ての子どもに知ってもらい、参加してもらう】

参加者は、ベビーカーに乗せられてくるような子どもから中学生くらいまでと、その親であり、障害のある子どもの参加実績もある。

### 【9 子どもの気持ちを深く理解した上で、関係者を調整し提案できる人を取組に加える】

「一日冒険遊び場」は、プレイリーダーの資質にかかっている。現在のプレイリーダーは、ものづくりが得意であり、自然に関する知識も豊富で、子どもに対して一番危ないことだけ教え、後は失敗しても見守っているなど、言葉のかけ方が的確である。何も言わなくても、自分の姿を見て覚えてもらいたいというリーダーの姿勢が参加者に伝わっており、同じような人材をこれか



ら育てるのはなかなか難しいのではと感じている。

小学校3～4年生くらいの参加者の中には、自ら楽しく遊びながら、他の子に遊び方を示してくれる、子どものプレイリーダー的存在もいる。

ほか、取組全体に、以下の視点を含んでいる。

**【10 大人や子どもが継続して参加できるように、活動の核となる場所を定める】**

取組団体の概要	
団体名	かまくら子育て支援グループ懇談会
連絡先	0467-61-3891（鎌倉市こどもみらい部こどもみらい課）
団体のHP	<a href="http://kamakurakosodate.seesaa.net/">http://kamakurakosodate.seesaa.net/</a>
スタッフの人数	5～6人（一日冒険遊び場の場合）
予算規模	33.6万円／年（2.8万円／12回）※人件費及び材料費を含む
財源の確保方法・財源を得る工夫	鎌倉市からの委託事業費
指導者や支援者の確保方法	プレイリーダーは、個人のつながりにより確保。 大学生のサポーターは、別のイベントでのつながりなどから、直接声をかける。

「3 自分にできることを見つけたり、つくり出していく気持ちを育てる」

「4 達成感・充実感を味わえる経験を増やし、子ども自身の潜在的能力を引き出す」  
ほか実践例

## くだけけバザー ～子ども企画によるバザーへの出店～

(NPO法人くだけけ会)

### 1 取組の概要

NPO法人くだけけ会は、子どもの教育をテーマとした講座・講演等の企画・開催や、不登校やひきこもりなどの困難を抱える子どもへの支援を行っており、活動費を得るために、春と秋の年2回、南足柄市の関本公民館で「くだけけバザー」を実施している。

20年以上続いているこのバザーに、平成6年頃、不登校やひきこもり等の困難を抱える子どもが、射的や輪投げなどのゲームのお店を出店したのがきっかけとなり、今ではくだけけ会に出入りしている小学1年生から高校生くらいまでの7～8人の子どもが、困難を抱える子どもそうでない子どもと一緒に協力し合いながら、自主的に企画、準備、売り物の製作、値つけ、運営、片付け等を行う形でバザーに出店している。

くだけけバザーは定例行事なので、時期が近づくと、子どもたちが自主的に企画・準備を進め、クレープ屋さんやアクセサリ屋さんなど、各回毎に子どもが興味のあるお店を出している。今では、前日に売り物のお菓子を焼いて準備しておくなど、内容が充実しレベルアップしている。くだけけ会の会員となっている大人も手伝うが、危険なことや、どうしてもやってはいけないこと以外は、ほとんど口出ししない。

平成23年春のバザーは、お店の数が4店と多く、売り物の完成度も高く、かなりの売り上げがあった。売り上げの2割を震災の復興に寄付したため、子どもたちのやる気も上がっていたようである。

### <取組の課題等>

子どもがやりたい企画に合わせて道具を探すのが大変なこと。綿菓子のお店を出したいという希望があった時に、最初はどこで機械を借りられるのかがわからなかったが、最終的には貸してくれる所を見つけることができた。

### 2 事例の優れた点、子どもに与える好影響、他の活動に参考になる点

これまで特に問題は起きていないため、くだけけバザーへの出店については、子ども主体で、全て子どもに任せて実施している。大人は、相談があった時に話を聞く姿勢である。不登校の子に対しては、出店について働きかけはするけれど、親と一緒に会場に来て、買い物したり食べた



りするだけの参加でもいいからと、無理はさせないようにしている。

学校でのチラシの配布など、バザーのPRにも子どもが協力しており、不登校の子どもも、チラシを配布するから学校へ行かなきゃと言い登校したりしている。

バザー当日は、会計担当とお菓子を作る担当との役割分担をしたり、値引きや、閉店間際の売り歩きなど、子どもが臨機応変に工夫している。

また、くだけけバザーへの出店が、会の新メンバーとなった子どもにとって、活動へのデビューのよいきっかけとなっている。

地域の理解を得るために、バザー当日は、くだけけ会の会報を配布したり、会場でくだけけ会代表による子どもへのかかわり方に関するミニミニ講座を行っている。

子どもが安心して取り組めるよう、家族ぐるみでバザーに参加してもらったり、子どものお店が、子ども主体の活動であることを理解してもらうための広報をするなどの工夫をしている。

### 3 10の視点をどのように取組に生かしているか

【3 自分にできることを見つけたり、つくり出していく気持ちを育てる】、

【4 達成感・充実感を味わえる経験を増やし、子ども自身の潜在的能力を引き出す】

子どもがバザーへの出店について、自主的に企画、準備、売り物の製作、値つけ、運営、片付け等を行い、前回の経験などを元に子どもが自ら工夫することにより、出店の内容もレベルアップしている。

【5 異なる年齢・世代・立場の人が交流する】

バザーの参加者は幼稚園児からお年寄りまで様々であり、出店を通じて人と交流している。

ほか、取組全体に、次の視点を含んでいる。

【2 子どもと大人とが、互いによりパートナーとなって一緒に取り組む】

【10 大人や子どもが継続して参加できるように、活動の核となる場所を定める】

取組団体の概要	
団体名	NPO法人くだけけ会
所在地	南足柄市関本44-1
連絡先	(0465)74-4770 (電話・FAX)
団体のHP	<a href="http://www17.ocn.ne.jp/~kudakake/">http://www17.ocn.ne.jp/~kudakake/</a>
スタッフの人数	専従スタッフ4人、くだけけバザースタッフ(ボランティア)30人
予算規模	1,000万円
財源の確保方法・財源を得る工夫	会費、バザー、助成金
指導者や支援者の確保方法	会員の中から、経験者をお願いしている。

「5 異なる年齢・世代・立場の人が交流する」

「9 子どもの気持ちを深く理解した上で、関係者を調整し提案できる人を取組に加える」  
ほか実践例

## こどもキャンプ ～大人の目のない、子どもと青年だけのキャンプ～

(NPO法人 横浜こどものひろば)

### 1 取組の概要

「おやこ劇場」など、子どもたちの成長や発育段階に合わせた文化活動を展開している「NPO法人横浜こどものひろば」は、市内4エリアのおやこ劇場（おやこのひろば）が共同で設立したNPOであり、約1,380人の会員に向けた様々なイベント等（会員のみを対象とするものもある）を、各エリアの団体が企画・実施している。

その活動の一つが、1980年から行っている「こどもキャンプ」であり、各エリア毎に、小学4年生から高校生までの子どもと、大学生以上の青年とで企画・実施している。



#### <実施の流れ>

エリアによって細かいスケジュールは異なるが、春に青年が集まって、今年のこどもキャンプを引っ張っていく世代の人数の把握・体制づくりを行い、参加希望者向け説明会を行って参加者を募る。その後参加者だけで集まってグループ分けをし、こどもキャンプまでにグループ毎に3回ほど集まってミーティングを実施。こどもキャンプ直前には、荷物の詰め方などに関する全体の最終説明を行い、8月に3泊4日のこどもキャンプを実施する。秋には、参加者から感想文を提出してもらい、感想を話し合う会を行った後、保護者からもコメントをもらい、文集を作成する。

平成23年度は、各エリア毎に子ども・青年合わせて約20名～50名が参加した。参加者の男女比は半々、又は9割が男子など、エリアによって様々である。年齢制限のない「親子キャンプ」の参加者が、小学4年生になると「こどもキャンプ」に参加するようになるというケースが多く、両方のキャンプに参加する子どももいる。

こどもキャンプのスケジュールや食事のメニューは、子どもと青年とで決めており、子どもの発案を尊重しているため、果物を大量に持っていき、朝昼兼用で果物をしぼったジュースだけということもある。また、大人の目がないため、歯磨きや着替えをしない子も出てくる。

こどもキャンプの参加者の保護者からは「全身ウス汚れ、行きと同じズボンを履いて帰ってきた子どもが『帰ってきたくなかった』と言いながら、薪づくりで指にできた豆を誇らしげに見せてくれ、確かに一回り大きくなっていました」「このキャンプでまた子どもを伸ばしていただいた」などの感想が寄せられている。

こどもキャンプを支える青年は、以前自分もこどもキャンプに参加した大学生や社会人であり、受験などで参加しない時期があっても、会員である兄弟や友だちに誘われたりして、今度は活動を支える青年世代としてこどもキャンプに戻ってくるというケースがある。

### <取組の課題>

こどもキャンプを支える青年世代が少なく、2～3年経つと青年がいなくなる次世代の問題、複数のエリアでキャンプ先となっていた横浜市の道志青少年野外活動センターの廃止の可能性などがある。

## 2 事例の優れた点、子どもに与える好影響、他の活動に参考になる点

青年は、基本的には子どもたちの主体性に任せ、規制はしない。子どもたちの活動の記録など、サポート役に回るようにしている。平成23年度のこどもキャンプでは、小・中学生だけでご飯を作る企画があったが、成功し、青年がやっていることがきちんと伝わっているようである。

こどもキャンプでは非日常の生活が味わえるため、参加した子どもは、家に帰ってコンロで簡単に火が点くことに感動する。キャンプで自炊するため、家に帰っても自分で料理しようと思ったり、キャンプのメニューを家でも作ってみる子どもがいる。普段の生活を見つめ直し、感動する、見方が変わる機会となっている。

子どもだけのキャンプなので、中には働かない子もいる。仕事をしない子に対しては青年がサポートしたり、中学・高校生の班長が仕事を割り振ったりする。

子どもにとっては、4日間一緒に過ごした青年がいいモデルとなり、あこがれの存在となる。また、青年の側にとっても、こどもキャンプは子どもと一緒に学ぶ場となっている。

## 3 10の視点をどのように取組に生かしているか

### 【5 異なる年齢・世代・立場の人が交流する】

こどもキャンプを通じて、大学生と小学生など、年齢に関係なく友人になれるなど、多世代間の交流がある。学校以外の友だちができる貴重な場である。

### 【9 子どもの気持ちを深く理解した上で、関係者を調整し提案できる人を取組に加える】

こどもキャンプでは、主に青年がそのような役割を果たしているが、同年齢でも調整役になることができる。

ほか、取組全体に、以下の視点を含んでいる。

### 【3 自分にできることを見つけたり、作り出していく気持ちを育てる】

### 【4 達成感・充実感を味わえる経験を増やし、子ども自身の潜在的な能力を引き出す】

### 【10 大人や子どもが継続して参加できるように、活動の核となる場所を定める】

取組団体の概要	
団体名	NPO法人 横浜こどものひろば
所在地	横浜市中区野毛町2-90-302
連絡先	電話 (045)243-0762
団体のHP	<a href="http://homepage1.nifty.com/kids-arts-yokohama/">http://homepage1.nifty.com/kids-arts-yokohama/</a>

## 川崎市子ども会議

(川崎市)

<文責：喜多明人委員>

### 1 取組の概要

「川崎市子どもの権利に関する条例」(以下、子どもの権利条例とする)の第30条に決められているもので、子どもが自分たちの手で子どもの権利や川崎のまちづくりなどについて活動を進めていくもの。10歳から18歳未満の子どもを構成員とし、毎月2回会議を実施し、エコ、福祉、学校などテーマを決めてグループごとに活動を行ったり、全体会議で話し合った結果について市長への提案を行うなどしている。



### 2 事例の優れた点、子どもに与える好影響、他の活動に参考になる点

#### <事例の優れた点>

- ・ 川崎市のまちづくり・子ども施策等への意見提言機能を有すること
- ・ 川崎市子ども会議は、51ある中学校区の子ども会議、7行政区にある子ども会議の活動や意見をふまえ、かつ1年間の実地調査・学習活動を通してまとめられた意見提言書を、年度末の3月に川崎市長に対して提出してきた。その範囲は、地域・まちづくりに関するものから、学校づくりに関するもの、広く社会に関するものまで、幅広く意見提言している。
- ・ 川崎市は、この意見提言に対して誠実に対応することが求められ、担当部局の検討をへて、市長から子ども会議に回答書が提出されてきた。そのなかで、子どもの意見で実現したものもあるが、実現しなかったことについても、市は説明責任を果たすことが求められてきた。
- ・ この川崎市子ども会議を推進していくために、①常設の「川崎市子ども会議推進委員会」が活動し、かつ、毎年②子ども会議サポーター養成講座(5~10回受講)が開催され、子ども会議のサポーターが子ども参画の支援、ファシリテートを行ってきた。
- ・ 推進委員会の構成は、7行政区の地域教育会議(地域住民と学校関係者で構成)、学校長、教育委員会や市民・こども局の職員および学識経験者(喜多=副委員長)によっており、主には子ども会議のバックアップを行ってきた。



＜子どもに与える好影響、他の活動に参考になる点＞

- ・ 自己肯定感の向上、能動的な活動意欲の向上
- ・ まちづくりの新たな主体の形成
- ・ 地域のコミュニティ・共同体としての社会の再構築

3 10の視点をどのように取組に生かしているか

【6 実際の社会に関わりながら、社会への関心や具体的な行動につなげていく】

川崎市子ども会議は、51ある中学校区の子ども会議、7行政区にある子ども会議の活動や意見をふまえ、かつ1年間の实地調査・学習活動を通してまとめられた意見提言書を、年度末の3月に川崎市長に対して提出してきた。その範囲は、地域・まちづくりに関するものから、学校づくりに関するもの、広く社会に関するものまで、幅広く意見提言している。

川崎市は、この意見提言に対して誠実に対応することが求められ、担当部局の検討をへて、市長から子ども会議に回答書が提出されてきた。そのなかで、子どもの意見で実現したものもあるが、実現しなかったことについても、市は説明責任を果たすことが求められてきた。

ほか、取組全体に、以下の視点を含んでいる。

【10 大人や子どもが継続して参加できるように、活動の核となる場所を定める】

取組団体の概要	
団体名	川崎市
所在地	川崎市川崎区宮本町6
連絡先	電話 (044)200-3309 (川崎市教育委員会生涯学習推進課)
団体のHP	<a href="http://www.city.kawasaki.jp/88/88syogai/home/kodomokaigi/index.htm">http://www.city.kawasaki.jp/88/88syogai/home/kodomokaigi/index.htm</a>

## こどもまち探検ワークショップ

(和田町タウンマネジメント協議会・地域と子どもプロジェクトチーム)

<文責：三輪律江委員>

### 1 取組の概要

横浜市保土ヶ谷区和田地区では、駅周辺に広がる近隣商店街の衰退への懸念が以前から指摘され、保土ヶ谷区からの呼びかけにより、2001年4月から、横浜国立大学の建築学科の教員・学生と和田町商店街の商学交流事業として、具体的にはアンケート実態調査、様々なイベントやワークショップ、社会実験、整備提案等を実施しながらの、商店街を中心としたまちづくりの実践とその組織体制づくりのサポートを行ってきた。



一方、昔ながらの身近な商店街の活性化をめざす過程で、活性化のためには住みよいまちづくりを進めることがまず重要であるとの共通認識に早い段階でシフトし、商店街組織に加え、地元町内会や近隣小中学校との繋がりを深めてきた。2002年度に、この一環として実施した近隣3小学校への実態調査で、商店街やお店を買い物目的以外に散策する子どもの姿が浮き彫りとなり、まちに対して開かれた構造を持つ商店街が、地域の中で子どもを見守り育てていく役割を担う可能性を持っていることが明らかとなった。



子ども視点による取組の重要性については、以前から地元町内会の中心的関心事の一つであったが、実態調査の結果等を含め、子ども視点の重要性が認識される中で具体的な活動が模索され、2003年度に、子どもたちに地域の実情と課題を知る場と機会を構築し、この取組を継続することで、地域と子どもが親和的な関係に発展することを目標とした、まち学習の第一回目のワークショップが実施された。2005年度からは、商学交流事業の体制は和田町タウンマネジメント協議会という組織体制に発展的に受け継がれ、まち探検ワークショップも、この協議会として取り組む事業として位置づけられている。町内会独自事業ではないため、場合によっては商店街や小中学校、他の団体等の、地域の多様な主体が連携して初めて実現できるものをめざす取組として、毎年継続実施されている。

具体的には、1年に1テーマを基本に「歴史」「環境」「安全・安心」「福祉」の4つのテーマを選定し、適宜地域における話題を組み込みながら、オリジナルなプログラム開発をめざした。特に2005年度、2009年度、2010年度は、地域の緊急課題を受けてテーマ設定したものになっている。実際のプログラムや道具・材料の開発・準備は主として大学側が担い、地域での協議を経て最終決定するプロセスとしている。



特徴的・発展的なワークショップとしては、公園再生の取組と子ども110番の家拡充に繋がったもの（2005年度「安全・安心」）、初年度小学3年生だった子どもが、中学生になるのをきっかけに中学生スタッフとして参加したもの（2007年度「歴史」、2008年度「環境」）、要援護者のリストアップと「いっとき支援場所」の選定作業という、町内会活動と連動して実施した2年がかりのもの（2009年度「安全・安心」、2010年度「福祉」）が挙げられる。

## 2 事例の優れた点、子どもに与える好影響、他の活動に参考になる点

- ・ 事業を地域にしかける前に、そのエリアの子どもたちの活動環境に関する実態を把握する調査を実施し、その結果を地域の様々な主体と共有することで、子ども視点での事業を始めるきっかけとなっている。
- ・ テーマを毎年変える（1年目－歴史、2年目－環境、3年目－安全・安心、4年目－福祉）ことで、まち学習が始まる小学3年生以後毎年の継続参加を促すことが可能となり、同じまちを異なる複層的な視点で捉える、また、参加者がその後の中学生スタッフとなるといった仕組みの工夫がされている。
- ・ 地域の方が「ポイントマン」になることで人的資源を発掘し、「日常的には子どもとは直接関係ない大人」と「子ども」との接点を創出している。
- ・ 「子どもチーム」だけでなく「大人チーム」として一緒に参加することで、違った目線からの新しい課題や価値の発見に繋がっている。また、地域の緊急課題とリンクしたテーマ設定をすることで、内外の地域の様々な主体を巻き込むことができ、これらのことが、地域の大人たちの変化だけでなく、高次の具体的なまちづくり活動へ繋がっている。例えば、ごみ問題への関心の高まり（2004年度～）、落書きなどの荒廃した公園の再生活動への発展（2005年度～）、子ども110番の家の増加（町内会18軒追加、商店街5店→35店へ）（2005年度～）、安全・安心のまち宣言（2005年度～）、商店街キッズワーカー（こども販売員）の定常化（2006年度～）等。

## 3 10の視点をどのように取組に生かしているか

### 【6 実際の社会に関わりながら、社会への関心や具体的な行動につなげていく】

2002年度に実施した近隣3小学校への実態調査で、商店街やお店を買い物目的以外に散策する子どもの姿が浮き彫りとなり、まちに対して開かれた構造を持つ商店街が、地域の中で子どもを見守り育ていく役割を担う可能性を持っていることが明らかとなった。

実態調査の結果等を含め、子ども視点の重要性が認識される中で、具体的な活動が模索され、2003年度に、子どもたちに地域の実情と課題を知る場と機会を構築し、この取組を継続することで、地域と子どもが親和的な関係に発展することを目標とした、まち学習の第一回目のワークショップが実施された。

ほか、取組全体に、以下の視点を含んでいる。

【1 大人がまず自ら行動し、子どもを巻き込む】

【5 異なる年齢・世代・立場の人が交流する】

【8 協力者とは、互いのメリットとなる関係になるよう工夫する】

【10 大人や子どもが継続して参加できるように、活動の核となる場所を定める】

取組団体の概要	
団体名	和田町タウンマネジメント協議会内 有限責任事業組合（LLP）地域とこどもプロジェクト
所在地	横浜市保土ヶ谷区和田町
連絡先	藤岡 泰寛 （横浜国立大学都市イノベーション研究院（建築学教室）准教授／LLP組合員） 電話（045）339-4067 e-mail yfujioka@ynu.ac.jp
スタッフの人数	7人
予算規模	200万円／年
財源の確保方法・財源を得る工夫	地域とこどもプロジェクトチームは、2011年度より、地域の商店街、町内会、大学教員等の地域有志出資型によるまちづくりLLP（有限責任事業組合）組織とすることで財源を確保し、引き続き地域との企画調整役を担いながら、より一層活動を充実させるべく取り組んでいる。
指導者や支援者の確保方法	地元小中学校への声掛けと共に、テーマごとに地域作業所、関係行政機関、その他地域の大人に関わってもらう方法を工夫。

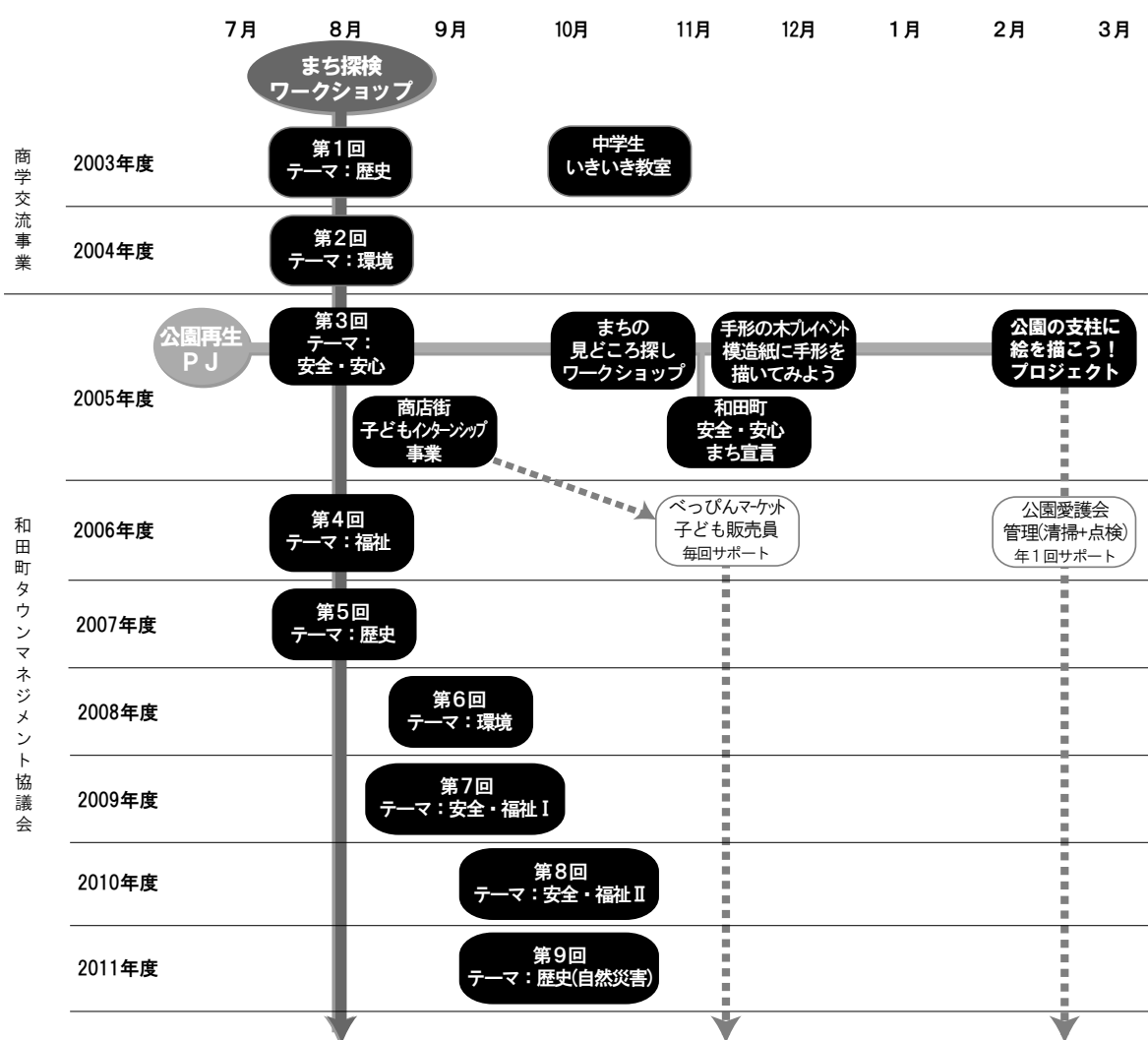


図 こどもまち探検ワークショップ 活動の変遷

## すべての子どもが豊かに遊べる東京を

### ～次世代育成支援行動計画に関する子どもたちの意見調査～

(TOKYO PLAY)

<文責：武田信子委員>

#### 1 取組の概要

##### <取組の背景>

東京には0～18歳までの子どもが約187万人暮らしている。それぞれに地域の状況は違うが、交通事故の危険や不審者からの危害への不安、将来の学歴社会に対する不安、遊び場でのけがへの不安やそこからくる管理責任への不安など、都内全域に共通する様々な要因が、子どもがのびのびと遊ぶことを難しくしている。また、障がいや病気、貧困なども、子どもが遊ぶことへの制約となっている場合もある。そして、ゲーム機の普及によって、子ども自身が外で遊ぶことを身近に感じていない場合もある。

TOKYO PLAYは、そうした背景や環境のちがいに関わらず「すべての子どもが豊かに遊べる東京を」というミッションを掲げ、子どもの成長と福祉の基礎である「遊ぶことの大切さ」を行政・実践者・研究者・企業・一般市民に広げる活動をするために設立された。そして、そのミッションの実現のために、調査研究やキャンペーン、政策提言などの幅広いプロジェクトを実施している。

多くの人が今の環境について愚痴はこぼすが、誰がどうすれば改善できるのかは、誰も示すことができないというのが、今の状況ではないだろうか。そうした社会状況の改善は、社会全体のプロジェクトが必要になる。ただ、一市区町村での取組や、一業務分野での取組では効果がうすい。それが、TOKYO PLAYの名にも表れているように、広域かつ他業種他分野の人が動ける仕組みづくりの必要性でもある。こうした機能は、重要な社会的基盤のひとつと言えるだろう。

##### <TOKYO PLAYとプロジェクトの概要>

TOKYO PLAYは、2010年に設立された。その前身は、2007年に児童館・冒険遊び場・学童保育等の職員や保育・建築などの研究者などを中心に設立された「子どもの遊びと大人の役割研究会」だった。現在も、子どもの遊びに関わる実践者や研究者、一般市民、学生など、幅広い背景と年齢層が活動に参加している。会員は自身に関心のあるプロジェクトにそれぞれ参加している。

現在、主なプロジェクトとして、「やめ×やめプロジェクト」（公園の禁止看板の写真コレクションをしながら、そのあり方を考える）、

「大和日英基金プロジェクト」（大和証券の日英交流助成金を通じたロンドン視察と東京でのフォ



グループヒアリングでは、思いついたことを  
ポストイットに書き模造紙に貼っていった。

ーラム開催)、「東京子育てスタンダード・モデル事業」(子どもが遊ぶことの大切さを広めるためのワークショップの開発)、「子どもの遊びについてのアンケート」などを実施している。

平成22年度は、東京都から「次世代育成支援東京都行動計画(後期)の評価に係る事業」を受託し、都内300人の子どもを対象にグループヒアリングを行った。都内の児童館・コミュニティセンター・プレーパーク、児童養護施設のグループホームなどの子ども(小学4年生～高校3年生世代)約300人(とひろば型の子育て支援拠点に來所する乳幼児の保護者約100人)を対象にグループヒアリングを行い、子どもたちが普段封印している生の声を拾う試みを行った。

当事者である子どもの意見を聞く試みは多くの地方自治体が行っているが、アンケートで済ませることも多く、これだけの人数に直接ヒアリングを行うということは少ないだろう。結果の扱いも、実施し、報告するだけで終わってしまい十分に活用されないという事例が多い中、東京都の試みは注目されるだろう。

## 2 事例の優れた点、子どもに与える好影響、他の活動に参考になる点

日本においては、参加型と言われる子どもたちの活動も、実際は企画が大人から始まり、もろもろの準備から実施、まとめに至るまで、大人が動かしてしまっていることが少なくない。そのような現状では、何を企画するにあたって、まず子ども自身が何をどう考えているのか、を實際の子どもたちから聞く、という取組が活動の条件整備、地ならしのために必要であると考えられる。今回の取組は、次の行動計画の下地になる調査として、あるいは一般的に子どもたちの参画を促す調査として成功した、先進的で貴重な事例であるといえよう。

本事例では、グループヒアリングにおいて、子どもたちの声が出やすくなる工夫として、

- ① 聞き手を、子どもたちの声を真剣に受け止めるエネルギーを持っている若い世代(20代後半から30代前半)とした。
- ② 聞き手は、事前に「聞くこと」に関する研修を受け、ヒアリングの後で振り返りも行った。
- ③ 学校以外の場を会場とした。
- ④ 子どもたちの不安軽減と仲間づくりのために、6人から8人のグループでのヒアリングの形をとり、徐々に交流を深めた。
- ⑤ 模造紙に自分の思いついたことをポストイットで書いたり貼ったりする作業を取り入れることで、自分の発言が明確に形となって現れ、子どもたちの発言を促進する効果を生んだ。

子どもたちは、当初はおずおずとだったが、次第に熱を帯び、規定の時間を超えて話したがるという様子が見られた。「何を言ってもいいよ」ということを繰り返し伝えたが、子どもたちは、本当に何を言ってもいいのかどうかを試してきた。「そんなバカな答えでもいいのか」というような内容までも受け止められると、子どもたちは一斉に話し出した。200枚以上のポストイットを貼ったグループもあった。

一方、他の子どもの発言をすぐに完全否定するという子どもが意外と多くいたため、自由な発言を守ることに時間をかけた。同時に、言いたくないという気持ちも保障した。

参加した子どもたちからは「すっきりした」という感想が多く出された。また「友達も含めて、いろいろな人の意見が聞けて勉強になった」「東京のこと、親のこと、学校のことなど、あまりこういうことをしゃべり慣れていないから、普段から聞かれていればもっと言えるようになっていたと思う」というような感想も聞かれた。

### 3 10の視点をどのように取組に生かしているか

結果は「次世代育成支援東京都行動計画（後期）の評価に係る調査報告書」としてまとめられた。今後、TOKYO PLAYとしては

- ① 協力してくれた子どもたちに、結果をフィードバックするためのニュースレターを発行したいと考えている。
- ② 結果について、大人も子どもも一緒に考えるためのフォーラムを開きたいと考えている。
- ③ 今回の経験を踏まえて「子どもの声を聞く」ことについて勉強したい人たちに向けて、講座や研修を開きたいと考えている。

現実には意見が施策に反映されるかどうかは、困難かつ不明であるが、まずは意見を聞く姿勢、それを議論の俎上にあげる姿勢が第一歩であり、評価されてよいと考えられる。

そして、これらの企画においては、10のいずれの視点も生かされると考えられる。

結果を継続的に地域の子どもたちの生活に活かしていくため、先に記述した今後の3つの計画が実現するよう東京都に働きかけていく。計画の実行が10の視点による行動の実現となるだろう。

取組全体に、以下の視点を含んでいる。

- 【1 大人がまず自ら行動し、子どもを巻き込む】
- 【2 子どもと大人とが、互いによいパートナーとなって一緒に取り組む】
- 【3 自分にできることを見つけたり、作り出していく気持ちを育てる】
- 【4 達成感・充実感を味わえる経験を増やし、子ども自身の潜在的な能力を引き出す】
- 【6 実際の社会に関わりながら、社会への関心や具体的な行動につなげていく】
- 【8 協力者とは、互いのメリットとなる関係になるよう工夫する】
- 【9 子ども気持ちを深く理解した上で、関係者を調整し提案できる人を取組に加える】

取組団体の概要	
団体名	TOKYO PLAY
所在地	〒157-0072 東京都世田谷区祖師谷4-16-5-201
団体のHP	<a href="http://www.tokyoplay.jp/">http://www.tokyoplay.jp/</a>
スタッフの人数	15人（常勤の有給スタッフはなし）
予算規模	1,000,000円／年（2011年）
財源の確保方法・財源を得る工夫	業務委託などを受けられるよう、子育てに関する委員会などに積極的に参加し、人脈を広げるための努力をしている。
指導者や支援者の確保方法	月1回の頻度で定例会を開催し、各プロジェクトの報告や新プロジェクトの展開について積極的な議論を重ねている。

**秋津っ子バザー**

～現金のやり取りを通して生活者としての基礎的な素養を身につける不用品バザー～

(秋津コミュニティ)

&lt;文責：岸裕司委員&gt;

**1 取組の概要**

社会生活では現金のやりとりは不可欠。しかし、学校教育では一般にモノの売り買いなどでの現金のやり取りは行わない。また、子どもの周りにはおもちゃなどのモノがあふれている。しかし、子ども自身ではなかなか片づけないことが親の悩み。一方子どもは、地域の祭りでは大人が取り仕切るために主体性が発揮できずに「お客さん」になりがちである。

そこで、子ども・学校・家庭（PTA）・地域（秋津コミュニティ）の四者が協働し、子ども自身が自分のおもちゃ箱を片づけて、親と相談したうえで不要なモノを地域主催の秋津まつりの会場である学校に持参し、一品上限200円を限度に子ども同士で売り買いする「秋津っ子バザー」を実施。

この事例では、子ども・学校・家庭・地域の四者の課題の緩和をはかるとともに、収益金の一部をボランティア団体に寄付することを通し、子どもの参画と社会性を身につけさせる行事として1997年から毎年開催。近年は、学校の先生が引率しての生活科で育てた花の苗の販売などの学年参加も増えてきた。

**2 事例の優れた点、子どもに与える好影響、他の活動に参考になる点**

子どもは社会的な存在であり、子ども自身が社会性を身につけることなくして他者との共同生活は成り立たない。特に現代は、個人の自由を尊重するとともに自律的に判断し、かつ自分とは異なる考え方の外国人を含む他者との協調や共生も大切な社会になっている。だからこそ、子どもの周りにはさまざまな体験や経験ができる環境が必要である。

体験や経験を積むことと同時に、子ども自身が主体的に計画に関わり、意思決定に参画できるようにすることも大切である。そのような環境の醸成には、大人の理解と適切な関与が不可欠である。

**3 10の視点をどのように取組に生かしているか****【1 大人がまず自ら行動し、子どもを巻き込む】**

大人が企画し、場所や方法などの概略を決め、子どもの意思による自由な参画を仕組んでいる。

子どもへの告知は、対象者全てに対し学校からチラシを配布する。参画の事前届け出はしない。楽しければ参画するし、楽しくなければ参画しないからである。

## 【2 子どもと大人とが、互いによいパートナーとなって一緒に取り組む】

子どもであっても意思を尊重し、大人と同じようにいっさいの強制をしない配慮で運営している。すなわち子どもと大人はパートナーであることを、大人が認識することが大切である。

## 【3 自分にできることを見つけたり、作り出していく気持ちを育てる】

ルールはチラシに書いてあり、大人はそのルールを見守ること。

時には、参画している子どもの親が場所どりや値段付けなどをしてしまっている場面もあるが、主催者が親に対して「子どもに任せて親は口出しをしないように」指導する。

また、モノはただ置いておくだけでは売れないことから、値引きしたりおまけを付けて、商品の付加価値を増して販売するなどの工夫を子どもたちはするものである。

時には、他から買ったモノを自分の販売所で高くして売る工夫もみられる。そんな子ども自身が見つけた「生きる力」を、大人は尊重することが大切である。

## 【4 達成感・充実感を味わえる経験を増やし、子ども自身の潜在的な能力を引き出す】

子どもは、楽しかったり充実感を味わえれば、翌年も参画するものである。そのような、どの子ども潜在的に持っている能力を大人は「待つ」姿勢が大切である。その大人の姿勢を「子育て」支援と認識している。

## 【5 異なる年齢・世代・立場の人が交流する】

子どもバザーと併設して大人のバザーも実施することから、自ずと多世代交流の場になっている。そのように設営することが大切である。

## 【6 実際の社会に関わりながら、社会への関心や具体的な行動につなげていく】

このバザーを始めた動機は、現実社会における生活者としての能力を、楽しみながら身につけ高め合うことである。

## 【7 全ての子どもに知ってもらい、参加してもらう】

対象者全ての子どもへの告知を毎回実施。参画してもしなくても自由である。告知を徹底し、漏れをなくすことが大人のすべきことである。

## 【8 協力者とは、互いのメリットとなる関係になるよう工夫する】

この場合の協力者の一つには、会場を提供している学校がある。そこで、初めから学校にメリットを生むように配慮している。

学校のメリットには、学校教育上では扱いにくい現金教育＝賢い生活者教育が実現できること、生活科の授業で栽培した花の苗を親やお年寄りに安価で販売して喜ばれ、かつ子どもの自尊感情や売る行為を通してのコミュニケーション能力の向上が図られること、売上金の10%をボランティア団体に寄付することによるボランティア体験学習ができることなどがある。

**【9 子どもの気持ちを深く理解した上で、関係者を調整し提案できる人を取組に加える】**

この視点は、継続することにより若い親をスタッフに育て引き継ぐことが大切である。

その点、小学校での開催であることから、毎年新入生とともに新人の若い親もやってくる構造になっていることが重要である。

ほか、取組全体に、以下の視点を含んでいる。

**【10 大人や子どもが継続して参加できるように、活動の核となる場所を定める】**

参考文献「学校を基地にお父さんのまちづくり」岸裕司著 太郎次郎社

取組団体の概要	
団体名	秋津コミュニティ
所在地	千葉県習志野市秋津3-1-1 習志野市立秋津小学校コミュニティルーム内
連絡先	下記のHP内に連絡・見学案内あり (平成24年春にリニューアル完了予定)
団体のHP	<a href="http://www.akitsu.info/">http://www.akitsu.info/</a>
スタッフの人数	運営委員51名
予算規模	約20万円/年の自主財源+市より3万円/年及び水道光熱費代
財源の確保方法・ 財源を得る工夫	地域祭りでのお化け屋敷や、秋津っ子バザーにおける大人のバザー売上
指導者や支援者の 確保方法	学校で知り合う子縁(子どもを通じた大人のご縁)による



## ヒア・バイ・ライト

(英国若者協会 (NYA) (英国))

<文責：武田信子委員>

### 1 取組の概要

英国若者協会 (NYA) は、全ての若者が社会の中で彼らの可能性を発揮できるようにすることを支援するために、地方公共団体、ボランティア団体、若者自身の三者が対等に連携した共同体であり、政府から独立した民間団体である。

現在は「若者の社会参画の推進」「ユースワークの専門性向上」「政策立案・提言」「協力体制の構築」などを柱に、ユースワークの政策づくりに寄与する出版物の作成、ユースワーカー養成、サービスの基盤作り、若者の生活体験、公共政策の若者への影響調査などの分野で活動している。

2000年から「ヒア・バイ・ライト (Hear by Right)」という若者の施策への参画を促進するツールを開発し、その普及に取り組んできた。「ヒア・バイ・ライト」は、全国どこでも同じ価値観で子ども・若者の参画を進めるためのツールであり、子ども・若者の参画に関わる活動をしている6つの団体が連合し(The Participation Works Network for England)、広報活動やワークショップ、コンサルティング事業を行ったり、地域団体やボランティア団体などの実践者のネットワークづくりなどを行ったりしている。

### 2 事例の優れた点、子どもに与える好影響、他の活動に参考になる点

日本でも沢山の「子どものための」事業や活動が展開されているが、これらの実施にあたって、子どもたちの視点は入っているだろうか。あるいはこれらの企画、準備、実行、振り返りに、子どもたちは参画しているだろうか。

「ヒア・バイ・ライト」はいかなる施策や事業であっても活用できるように工夫された、画期的な「子どもの参画の視点からの活動評価ツール」であり、このツールを用いることによって、すべての施策や事業を子どもの視点からチェックすることができる。

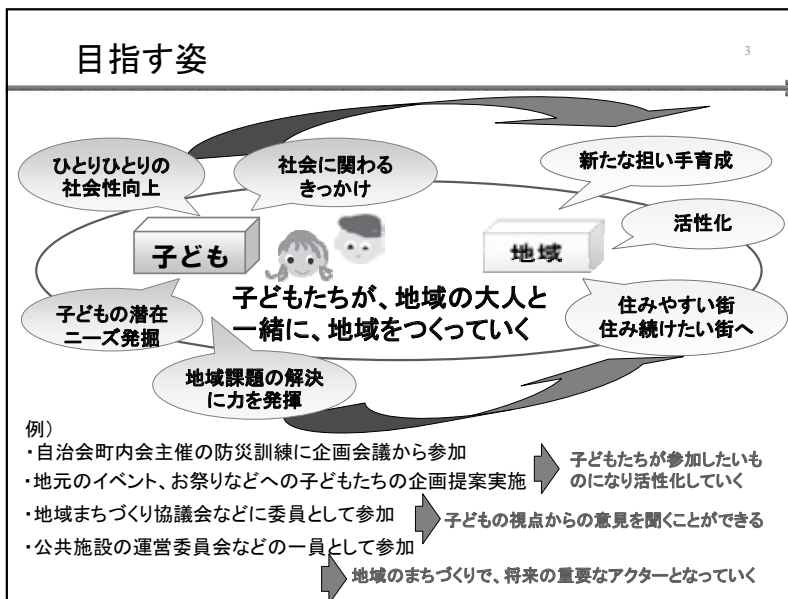
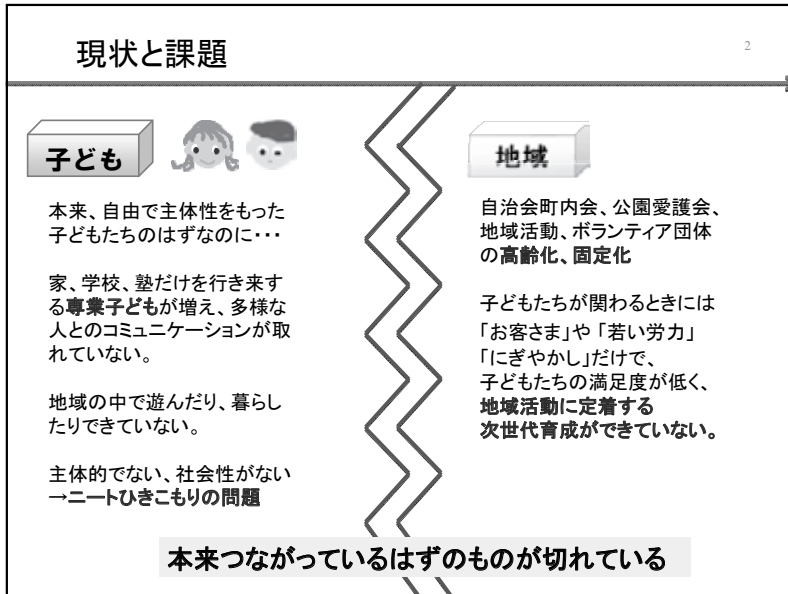
例えば、本協議会のような会議の運営方法や決定内容をチェックすることもできるし(実際のところ、今回の10の視点によるチェックのアイデアは、ヒア・バイ・ライトから発想したものである)、次世代育成支援行動計画のような計画を検証していくこともできる。具体的には「子ども・若者の参画の仕組み作りについて、彼らの意見を求めたり、検討作業に関わってもらったりしている」「子ども・若者の参画を裏打ちする予算が確保されている」という段階から、「子ども・若者はその組織や協力団体の職員や管理職の募集・選考及び任命に大きな役割を果たしている」という段階まで49の項目について明確な根拠を基に判断を下し、改善策を予算やスタッフの配置まで含めて提言し、子どもの参画が実現するように働きかけるというものである。

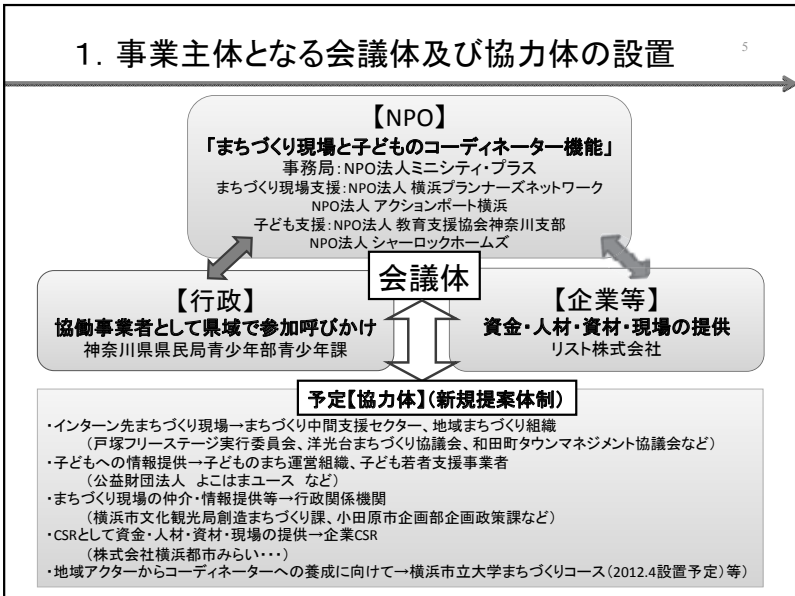
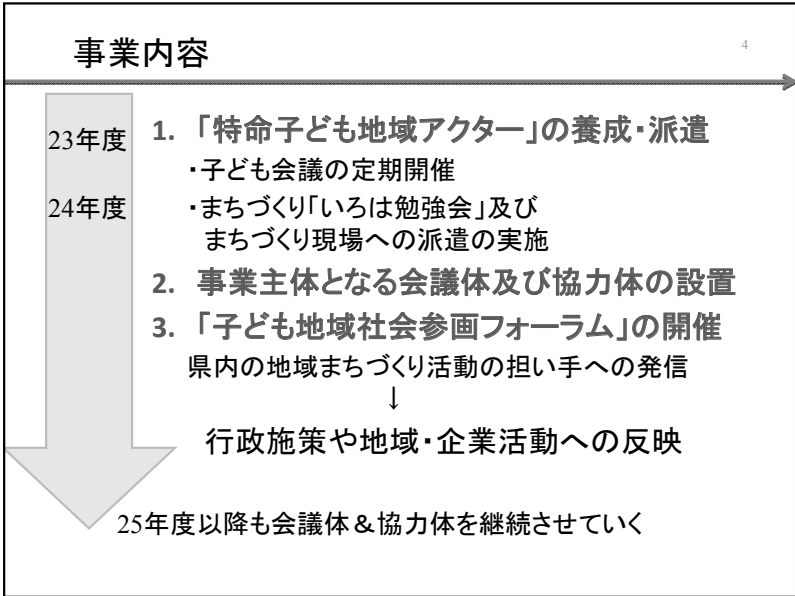
この作業を行うことによって、大人も子どもも、子どもの持つ力を再認識し、両者ともに協働して社会を創っていくことの大切さを知り、それを具体的に行動化していくことができる。日本でも数回ワークショップが実施されたが、今後の活用可能性は高く、日本版の工夫と活動の実現が待たれる。

参考文献「ヒア・バイ・ライトの理念と手法」奥田陸子編著・監修 萌文社  
(団体のHP <http://www.nya.org.uk/>)

5 今後の取組の方向性に関する参考資料  
 (神奈川県子ども地域アクター養成アクション)

<事業説明資料>





# 資料編

平成 24 年 3 月 27 日

神奈川県知事 黒 岩 祐 治 様

神奈川県青少年問題協議会

会 長 黒 岩 祐 治

「地域で育む子どもの社会性～子どもの社会参画をすすめるために～」  
について（報告）

本協議会は、平成 22 年度と 23 年度において、標記テーマについて審議を行い、  
別紙のとおり審議結果をとりまとめましたので報告します。

平成 22・23 年期神奈川県青少年問題協議会審議経過

開催日	会議	主な審議内容
平成22年 8月2日(月)	第1回 協議会	<ul style="list-style-type: none"> <li>副会長の選出</li> <li>平成22・23年期の審議テーマの決定</li> <li>企画調整部会委員の選出</li> <li>青少年保護育成条例の改正について</li> <li>青少年育成指針の改定について</li> </ul>
同日	第1回企画 調整部会	<ul style="list-style-type: none"> <li>部会長・副部会長の選出</li> <li>協議スケジュールの決定</li> <li>意見発表(高橋部会長)</li> </ul>
9月22日(水)	第2回企画 調整部会	<ul style="list-style-type: none"> <li>青少年育成指針(素案)について</li> <li>意見発表(喜多委員、三輪委員)</li> <li>課題整理</li> </ul>
12月2日(木)	第3回企画 調整部会	<ul style="list-style-type: none"> <li>青少年育成指針(案)について</li> <li>意見発表(岸委員、武田委員)</li> <li>課題整理</li> <li>中間報告(骨子案)の検討等</li> </ul>
平成23年 2月1日(火)	第4回企画 調整部会	<ul style="list-style-type: none"> <li>中間報告(案)の検討</li> <li>平成23年度以降の展開について</li> </ul>
3月24日(木)	第2回 協議会	<ul style="list-style-type: none"> <li>中間報告</li> <li>平成23年度について(特命子ども委員)</li> </ul>
同日	第5回企画 調整部会	<ul style="list-style-type: none"> <li>平成23年度の展開について</li> </ul>
5月17日(火)	第6回企画 調整部会	<ul style="list-style-type: none"> <li>ヒアリング調査を実施する団体について</li> <li>第8回企画調整部会(フォーラム)の開催について</li> <li>特命子ども委員の選考及びワーキング会議について</li> <li>最終報告(骨子)について</li> </ul>
7月28日(木)	第3回 協議会	<ul style="list-style-type: none"> <li>新任委員の委嘱</li> <li>特命子ども委員の任命</li> </ul>
同日	第7回企画 調整部会	<ul style="list-style-type: none"> <li>第8回企画調整部会(フォーラム)について</li> <li>県民向け事例集(素案)について</li> </ul>
10月15日(土)	第8回企画 調整部会	「子ども力全開120% ～かながわ 子どもの社会参画をすすめるフォーラム～」の開催
11月13日(日)	第9回企画 調整部会	<ul style="list-style-type: none"> <li>最終報告(素案)について</li> <li>県民向け事例集(案)について等</li> </ul>
平成24年 1月27日(金)	第10回企画 調整部会	<ul style="list-style-type: none"> <li>最終報告(案)について</li> <li>事例集(案)について</li> </ul>
同日	第4回 協議会	<ul style="list-style-type: none"> <li>最終報告(案)について</li> <li>かながわ 子どもの社会参画をすすめるシンボルキャラクターについて</li> </ul>

## 平成 22・23 年期神奈川県青少年問題協議会委員

会 長	黒岩 祐治	(神奈川県知事 平成 23 年 4 月 23 日～)
	松沢 成文	(神奈川県知事 ～平成 23 年 4 月 22 日)
副 会 長	笹井 宏益	(国立教育政策研究所総括研究官) *
部 会 長	高橋 勝	(横浜国立大学教育人間科学部教授) *
副部会長	小杉 礼子	(独立行政法人労働政策研究・研修機構統括研究員) *
委 員	東 恵子	(公募委員 (NPO 法人シャーロックホームズ事務局)) *
	小川 久仁子	(神奈川県議会議員 ～平成 23 年 6 月 30 日)
	加藤 元弥	(神奈川県議会議員 平成 23 年 7 月 1 日～)
	岸 裕司	(秋津コミュニティ顧問/埼玉大学教育学部非常勤講師) *
	喜多 明人	(早稲田大学文学学術院教授) *
	北井 宏昭	(神奈川県議会議員 ～平成 23 年 6 月 30 日)
	坂元 章	(お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科教授) *
	武田 信子	(武蔵大学人文学部教授) *
	野崎 徹	(神奈川県 P T A 協議会専務理事 平成 23 年 7 月 1 日～) *
	松田 良昭	(神奈川県児童福祉審議会委員長)
	三輪 律江	(横浜国立大学非常勤講師 博士 (工学) / NPO 法人ミニシティ・プラス理事長) *
	山下 昌一朗	(神奈川県議会議員 平成 23 年 7 月 1 日～)
	横山 敏美	(神奈川県 P T A 協議会常任理事 ～平成 23 年 6 月 30 日) *

- 任期は平成 22 年 7 月 1 日～平成 24 年 6 月 30 日
- \*印は企画調整部会委員
- 役職名は就任当時

## 神奈川県青少年問題協議会 特命子ども委員

安達 妃美  
加藤 わかば  
菅 千華子  
菅原 朱里  
宮坂 和郁奈  
宮島 菜摘  
山口 大地郎  
山田 恵美子

